一般国道10号

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

桐ケ迫遺跡

峯添遺跡

1994年

大分県教育委員会

一般国道10号

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

桐ケ迫遺跡

峯添遺跡

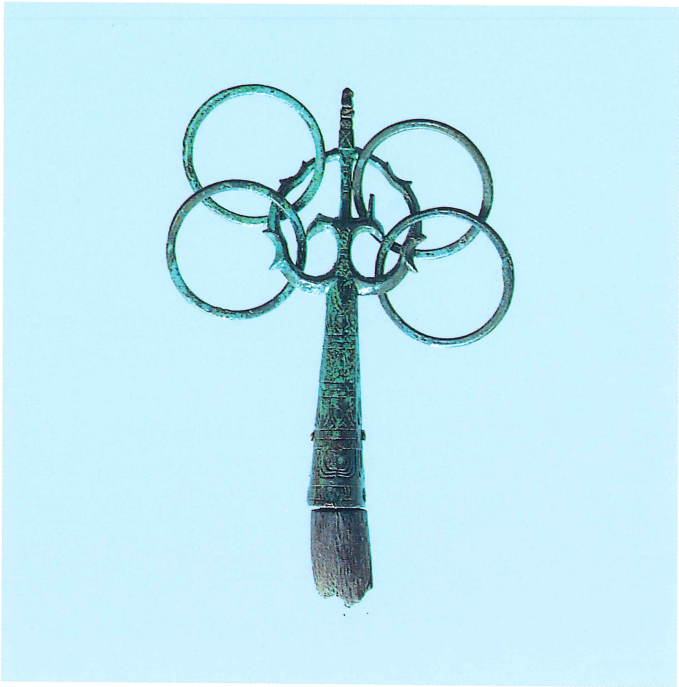
1994年

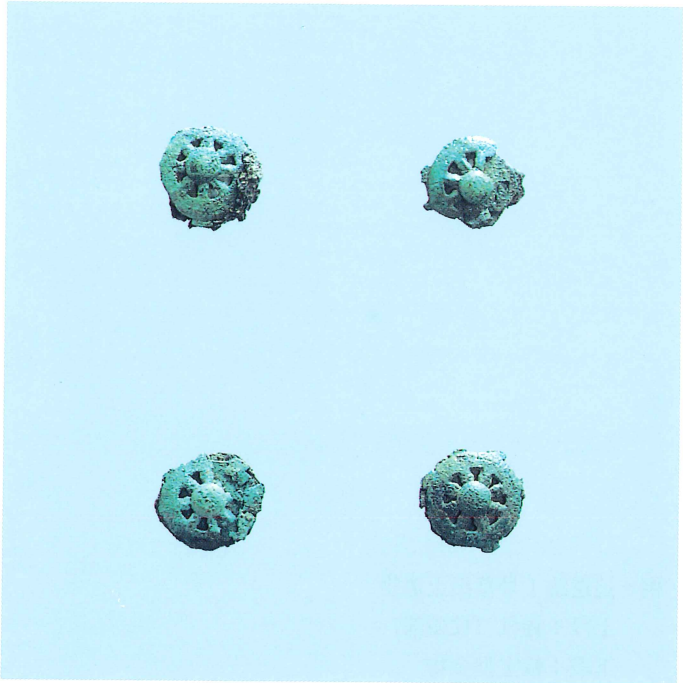
大分県教育委員会

巻頭図版一

調査遺跡空中写真（南西方向より）

手前より正布ヶ迫遺跡、峯添遺跡Ⅱ区、同Ⅰ区、桐ヶ迫遺跡





桐ヶ迫遺跡１号墓出土遺物

上段：錫杖（杖頭部）

下段：輪宝型金物

序

大分県教育委員会は、昭和61年から国道10号線宇佐道路建設に伴い埋蔵文化財の調査を実施しております。宇佐道路は、すでに完成した中津バイパスと宇佐別府道路との間を繋ぐ北大バイパスの一区間として建設が計画されたものであり、交通体系整備は県民の待望する事業の一つとして徐々に実現化されています。

しかし、路線内に所在する埋蔵文化財についても同様に重要であり、国民・県民の共有財産として十分に保護措置が図られるべきものであります。

この点については道路建設の計画段階から協議を重ね、できるだけ遺跡保存の方向をとってきましたが、やむを得ず路線内にかかる遺跡について発掘調査を実施してまいりました。

調査では、古墳、住居跡、溝、炭窯、近世墓地など居住、生業、葬祭の痕跡を示す様々な遺構、貴重な遺物を発見しました。これらは、当時の生活や社会の背景を知る上で重要な資料となるものです。

発掘調査の結果につきましては、埋蔵文化財の記録保存という責任を全うすべく、昨年度から順次報告書を刊行しております。昨年度は報告書刊行の初年度にあたり、笠松遺跡の報告を行いました。今年度は、桐ケ迫遺跡・峯添遺跡について報告いたします。

本書が歴史遺産に対する現解を深める資料としてはもとより、学術資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで多くのご指導をいただきました諸先生方をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位および地元の方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

大分県教育委員会
教育長　宮　本　高　志

例　　言

1　本書は一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3　本書の執筆者は次のとおりである。

第１、２、３、４、６章	小林　昭彦
第３章２（竪穴状遺構と遺物）	綿貫　俊一
第４章２	小柳　和宏
第５章１	小池　裕子
２	田中　良之
	金　　宰賢

4　遺物の実測、トレース、写真撮影などの作業は、小林、友岡信彦、吉武牧子が主体になり、あるいは補佐して行った。また出土銅銭については、大野町教育委員会の後藤幹彦氏に図版の作成とご教示を頂いた。

英文要旨はFR.Leonard R.Lavalleeに指導を受けた。

5　本書の編集は、小林が行った。

目　　次

第１章　調 査 の 概 要 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
　3　調査の経過 …… 3
　4　調査の方針と方法 …… 4

第２章　調査遺跡の立地と歴史的環境 …… 6

第３章　発掘調査の結果 …… 8
　1　桐ケ迫遺跡の遺構と遺物 …… 8
　2　峯添遺跡の遺構と遺物 …… 46

第４章　遺構と遺物の検討 …… 78
　1　近世墓地について …… 78
　2　峯添遺跡近世墓地の骨蔵器について …… 80

第５章　自然科学的調査の成果 …… 82
　1　桐ケ迫遺跡２号墳出土須恵器の脂質分析について …… 82
　2　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地出土人骨について …… 87

ＳＵＭＭＡＲＹ

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　宇佐道路路線内遺跡位置図 …… 5
第２図　宇佐道路周辺遺跡分布図 …… 7
第３図　桐ケ迫遺跡・周辺地形図 …… 9
第４図　桐ケ迫遺跡遺構分布図 …… 10
第５図　２号墳・周辺地形図 …… 11
第６図　２号墳墳丘土層断面図 …… 12
第７図　２号墳墳丘内須恵器出土状態 …… 12
第８図　２号墳羨道部土層断面図 …… 14
第９図　２号墳石室実測図 …… 15
第10図　２号墳出土遺物実測図(1) …… 19
第11図　２号出丘土遺物実測図(2) …… 20
第12図　２号墳出土遺物実測図(3) …… 21
第13図　２号墳出土遺物実測図(4) …… 22
第14図　２号墳出土遺物実測図(5) …… 23
第15図　２号墳出土遺物実測図(6) …… 24
第16図　２号墳出土遺物実測図(7) …… 25
第17図　灰原土層断面図 …… 26
第18図　溝１、２実測図 …… 27
第19図　灰原出土須恵器実測図 …… 28
第20図　桐ケ迫遺跡近世墓地全体図 …… 34
第21図　近世墓周辺墓石位置図 …… 35
第22図　１号墓実測図 …… 36
第23図　２号墓実測図 …… 37
第24図　３号墓実測図 …… 38
第25図　墓標１・２実測図 …… 39
第26図　１号墓出土輪宝形金物復元図 …… 40
第27図　墓標３実測図 …… 40
第28図　１号墓標拓影 …… 41
第29図　２号墓標拓影 …… 42
第30図　３号墓標拓影 …… 43
第31図　１号墓出土遺物実測図 …… 44

第32図　近世墓出土銅銭拓影 …… 45
第33図　峯添遺跡・周辺地形図 …… 47
第34図　峯添遺跡Ⅰ区遺構分布図 …… 48
第35図　Ⅰ区竪穴状遺構実測図 …… 50
第36図　Ⅰ区竪穴状遺構上層出土遺物実測図 …… 51
第37図　Ⅰ区竪穴状遺構出土石器・関連資料実測図 …… 52
第38図　Ⅰ区炭窯実測図 …… 53
第39図　Ⅰ区炭窯・周辺出土遺物実測図 …… 53
第40図　峯添遺跡Ⅱ区遺構分布図 …… 55
第41図　Ⅱ区１号竪穴実測図 …… 56
第42図　Ⅱ区２号竪穴実測図 …… 57
第43図　Ⅱ区３号竪穴実測図 …… 58
第44図　Ⅱ区４号竪穴実測図 …… 59
第45図　Ⅱ区炭窯実測図 …… 59
第46図　Ⅱ区溝状遺構実測図 …… 60
第47図　Ⅱ区火葬墓実測図 …… 61
第48図　Ⅱ区土坑出土、表採遺物実測図 …… 61
第49図　Ⅱ区１号・３号竪穴、ピット出土遺物実測図 …… 62
第50図　Ⅱ区近世墓地全体図 …… 64
第51図　Ⅱ区近世墓地整地範囲土層断面図 …… 65
第52図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(1) …… 70
第53図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(2) …… 71
第54図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(3) …… 72
第55図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(4) …… 73
第56図　Ⅱ区近世墓地墓標実測図 …… 74
第57図　Ⅱ区近世墓骨蔵器実測図 …… 75
第58図　Ⅱ区近世墓３・23号墓および周辺部出土遺物実測図 …… 76
第59図　コネ鉢変遷図 …… 81
第60図　桐ケ迫遺跡２号墳出土No.４坏身(569－1)とNo.６坏身(569－2)の脂質分析 …… 85
第61図　桐ケ迫遺跡２号墳出土No.６坏身(569－2)のステロールにおける
クロマトグラフとＧＣ－ＭＳスペクトル …… 86
第62図　７号人骨頭蓋骨遺存部位 …… 89
第63図　７号人骨遺存部位 …… 90
第64図　８号人骨頭蓋骨遺存部位 …… 91
第65図　８号人骨遺存部位 …… 92

第66図　16号人骨頭蓋骨遺存部位 …… 93
第67図　16号人骨遺存部位 …… 94

表　目　次

表１　桐ケ迫遺跡２号墳出土土器観察表 …… 29
表２　桐ケ迫遺跡灰原出土須恵器観察表 …… 32
表３　桐ケ迫遺跡近世墓出土銅銭一覧表 …… 45
表４　峯添遺跡Ⅱ区近世墓一覧表 …… 77

写 真 図 版

巻頭図版１　調査遺跡空中写真
巻頭図版２　桐ケ迫遺跡１号墓出土遺物
図版ⅰ　７号・８号人骨
図版ⅱ　８号・16号人骨
図版１　調査遺跡空撮
図版２　桐ケ迫遺跡(1)
図版３　桐ケ迫遺跡(2)
図版４　桐ケ迫遺跡(3)
図版５　桐ケ迫遺跡出土遺物(1)
図版６　桐ケ迫遺跡出土遺物(2)
図版７　桐ケ迫遺跡出土遺物(3)
図版８　桐ケ迫遺跡出土遺物(4)
図版９　桐ケ迫遺跡出土遺物(5)
図版10　桐ケ迫遺跡出土遺物(6)
図版11　桐ケ迫遺跡近世墓地出土銅銭（Ｘ線写真）
図版12　峯添遺跡Ⅰ・Ⅱ区
図版13　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(1)
図版14　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(2)
図版15　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(3)
図版16　峯添遺跡Ⅰ区竪穴状遺構出土石器
図版17　峯添遺跡Ⅱ区出土遺物
図版18　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地出土釘

第 1 章　調 査 の 概 要

1　調査に至る経過

宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は、北九州市から大分市に至る北大バイパス路線のうち宇佐市笠松から宇佐市山本までの間を対象としたものである。宇佐道路は中津バイパスから続く高規格道路で、さらに宇佐別府道路と接続し九州横断自動車道と合流する。宇佐道路建設に伴う調査は、昭和62年度から開始し、平成５年度にすべてを終了した。

本報告の桐ケ迫遺跡・峯添遺跡の調査は、昭和62年度～平成２年度の４カ年間にわたり実施したものである。

遺跡の分布状況については、市域に濃密な広がりをみることが従来より良く知られている。地形的には駅館川流域の河岸段丘、市南部の丘陵、平野部の微高地など特定の立地条件を限定しない。このような地形に展開された生活の営みは、集落、窯業、墓地、水利関連施設など具体的な内容を伴って多く発見されており、宇佐市が県内有数の遺跡集中地域であることを示している。「宇佐道路」の建設予定地内における事前の遺跡分布調査では路線全長５㎞間に11遺跡（のちに10遺跡に統合）が確認され、当初よりその十全な対応が望まれていた。

2　調査の組織

昭和62年度

調査委員	賀川　光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
	小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
	石野　博信（奈良県立橿原考古学研究所副所長）
	時枝　克安（島根大学助教授）
	三辻　利一（奈良教育大学教授）
	後藤　昭六（大分県教育庁文化課長）
	後藤　宗俊（同主幹）
調査主任	渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第２係長）
調 査 員	西　　哲弘（県文化課主任）、小林　昭彦（同主事）、松本　康弘（同主事）、友岡

信彦（同嘱託）、後藤　晃一（同嘱託）、永松みゆき（同嘱託）、吉武　牧子（同嘱託）、小倉　正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師）、乙咩　政巳（同主事）、林　　一也（同技師）、佐藤良二郎（同技師）

昭和63年度

調査委員　賀川　光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
三辻　利一（奈良教育大学教授）
橘　　昌信（別府大学教授）
小代　基雍（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤　宗俊（同課長補佐）

調査主任　渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第２係長）

調 査 員　高橋　　徹（埋蔵文化財第２係主査）、村上　久和（同主任）、西　　哲弘（同主任）、小林　昭彦（同主任）、友岡　信彦（同主事）、吉田　　寛（同主事）、後藤　晃一（同主事）、永松みゆき（同嘱託）、吉武　牧子（同嘱託）、山田　拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）、小倉　正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師）、乙咩　政巳（同主事）、林　　一也（同技師）、佐藤良二郎（同技師）

平成元年度

調査委員　賀川　光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
潮見　　浩（広島大学教授）
水野　正好（奈良大学教授）
後藤　正二（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤　宗俊（同課長補佐）

調査主任　渋谷　忠章（文化課埋蔵文化財第２係長）

調 査 員　高橋　　徹（埋蔵文化財第２係主査）、村上　久和（同主任）、西　　哲弘（同主任）、小林　昭彦（同主任）、友岡　信彦（同主事）、松本　康弘（同主事）、吉田　　寛（同主事）、後藤　晃一（同主事）、永松みゆき（同嘱託）、吉武　牧子（同嘱託）、今泉　正子（同嘱託）

平成２年度

調査委員　賀川　光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）

小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）
後藤　宗俊（別府大学教授）
橘　　昌信（別府大学教授）
和田　晴吾（立命館大学教授）
鈴木　忠司（古代学研究所助教授）
田中　良之（九州大学助教授）
後藤　正二（大分県教育庁管理部参事兼文化課長）
林　　英輝（同課長補佐）
調査主任　清水　宗昭（文化課埋蔵文化財第１係長）
調 査 員　坂本　嘉弘（同主査）、宮内　克己（同主査）、西　　哲弘（同主任）、小林　昭彦（同主任）、原田　昭一（同主事）、吉田　　寛（同主事）、後藤　晃一（同主事）、富田　修司（同嘱託）、高松　永治（同嘱託）、新宅　信久（同嘱託）、丸山　啓子（同嘱託）

上記の他に、次の方々には現地指導および有益なご助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。

佐藤　興治（元大分市立歴史資料館長）、玉永　光洋（元大分市立歴史資料館学芸係長、現大分県教育庁文化課主査）、甲斐　忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）、真野和夫（同調査課長）　（敬称略）

3　調査の経過

発掘調査は既述の調査組織の編成下で行った。以下、年次ごとに該当遺跡の調査経過を示す。

昭和62年度調査

峯添遺跡の一部について試掘調査を実施し、近世墓地の墓標などを確認した。

昭和63年度調査

本年は峯添遺跡の未調査部分、桐ケ迫遺跡について試掘調査を実施した。桐ケ迫遺跡では丘陵下の谷部水田において遺構の確認調査を行った。試掘の結果、谷は深く開析され有機質土壌の厚い堆積を確認したが、遺物・遺構はみられなかった。遺跡は丘陵上に広がるものと想定された。峯添遺跡では、Ⅰ区南半部の道路構造物範囲について調査を行い終了した。調査の結果、遺構は確認されなかった。南のⅡ区においては丘陵の中腹から裾の3000㎡について表土を剝ぎ遺構の確認を行った。この結果、丘陵の中腹に墓標を伴う近世墓地、古墳時代住居跡、土坑などを検出した。

また丘陵上で石器数点を採集している。

平成元年度調査

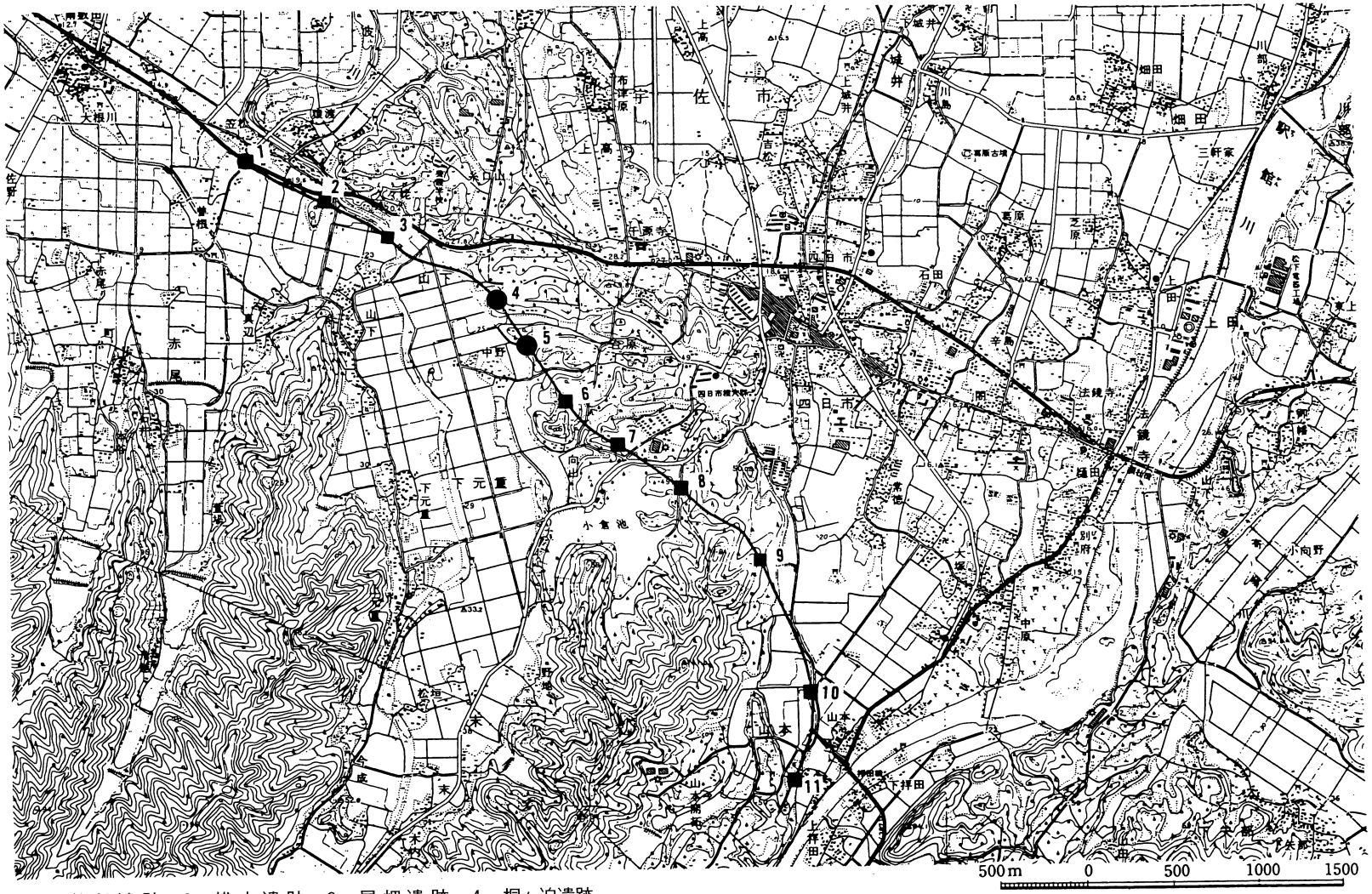
峯添遺跡Ⅱ区の北半部の確認調査を実施した。この結果、土坑、不整形の落込みなどを確認した。

平成２年度調査

桐ケ迫遺跡については、調査範囲全面の表土剝ぎを行い遺構の確認を実施した。丘陵頂部付近に円墳１基、土坑、溝状の落込み、南向き斜面の中腹には近世墓地、南斜面の裾部に溝と須恵器窯跡の灰原の一部を確認し、調査を実施した。峯添遺跡では、桐ケ迫遺跡と谷を挟み南西に位置するⅠ区の丘陵について調査を実施した。検出した遺構は、竪穴遺構、土坑、炭窯などであった。

4　調査の方針と方法

道路建設予定地内の調査については遺構の確認調査を実施し、その結果を踏まえて本調査を行うという手順で進めた。確認調査はトレンチ・グリッド法を併用して行う方法と対象地全域の表土を除去して行う２つのやり方を適宜用いた。



1　笠松遺跡　2　横山遺跡　3　尾畑遺跡　4　桐ヶ迫遺跡
5　峯添遺跡　6　正布迫遺跡　7　柳沢遺跡　8　松ヶ平遺跡
9　向山遺跡　10　下林遺跡　11　虚空蔵寺遺跡（宇佐別府道路）

● 本年度報告

（本図は国土地理院「宇佐」（２万５千分の１）地形図を使用した）

第１図　宇佐道路路線内遺跡位置図

第 2 章　調査遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の所在する宇佐市は、東を豊後高田市・山香町、西を中津市・三光村、南を院内町・安心院町に囲まれ、北は周防灘に面している。海岸部より広大な沖積平野が広がり、丘陵は耶馬渓溶岩流で形成された山系の一部をなす。この山系から派生する多くの河川が地形をつくりながら海へ注ぐ。主要な河川は市東部の駅館川でこれに次ぐものとして西部の伊呂波川がある。調査を実施した桐ケ迫遺跡、峯添遺跡は伊呂波川と東面する四日市台地に所在する。

この四日市台地は西に向かって樹枝状の丘陵がみられ、遺跡は丘陵の斜面、上部に分布している。

旧石器時代では、本報告の桐ケ迫遺跡や峯添遺跡など丘陵上に旧石器の散布、同時期の遺構が僅少ながら認められる。また同一丘陵上に位置する正布ケ迫遺跡において旧石器の散布が確認されている。周辺では、南部の小倉池や小菊池周辺に石器の散布がみられ、四日市台地上に旧石器時代の遺跡が広がっているものと考えられる。

縄文時代の遺跡は、今回の調査では確認されていないが、四日市台地からみて伊呂波川の対岸となる河岸段丘上の尾畑遺跡に後期の竪穴住居跡、後期～晩期の包含層の形成がみられ調査によって当該期の多量な土器、石器類、土偶などが検出されている。近辺では、西部の五十石川右岸に後期初頭の良好な資料が検出された西和田貝塚がある。このように、四日市台地周辺の遺跡では河岸段丘上の立地が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、四日市台地の北端部に台ノ原遺跡がある。この遺跡は6次にわたる調査で前期～後期の遺構が検出された。前期では袋状土坑、中期では初頭から中葉におよぶ集落が明らかにされた。さらに中期前半～後半の壺棺、箱式石棺など墓地の形成も確認されている。また駅館川の段丘上、微高地には東上田遺跡、野口遺跡、川部遺跡、別府遺跡など前期末から後期後半の連続的な遺跡の存在が知られている。

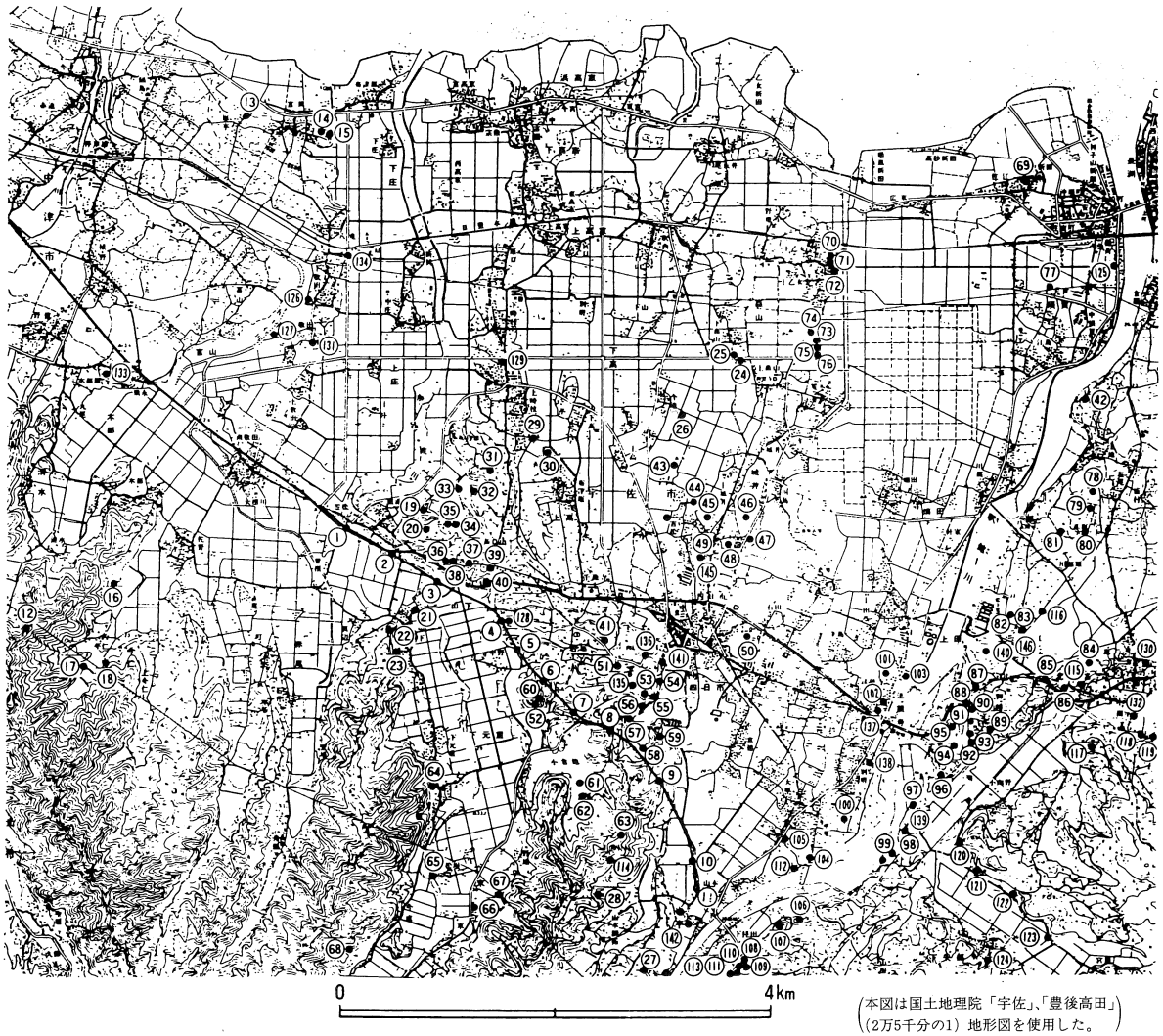
古墳時代の遺跡としては、峯添遺跡の集落、また平野を望む丘陵先端付近には古墳が分布しており、桐ケ迫遺跡、向山古墳群、久々姥古墳群などが所在する。四日市台地とその周辺には多く円墳が分布しており、川部・高森地区の赤塚古墳、葛原古墳、鶴見古墳など首長墳の造営された地域とは異なる墓形成の展開が窺われる。生産遺跡では、桐ケ迫遺跡に須恵器窯跡の一部とその灰原を確認しており、散在的な窯業の様相を知ることができる。

古代の遺跡としては、前出の尾畑遺跡で奈良時代の建物群が検出され、多くの土器と共に「和同開寳」が出土しており、官衙的な性格をもつ遺跡として注目された。

中世には既報告の笠松遺跡の火葬墓群が近隣に所在する。

近世の遺跡については、墓地のあり方が明らかにされつつある。調査例は今回の報告に含んでいる。

1．笠松遺跡
2．横山遺跡
3．尾畑遺跡
4．桐ヶ迫遺跡
5．峯添遺跡
6．正布迫遺跡
7．柳沢遺跡
8．松ヶ平遺跡
9．向山遺跡
10．下山遺跡
11．虚空蔵寺遺跡
12．上山田横穴古墳群
13．尾僧石棺
14．城 遺 跡
15．城八幡宮石棺群
16．今仁古池遺跡
17．産山横穴群
18．草場谷横穴群
19．三ッ岩横穴
20．台 遺 跡
21．妙見平横穴群
22．少林横穴群
23．貴船平・下の裏山横穴群
24．池田古墳
25．元教覚寺跡
26．吉松甕棺群
27．切寄横穴群
28．石和田横穴群
29．池ノ下遺跡
30．鶴先遺跡
31．糸口山遺跡
32．針山古墳
33．前台古墳
34．西光寺山古墳
35．西光寺横穴群
36．久々姥石棺群
37．久々姥１号墳
38．久々姥２号墳
39．高林塚遺跡
40．高林塚古墳群
41．稲丸遺跡
42．本丸遺跡
43．上立石棺群
44．下田遺跡
45．大森遺跡
46．世々野遺跡
47．辛川遺跡
48．一本松遺跡
49．扇塚古墳
50．四日市廃寺跡
51．台ノ原遺跡
52．向山遺跡
53．池ノ奥古墳
54．一鬼手横穴群
55．加賀山横穴群
56．小菊古墳群
57．宮山古墳
58．小菊池遺跡
59．響山古墳
60．向山古墳群
61．小倉池廃寺跡
62．小倉池遺跡
63．落ヶ迫横穴群
64．観音山横穴群
65．松垣遺跡
66．熊 遺 跡
67．原山遺跡
68．宮山横穴群
69．屋敷甕棺群
70．小金遺跡
71．精進畑かめ棺群
72．乙咩神社石棺
73．鬼塚石棺
74．小部遺跡
75．小部貝塚
76．御塚石棺
77．中園古墳
78．赤塚古墳
79．京塚古墳
80．恵良野古墳
81．鶴見古墳
82．一盃田遺跡
83．樋尻道遺跡
84．平堤遺跡
85．化粧井戸
86．善空寺遺跡
87．宇土ノ上古墳
88．御幡遺跡
89．ホキノ本遺跡
90．西ノ宮遺跡
91．貴船神社遺跡
92．貴船神社南遺跡
93．幡柱古墳
94．古稲荷古墳
95．上ノ原遺跡
96．下辻遺跡
97．鳥越隧道古墳群
98．姪子原古墳群
99．恵古ノ上古墳群
100．別府遺跡
101．法鏡寺廃寺跡
102．法鏡寺遺跡
103．上平古墳群
104．井原古墳群
105．大塚古墳
106．稲荷山古墳
107．山ノ下横穴群
108．小路迫横穴群
109．後山横穴群
110．土祖神元横穴群
111．小路迫古墳
112．井手ノ上古墳
113．柳橋横穴群
114．水原古墳
115．凶首塚古墳
116．高森遺跡
117．瀬割古墳
118．大善寺跡
119．大善寺横穴
120．牛房横穴群
121．百穴横穴群
122．逆師甕棺群
123．矢部橋遺跡
124．屋敷横穴群
125．蓮福寺跡
126．京徳遺跡
127．西和田貝塚
128．桐ヶ迫古墳
129．時枝城跡
130．宇佐大宮司館跡
131．敷田遺跡
132．藤田遺跡
133．六十塚古墳
134．吉久遺跡
135．台ノ原遺跡
136．台ノ原集団墓
137．上浦遺跡
138．別府遺跡縄文包含層
139．別府古墳群
140．高居遺跡
141．四日市横穴群
142．虚空蔵寺瓦窯跡
143．虚空蔵寺跡
144．切寄瓦窯跡
145．吉松遺跡
146．川部遺跡



（本図は国土地理院「宇佐」、「豊後高田」（2万5千分の1）地形図を使用した。）

第２図　宇佐道路周辺遺跡分布図

第 3 章　発掘調査の成果

1　桐ケ迫遺跡の遺構と遺物

調査は、伊呂波川右岸に位置する標高約40ｍの丘陵とその南側の低地を合わせた7563㎡の範囲を対象とした。遺跡の立地する丘陵は四日市台地の西辺部にあたり、谷で開析された樹枝状の丘陵の一つである。

調査の結果、古墳１基、須恵器窯の灰原、近世墓地、このほかに溝や土坑を検出した。さらに丘陵上部付近において細石刃核などを採集していたので旧石器確認のためトレンチおよびグリッドを設定し、この調査を実施した。

古墳については調査範囲外の至近地にも数基を確認している。このうち１基は「宇佐市内埋蔵文化財分布図」（昭和56年３月、宇佐市役所）に記載されている桐ヶ迫古墳である。このため、今回検出した古墳を２号墳とした。須恵器窯の灰原はこの丘陵の南側斜面下辺で確認したものである。灰原の状況から複数の窯跡の存在を想定できるが、灰原の大半と窯跡は調査範囲外となる南向き斜面裾部付近に位置する。

近世墓地は丘陵上部に近い南斜面に位置していた。墓地の範囲は斜面が掘削、整形され平坦となっていた。下部施設として３基の円形土坑を確認した。このうちの１基から「寛永通宝」６枚、ほかの１基からは錫杖と金具が出土している。

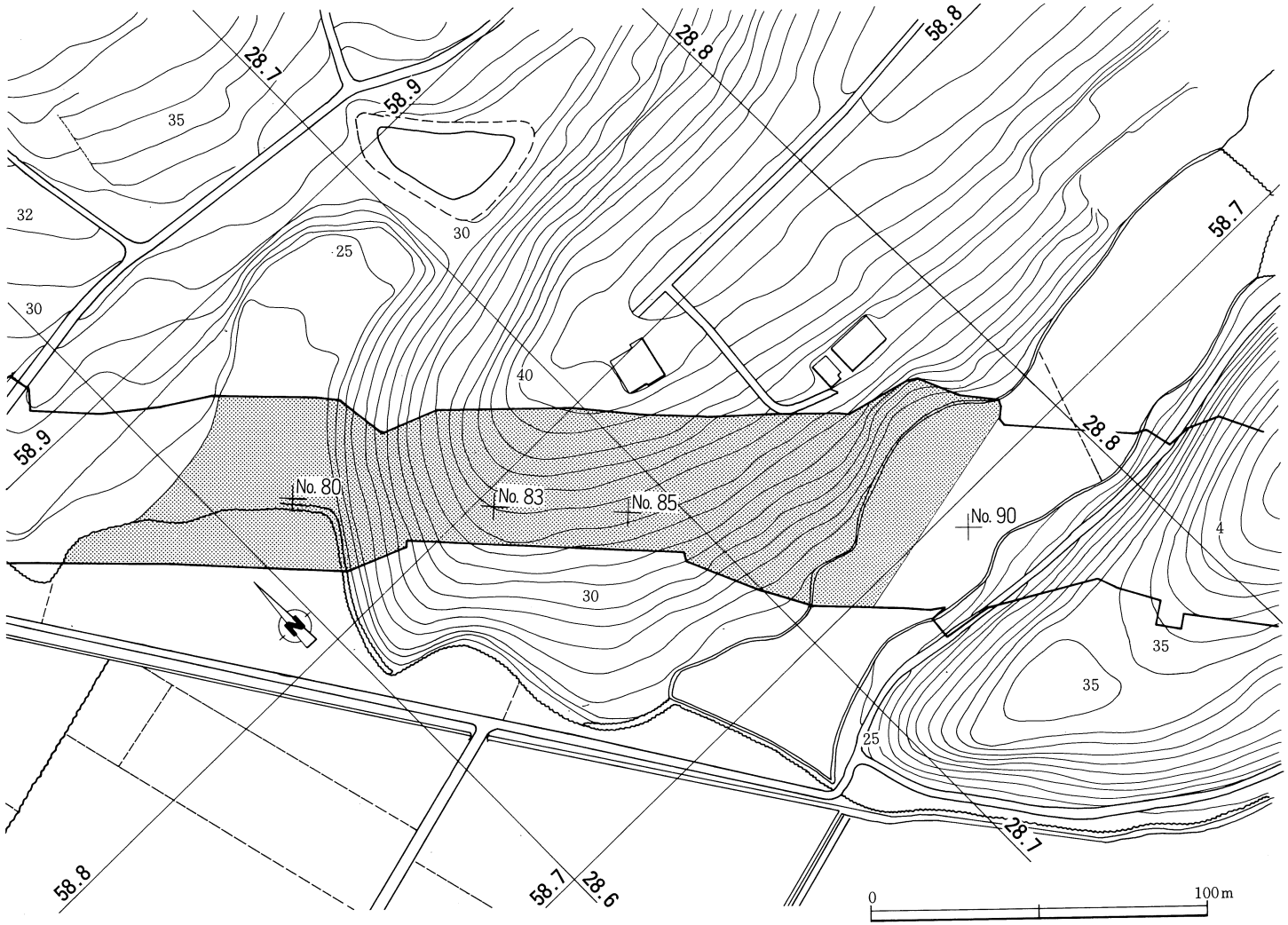
このほかの遺構としては溝、土坑などがある。溝は南向き斜面の裾部付近に位置し、ほぼ等高線に平行して伸びている。この溝は覆土中から須恵器が出土しており、至近地にある窯の付属施設の可能性が高い。

桐ヶ迫遺跡２号墳

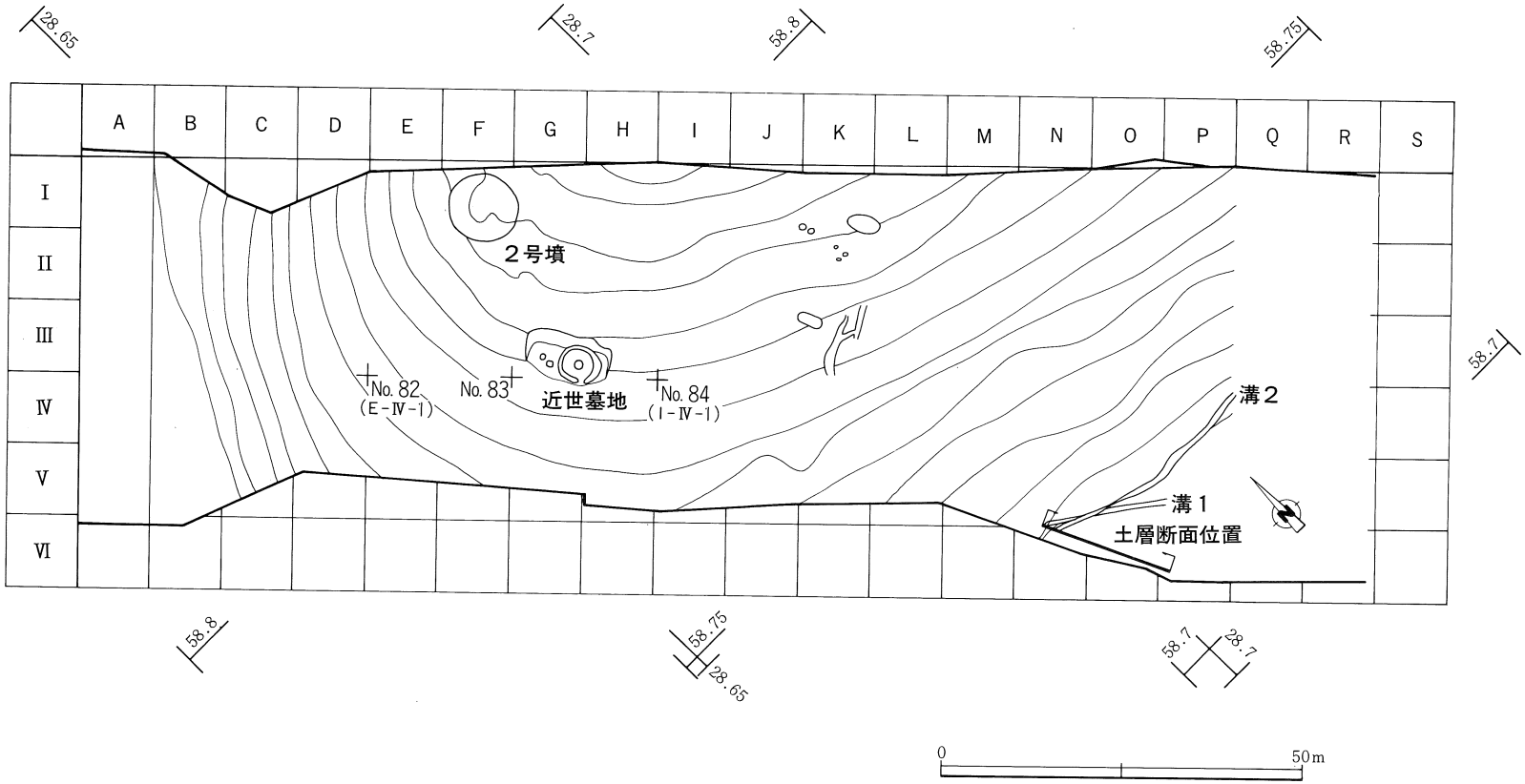
古墳は丘陵の上部平坦面の縁辺に位置する円墳である。主体部は西方向に開口する横穴式石室である。

墳丘は周溝外径9.3ｍ～10ｍ、周溝内径7.3ｍ～7.8ｍの規模で南北方向にやや長い円形であった。高さは現状で１ｍほどであった。墳丘は後世掘削され、また南西方向に多く流出しており旧状がかなり損なわれていた。特に石室右側壁から墳丘西部にかけて掘り込まれた落ち込みは、墳形を大きく改変させている。

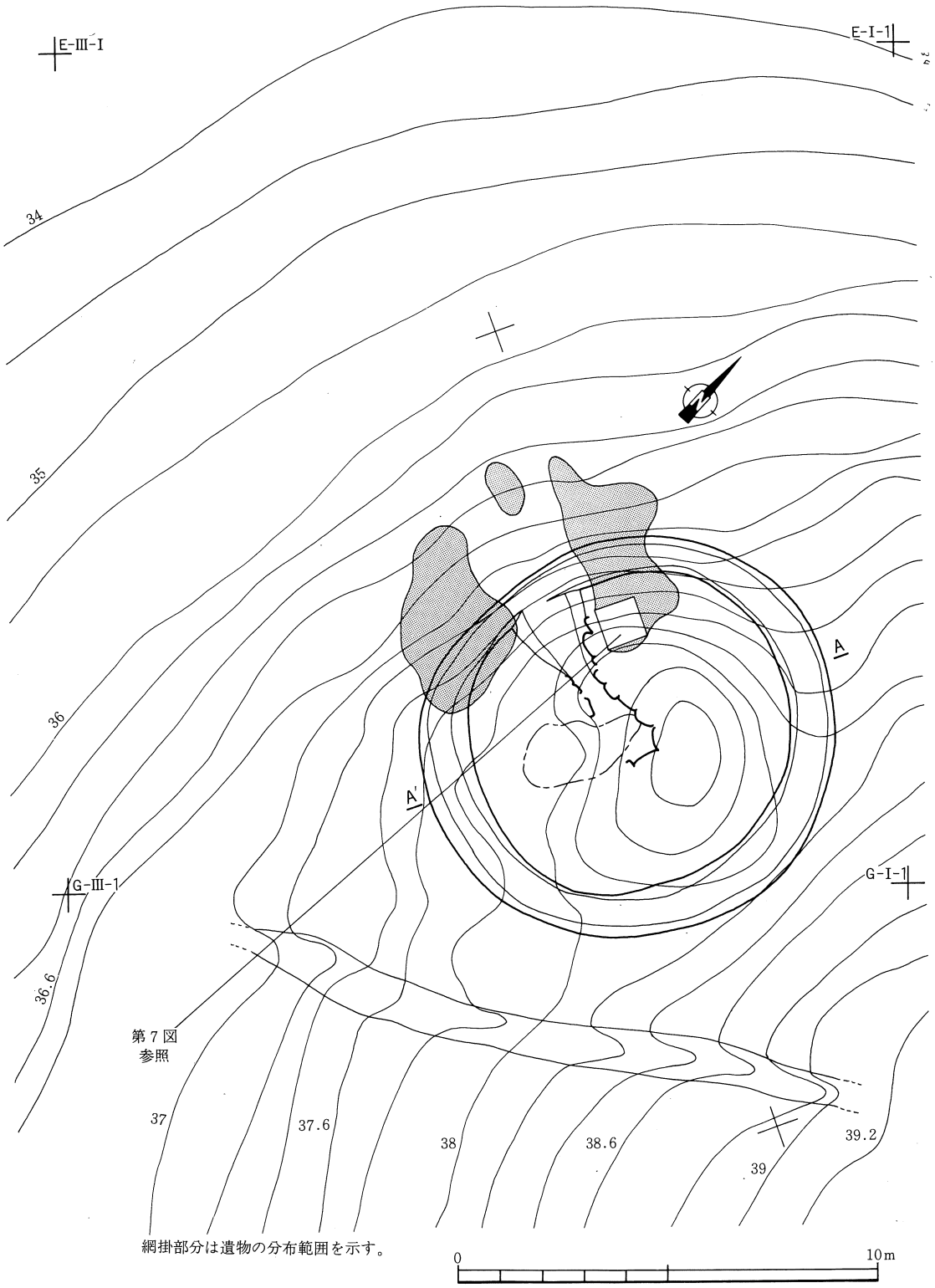
墳丘の盛土作業は墳丘中央付近の基底面に一部旧表土が残るものの、周溝外側までの地山整形後に行われている。盛土は石室構築に応じて版築がなされ、石室構築後に最終段階の作業がみられる。



第３図　桐ケ迫遺跡・周辺地形図



第4図　桐ケ迫遺跡遺構分布図



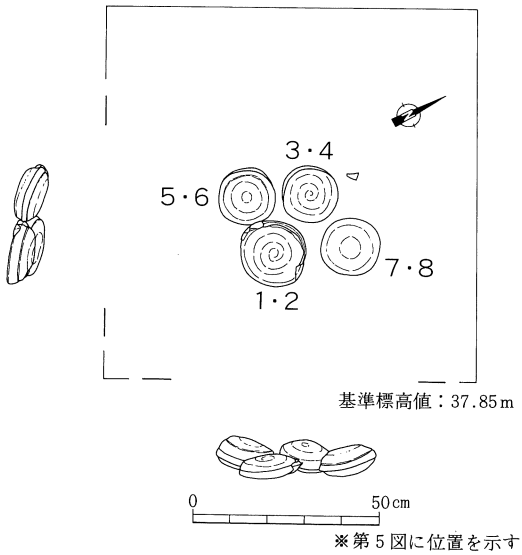
第５図　２号墳・周辺地形図

周溝は0.5m ～1.3m，深さ0.5m程度で全周するが、斜面下側は浅くなっている。

内部主体は両袖単室の横穴式石室である。主軸方位は北101度東を指向する。これは等高線と直交する方向となっており、石室が斜面下の平野部に向かい開口することを示している。

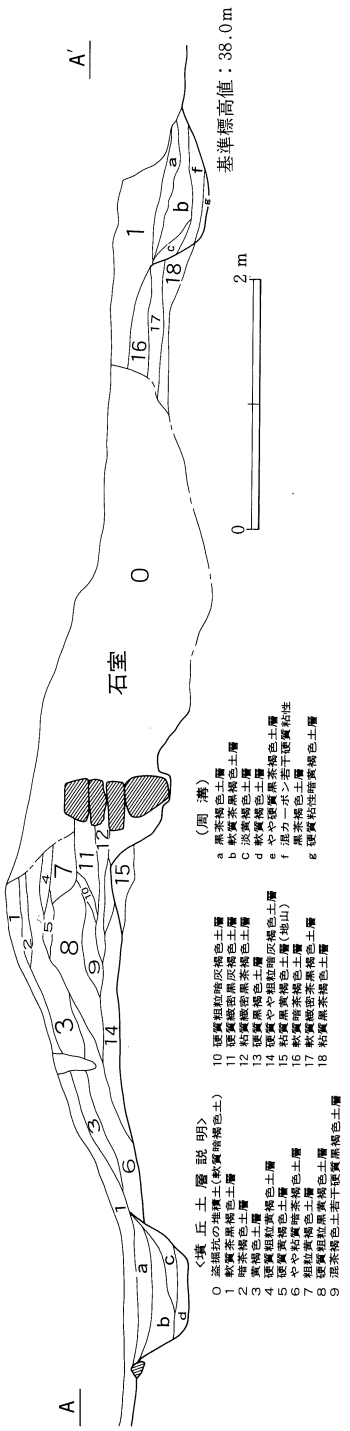
石室の残存状態は右側壁と床面の大半を失っていたが、奥壁、左側壁では比較的良好であった。奥壁には0.6m×0.9m の石材が用いられ、これを挟む形で左右の腰石が据えられていた。左側壁は４石の腰石の上に板石状の石材が３～４段ほど残存していた。

玄室は主軸方向の長さ1.7m、幅は奥壁で0.85m、中央で推定1m、袖部0.45m の規模をもち、やや胴張型の形態を呈している。用いられている石材は腰石が0.55m ×0.35m 程度と小さく、石室の平面形も小規模である。床面は平坦で、敷石に用いられていた長径0.1m程度の河原石が若干残っていた。石室の掘形は地山整形面から掘り込まれている。掘形は偏楕円形を呈し、2.3m ×2.1m の規模である。掘形の埋土は黄褐色土ブロック混りの黒褐色土であった。閉塞石は框石付近から羨道にかけて0.1m～



※第５図に位置を示す

第７図　２号墳墳丘内須恵器出土状態



第６図　２号墳墳丘土層断面図

0.4m大の石を積み上げたものである。

羨道は左壁で1.5mと短く、側壁の石積は袖石に連接して1～2段ほど残っていた。

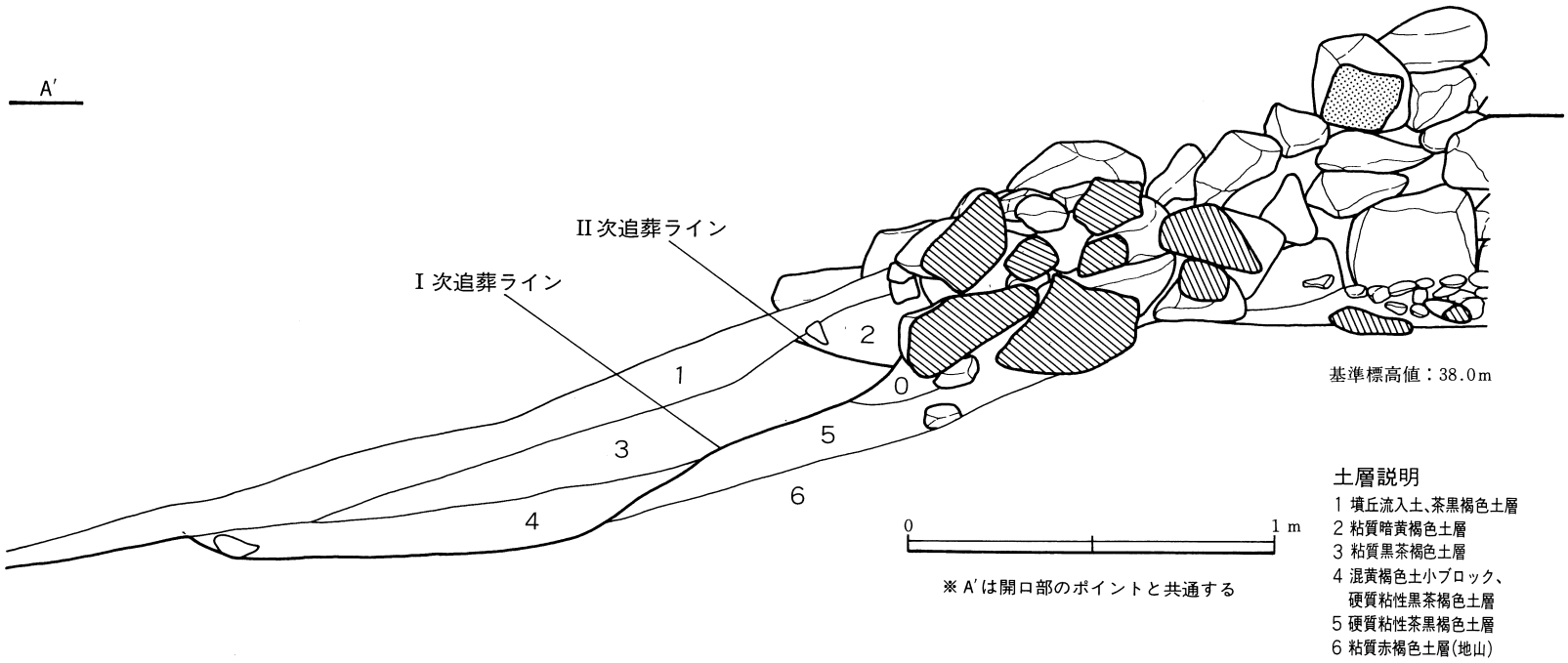
墓道は羨道から延長して1.7mほどの長さで付設され、周溝まで伸びる。幅は羨道側で0.8m、先端で1.9mと外に向かい開いている。

追葬については、墓道の堆積土の観察からⅡ次にわたって行われていることを確認した。

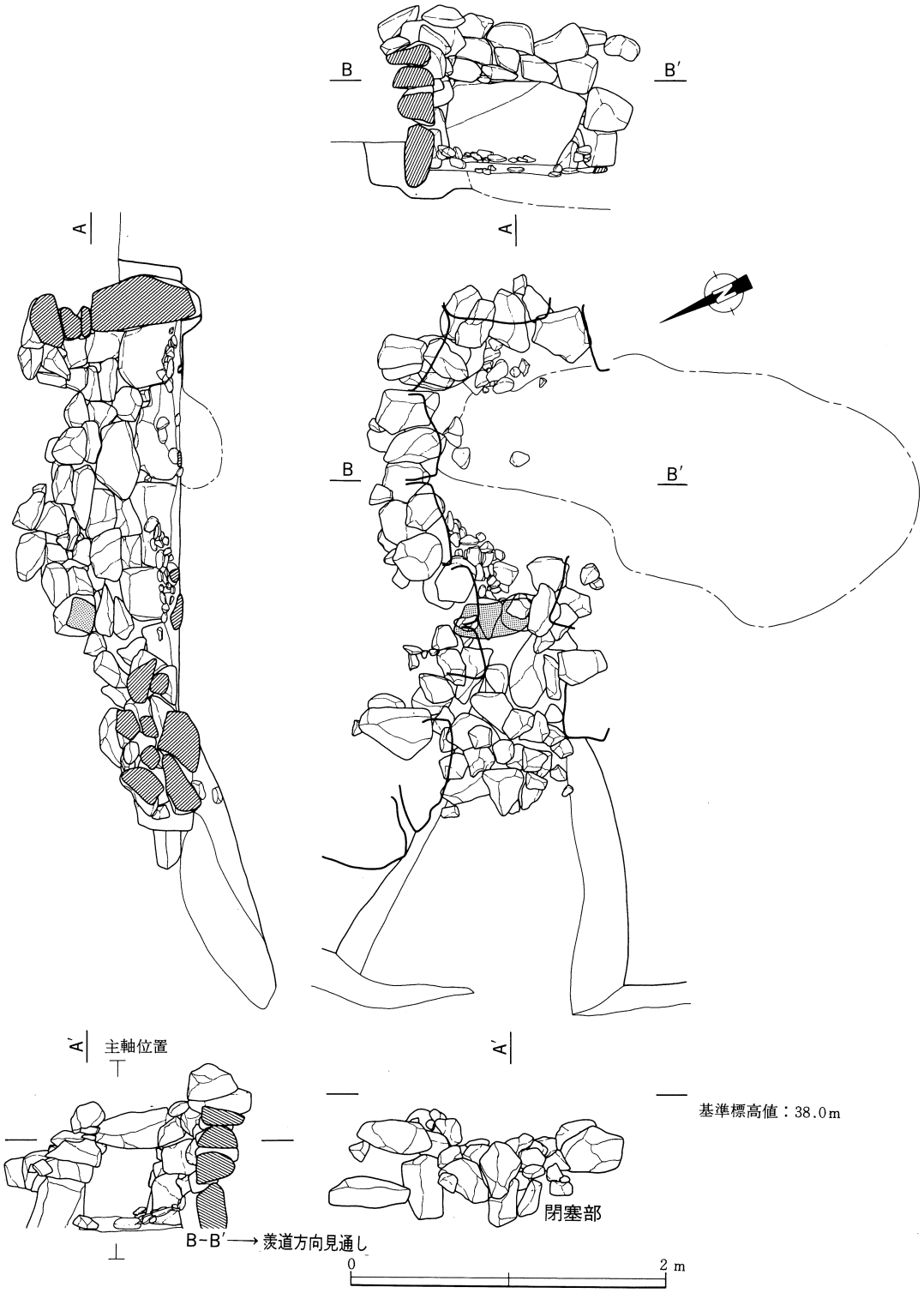
出土遺物は、石室内で玉類、鉄鏃が検出されたが原位置を保つものではない。墓道の堆積土中の玉類は追葬時にかき出されたものと思われる。

墓道右側の墳丘内からは石室構築時に置かれた須恵器杯蓋身の4セット（第5図、第10図3～8）が正位置で検出された。墓道を挟む墳丘の西裾から周溝、周溝外にかけて多量の須恵器破片、土師器破片が散布していた。これらの遺物は墳丘上からの流入土に混在する状態で出土した。

墳丘上に構築された落ち込みは、覆土中から中世の土器が検出されており、この時期に古墳再利用のため掘削された可能性がある。



第8図　2号墳羨道部土層断面図



第９図　２号墳石室実測図

2号墳出土遺物（第10図～第14図、表1）　出土土器は土師器甕、鉢、小壺などがみられるものの量的に須恵器が多い。須恵器の器種は坏、高坏、甕、壺、提瓶、瑕など多様であった。特殊なものとして瑕および長頸壺のミニチュアと台付有蓋壺がある。また中世の土器が若干出土している。このうち須恵器・土師器は周溝内、墳丘およびその周辺から出土したもので、中世土器は墳丘を掘り込んだ土坑から出土したものである。玉類、鉄鏃、銀製環については石室埋土中、周溝から出土したものである。

墳丘出土土器

須恵器（第10図～第12図、第13図5・6）

蓋坏（第10図、第11図12）

第10図1～10は蓋と身が組み合って出土したが焼成時のセットを示すものではない。

蓋は形態、技法から、A、B、Cの3タイプに区分できる。Aタイプは、口縁部内面に低い稜あるいは沈線が巡る（第10図1・3・5・7・17・19）。天井部と口縁部の境は明瞭で、低い稜か沈線が残り、口縁部は直線的に垂下するもの（第10図1・19）とやや丸みを帯びて垂下するもの（第10図3・5・7・17）がある。天井部は概ね平坦に仕上げられている。大きさは口径13.8㎝～15.2㎝、器高3.2㎝～4.5㎝と大形品のすべてがこのグループに入る。調整は、天井部に回転ヘラ削りが施されている。

Bタイプは口縁部内面に稜や沈線がなく丸く仕上げられており、口縁端部で内湾（第10図11）、やや丸みを帯びて垂下するもの（第10図13・15・20、第11図1～3）、やや外反する（第10図18）3つの形態がある。天井部は、①ほぼ平坦に仕上げられるもの（第10図9・11）、②緩い山形状をなすもの（第10図13・15・20、第11図1～3）がある。大きさは口径12.3㎝～14.4㎝、器高3.2㎝～4.2㎝と幅がある。ただ天井部①は14㎝台と大きく、②タイプは小形品となる傾向がある。調整はAタイプと同様に天井部に回転ヘラ削りが施される。

Cタイプ（第11図9）は、天井部が頂部付近が平坦で、口縁部は丸く端部に向かって外反気味で細くなる。大きさは口径12.3㎝，器高3.6㎝と最も小形である。調整は、天井部が回転ヘラ切り後、若干ナデが施されている。

身は形態、技法から、A、B、Cの3タイプに区分できる。

Aタイプは口縁部が長く伸びる形態をもつ（第10図2・4・6・8、第11図7）。底部は平坦気味に整形されている。大きさは、第11図7を除けば11㎝後半台～12.9㎝と幅をもつが、器高4.5㎝以上で大形品はすべてこの範囲内に包括される。調整は、底部に回転ヘラ削りが施される。

Bタイプは口縁部が、①上へ向かい屈曲するもの（第10図10、第11図4）、②直線的に伸びるもの（第10図12・14、第11図5・6・8）がある。大きさは、11.3㎝～13.2㎝、器高3.4㎝～4.4㎝である。調整は、底部に回転ヘラ削りが施される。

Ｃタイプは口縁部形態に、①断面形が三角形に近いもの（第11図10）と②比較的短く、内傾に立ち上がるもの（第11図11・12）の２つがある。大きさは口径10.5㎝、10.8㎝、器高３㎝台に収まり最も小型の一群である。底部の調整は回転ヘラ切りでナデを施すか、未調整となっている。

蓋坏は、胎土に斜長石や角閃石粒を含む例があり、器面に砂粒が焼成時に破裂した痕跡を残すものがある。焼成は良好で、暗灰褐色を基調とする色調を呈する。

蓋坏のセット関係は、蓋Ａが身Ａ・Ｂ、蓋Ｂが身Ｂ、蓋Ｃが身Ｃとそれぞれ対応するものである。また型式変化はＡ→Ｂ→Ｃと連続的にみることができる。

埦（第11図13）

埦はこの１点が出土している。体部は球状をなし口縁部は直立気味に立ち上がる。体部下半には回転ヘラ削りが施され、稜がつく。口径11.2㎝と推定される。

高坏（第11図14・15・16）

高坏はすべて無蓋高坏である。14は浅く小型の坏部をもち、体部下端に稜がつく。脚部は短い柱部から脚端部に向かって広がる。脚端部は細い。坏部下半に回転ヘラ削りがみられ、柱部に二条の沈線が巡る。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。大きさは口径11.6㎝、器高11.2㎝である。15は浅い坏部をもち、脚部は長い柱部から脚端部に向かって緩く広がる。脚端部は外へ短く屈曲する。坏部下半に回転ヘラ削りがみられ、柱部にカキ目が施されている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で暗灰褐色を呈する。大きさは口径11.6㎝、器高14.5㎝である。16は坏部が浅く、口縁部は体部下半からやや外反して立ち上がる。脚部は坏底部から八字状に大きく広がる。脚端部は丸みをもち外へ短く屈曲する。坏部下半に回転ヘラ削りがみられ、柱部にカキ目が施されている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で暗灰褐色を呈する。大きさは口径15㎝、器高10.9㎝である。

瓻（第12図１）

頸部～口縁部の破片である。頸部は口縁部に向かい広がり、口縁部は頸部との境から外へ開く。口縁端部は細く仕上げられている。頸部外面に櫛描波状文が施されている。大きさは口径12㎝である。胎土に白色砂粒を含み、焼成は通有で暗灰色を呈する。

提瓶（第12図２）

頸部～口縁部の破片である。頸部は口縁部に向かい直立する。外面に二条の沈線が巡る。大きさは口径7.2㎝である。胎土に斜長石粒を含み、焼成は不良で淡灰褐色を呈する。

有蓋台付壺（第12図３）

頸部～口縁部が残るのみで、体部以下を欠く。口縁部は器壁が厚く丸く仕上げられ、直立気味に立ち上がる。受部は短く水平に伸びる。頸部は器壁が厚く、体部に向かいやや細くなる。胎土に細砂を含み、焼成は極めて良好で堅緻となっており、暗灰褐色を呈する。

壺（第12図４・５）

4は頸部～口縁部の破片である。頸部は直立気味に立上がり、口縁部は細く短く外へ屈曲する。5は体部の破片で球体をなす。体部下半に回転ヘラ削りがみられる。4・5共に胎土に斜長石粒を含み、焼成は不良で淡灰褐色を呈する。

甕（第12図6～14）

6は胴部が大きく張り、最大径を上位にもつ。頸部は短く外反し、口縁部は端部で肥厚する。胴部外面に木目直交叩き、内面に同心円の当具痕が残る。大きさは頸部は短く外反し、口径22.5㎝、器高48.4㎝である。7は口縁部～胴部上半部が残る。胴部は緩く張り、頸部は短く外反する。口縁部は丸く肥厚し、端部で内湾する。胴部外面に平行叩き、内面に同心円の当具痕が残る。口径は14.9㎝である。8～14は口縁部～頸部破片である。口縁端部は矩形に肥厚する。8、12～14は頸部外面に櫛描波状文が施されている。甕の焼成は通有でほぼ灰褐色を呈する。

小形甑（第13図5）

口径6.9㎝、器高6.8㎝の小形の甑である。偏平な体部をもち、頸基部は細く口縁部に向かって広がる。口縁部は頸部からやや内湾気味に立ち上がる。底部は周縁を回転ヘラ削りで調整され、平坦となっている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。

小形長頸壺（第13図6）

口径4.1㎝、器高6.9㎝の小形の長頸壺である。偏平な体部をもち、頸部は口縁部に向かって緩く開き気味に立ち上がる。頸部と体部上位に沈線をもつ。底部はヘラ削りで調整され、平坦となっている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。

土師器（第13図1～4、7）

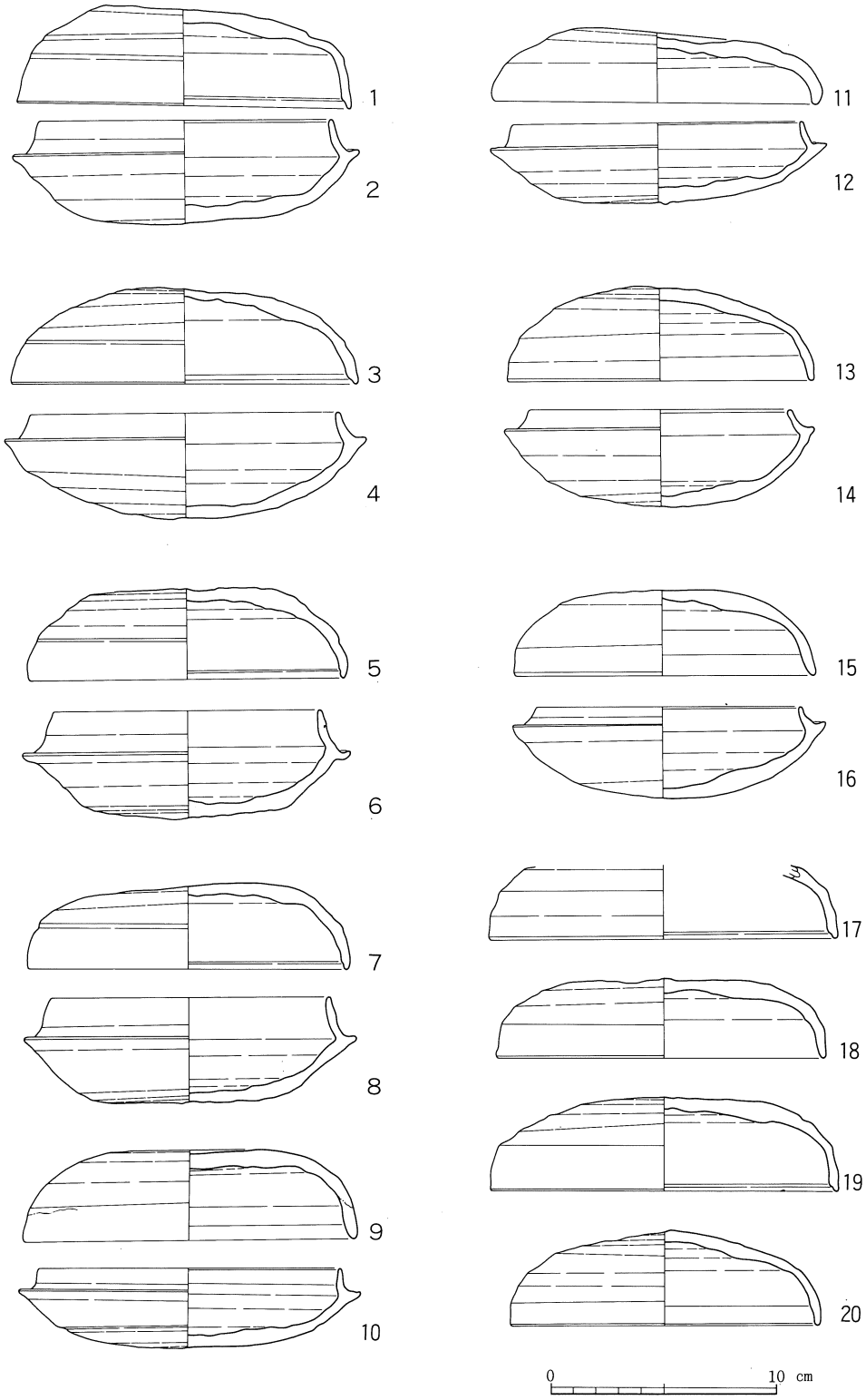
1は高坏の坏部で脚部を欠く。体部は丸く、口縁部はやや肥厚し外反する。体部外面に斜方向のハケ目、内面にヘラ削りが施されている。口径は29㎝である。2は壺で短く外反する口縁部をもつ。体部外面に斜方向のハケ目、内面にヘラ削りが施されている。口径は16.1㎝である。3・4は甕で共に外反する口縁部をもつ。胴部内面にヘラ削りが施されている。胎土に斜長石粒・角閃石粒を含み、焼成は概して不良で、色調は橙色を呈する。

7は口径5.6㎝、器高5.8㎝の小壺である。体部は偏平な球状に張り、口頸部は短く外反する。胎土に斜長石粒を含み、焼成は不良で黄褐色を呈する。

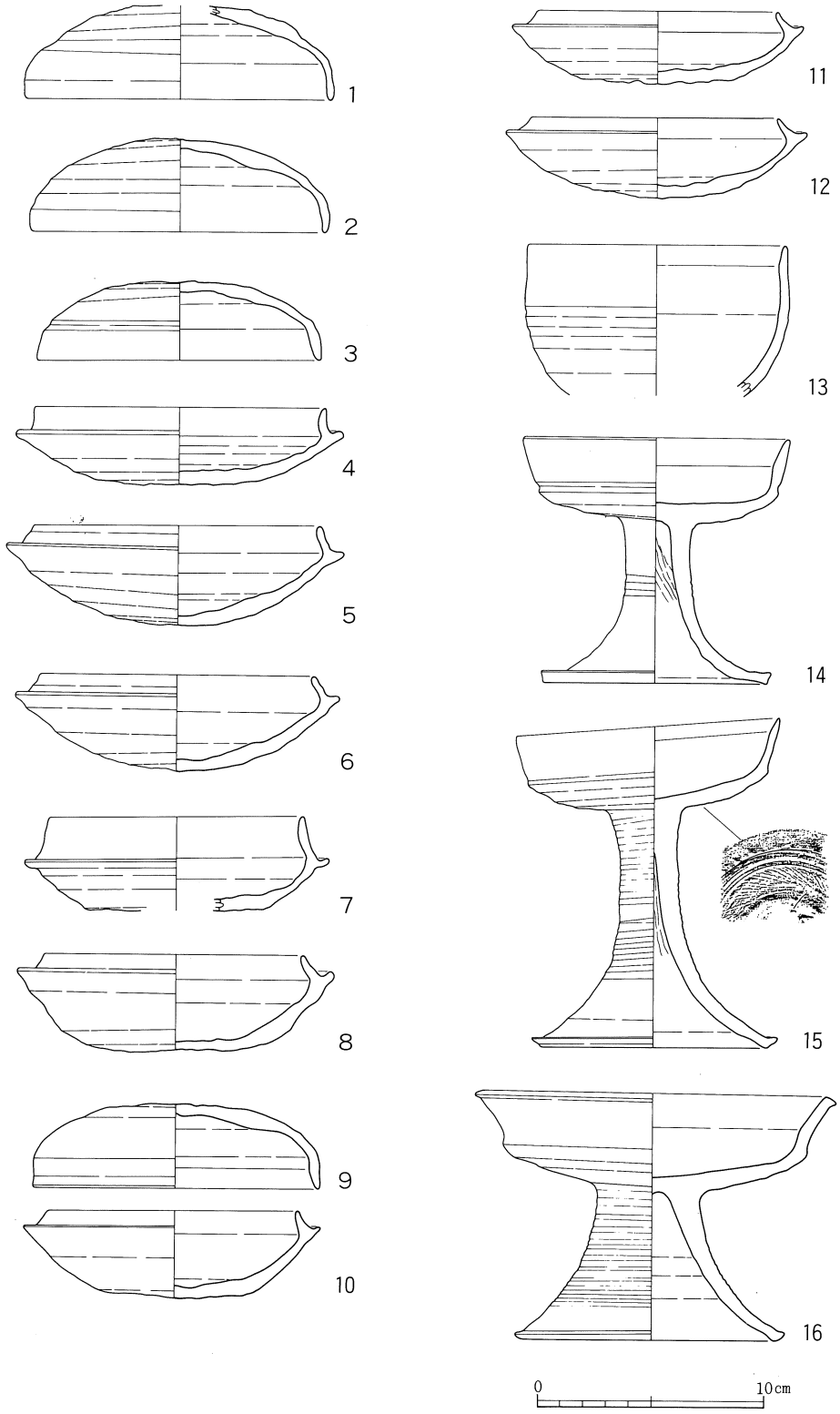
古墳周辺表採土器（第14図1～6）

これらの遺物は古墳以外に同時期の遺構が検出されていないので、古墳に帰属するものと考えられる。

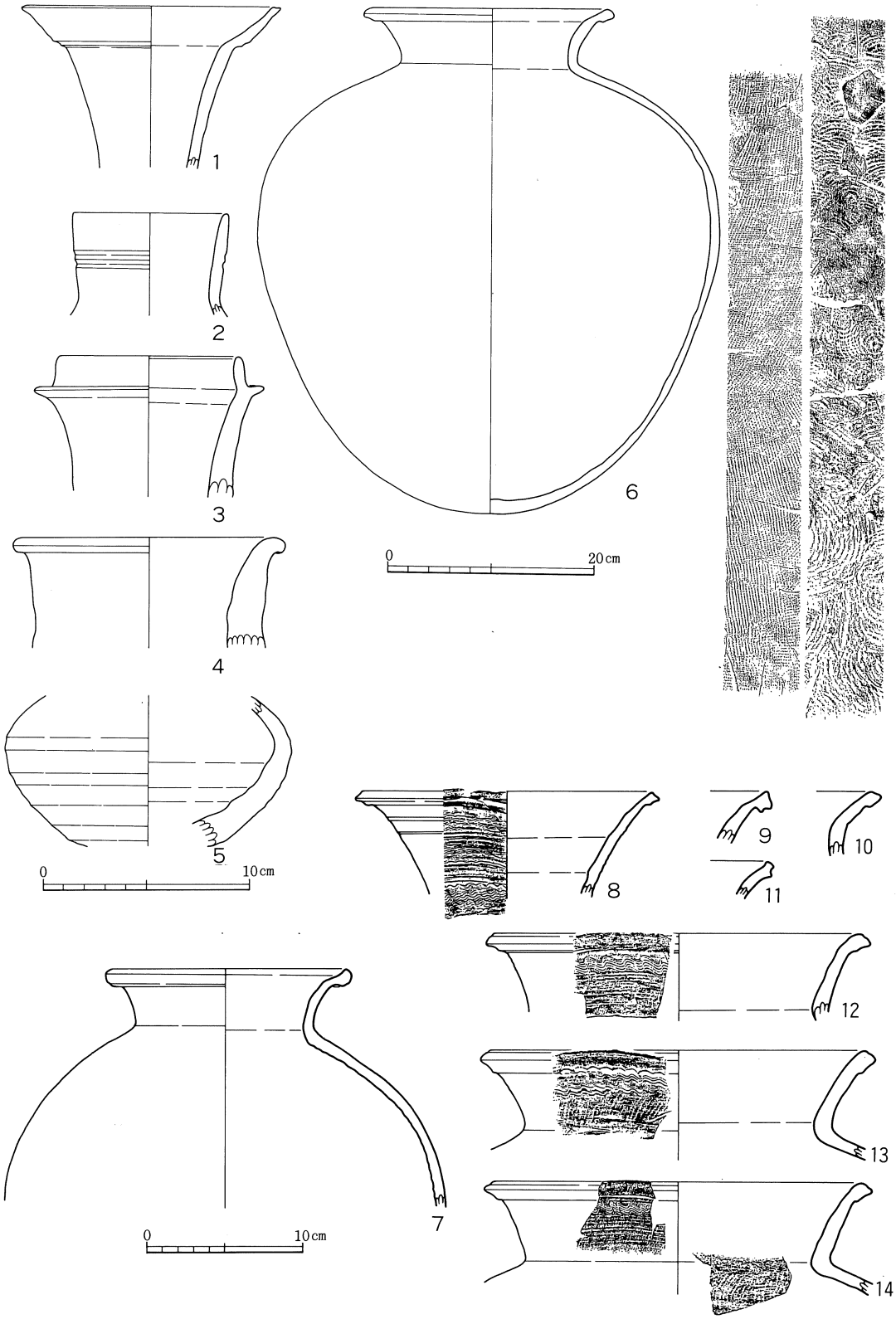
1・2は須恵器蓋坏である。1は山形をなす蓋で、2は器高の低い身である。天井部、底部には回転ヘラ削りが施されている。3は須恵器壺の口縁部破片である。4・5は須恵器甕の口縁～頸部破片で5の外面に櫛描波状文がみられる。6は土師器の口縁部付近の破片である。



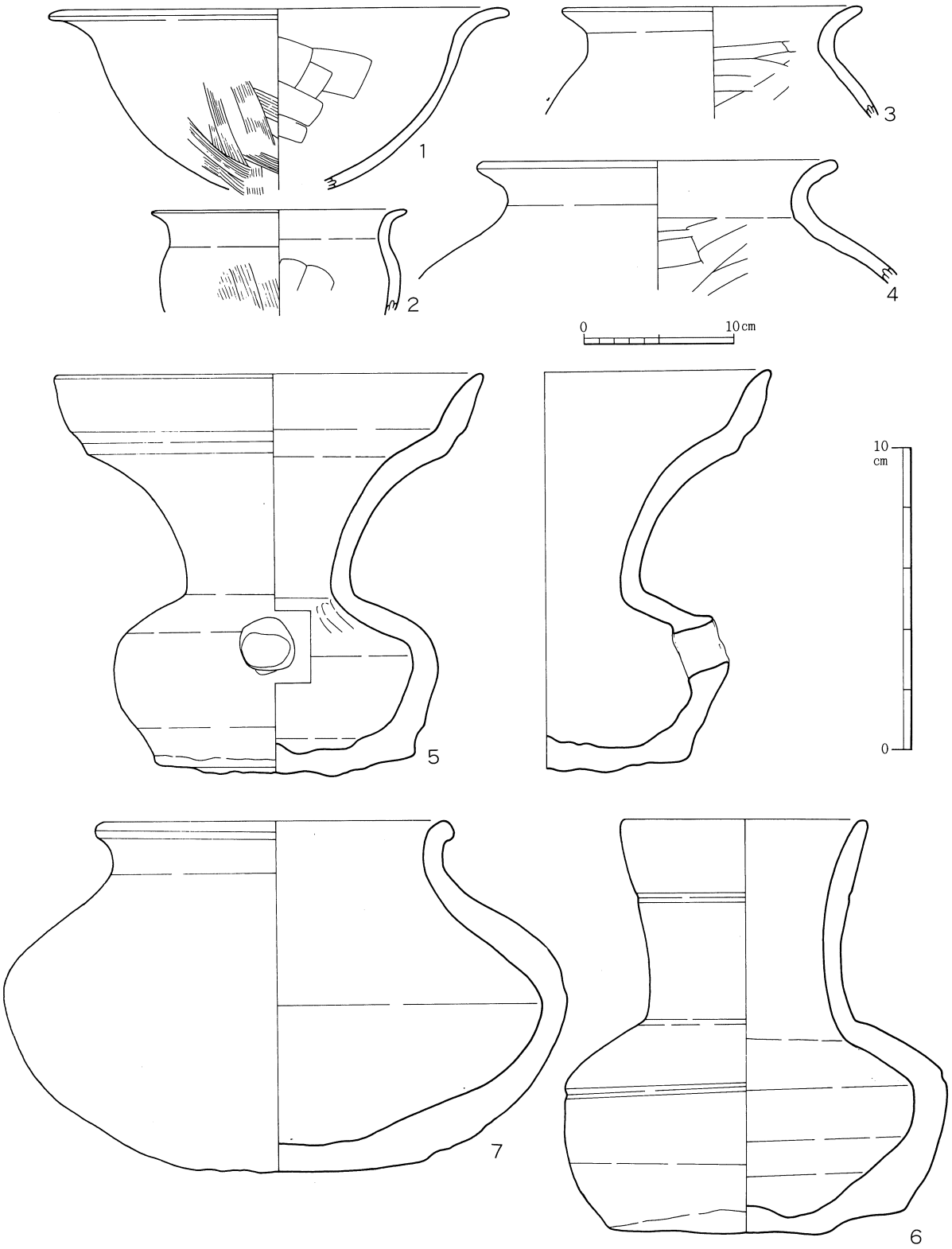
第10図　２号墳出土遺物実測図(1)



第11図　2号墳出土遺物実測図(2)



第12図　２号墳出土遺物実測図(3)



第13図　２号墳出土遺物実測図(4)

墳丘落ち込み内出土土器（第14図７～11）

７～９は土師質坏で体部下端は丸みを帯び、やや内湾気味に立ち上がる。８・９は底部に板状圧痕を残す。大きさは口径9.8㎝～10㎝、器高2.5㎝前後である。

10・11は瓦器で体部下半に指押さえがみられる。10は底部に断面三角形の低い高台が付く。口径14.7㎝、14.8㎝、器高5.7㎝である。

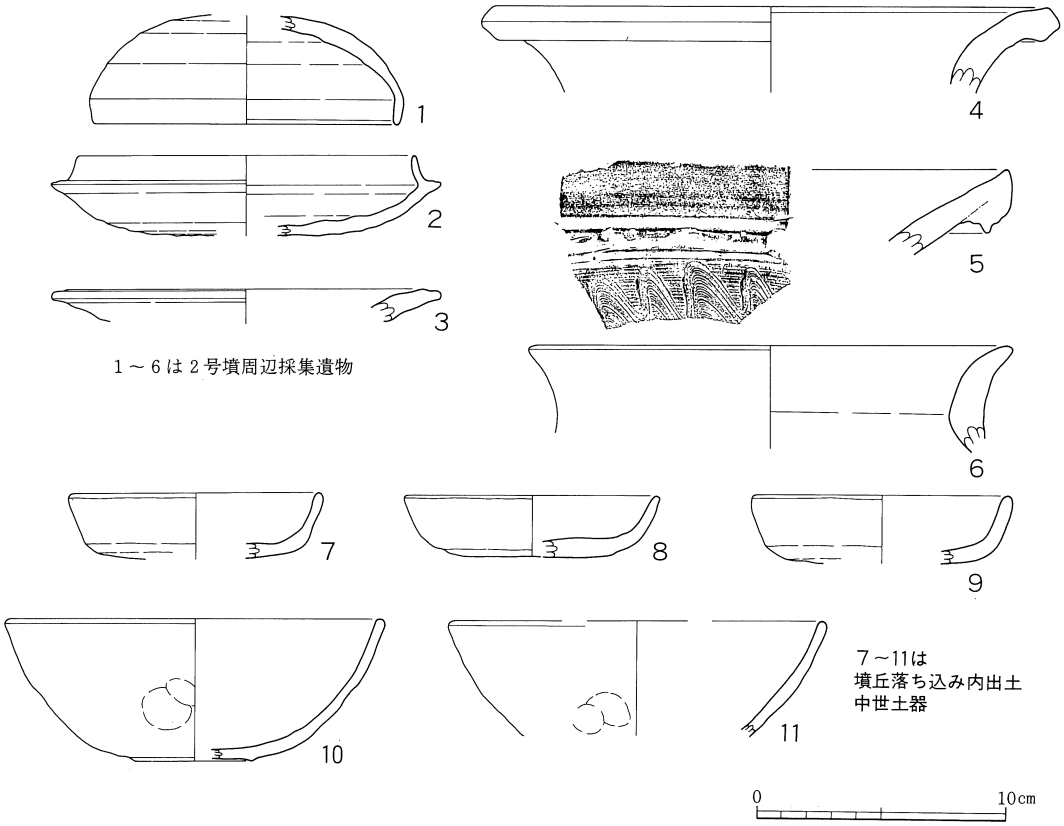
石室および周溝出土玉類、金属製品（第15図・第16図）

玉類（第15図１～43）はすべて石室内から出土したガラス製の小玉である。色調によって分類すると、藍色が１～１４、淡藍色は15・16、群青色は17、青緑色は18～29、淡青色は30～40、黄色は41～43のようになる。

形状は１が楕円形を呈するものの、ほかはほぼ円形である。大きさは１が最も大きく長径1.1㎝、短径0.8㎝、厚さ0.6㎝である。ほかの例は径0.35㎝～0.55㎝、厚さ0.2㎝～0.4㎝である。厚さが径以上になるものは16・26・36と少なく、ほとんどが偏平な形状となっている。

銀製環（第15図44）

石室埋土内から出土した耳環で完形品である。大きさは外径2.3㎝、断面径0.25㎝で、断面形



第14図　２号墳出土遺物実測図(5)

は円形を呈する。

鉄鏃（第16図１・２）

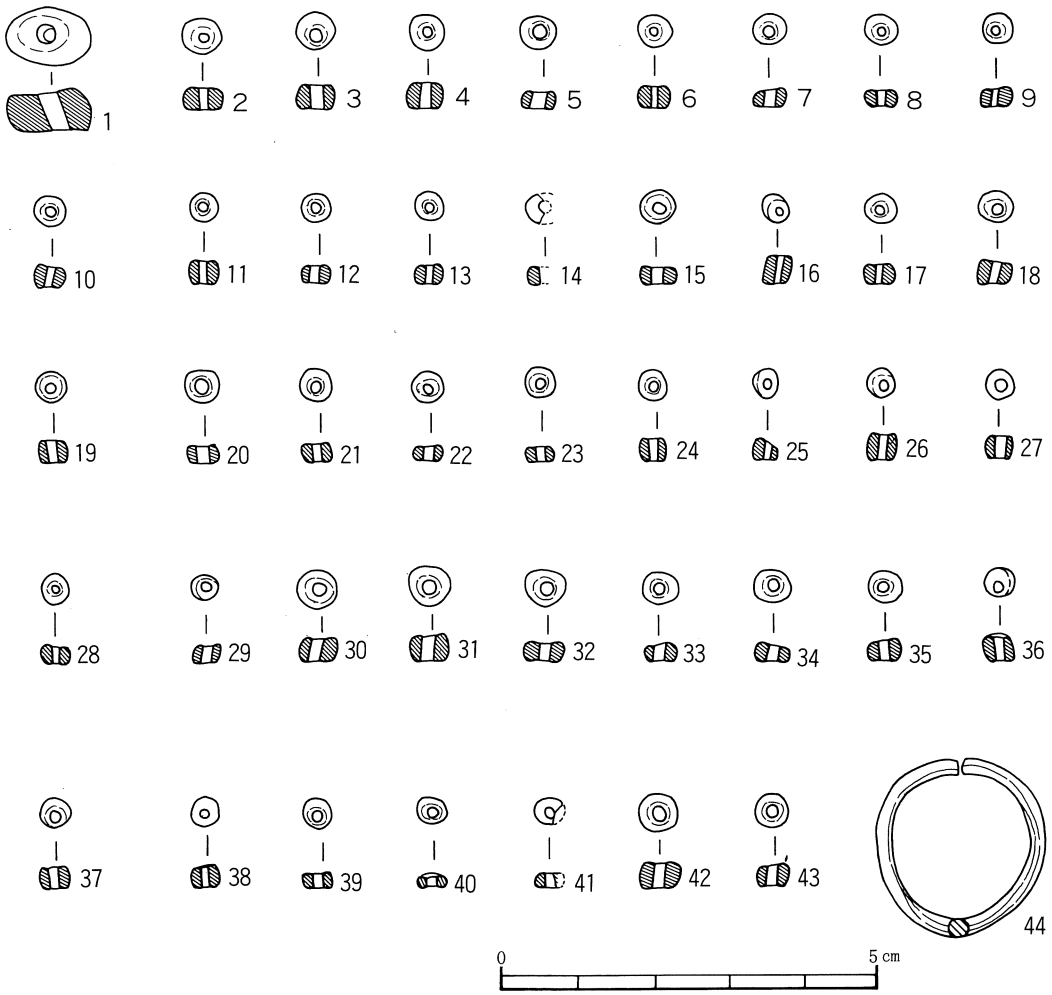
１の頭部は南側周溝内、１の茎部先端と２は石室の推積土中から出土した。１は方頭斧箭式で、大きさは全長19cmほどと推定され、頭部長8.6cm、刃部幅3.6cmである。刃部はやや弧状に湾曲する。２は茎部の大半を欠く。頭部は扇状に広がる。

刀子（第１6図３）

墳丘落ち込み内から出土したものである。身部と茎部の大半を欠き、両関付近の形状のみ確認できる。

遺物の時期について

石室内から出土した土器類はないが、墳丘周辺の出土遺物から古墳の年代が考えられる。須恵器からみると、ＴＫ43の古相を示す坏Ａタイプ、同一型式内でこれに続く坏Ｂタイプ、ＴＫ209



第15図　２号墳出土遺物実測図(6)

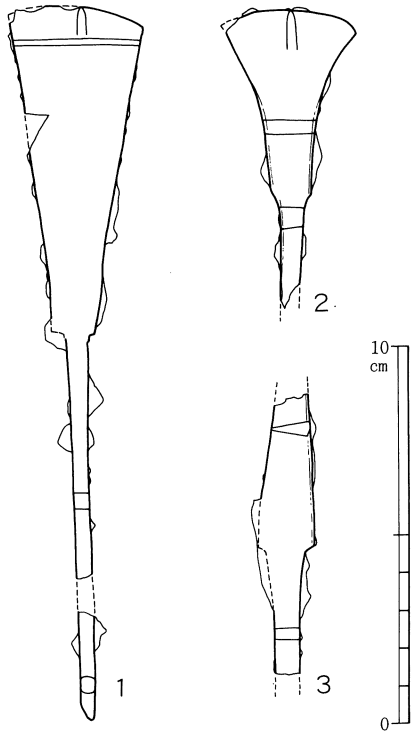
の坏Ｃタイプがある。従って、この古墳は初葬時から追葬までの時期を６世紀後半～末頃と考えられる。墳丘落ち込み内出土の土師質土器・瓦器は14世紀前半に比定される。

灰原（第１7図）

調査区南辺の斜面裾部で行ったトレンチ調査において確認した。当該地域は果樹園造成にともなって地形が著しく改変されており、確認できた灰原は土層断面に僅かに残っていたものである。調査区の位置する丘陵は、南側を東から派生する谷に開析されている。調査対象地区外となるが、この南向き斜面の谷入口付近に窯跡が確認されており、調査区で検出した灰原はその東側限界を示すものである。調査にともなって窯壁、須恵器などが出土した。

溝（第１8図）

溝１・２は等高線に沿って西から東方向に伸びる。東側の先端は造園によって掘削され消失している。西側は調査区の外へ伸びるため不明であるが窯跡の位置する方向へ向かう。溝の規模は、溝１が確認長17ｍ、幅0.24ｍ～１ｍ、深さ0.25ｍ～0.75ｍ、溝２は確認長31ｍ、幅0.6ｍ～1.1ｍ、深さ0.25ｍ～0.7ｍである。堆積土中から須恵器が出土しており、窯跡に関連する遺構と推定される。



第16図　２号墳出土遺物実測図(7)

灰原出土須恵器（第19図）

灰原で採集した須恵器である。器種は蓋坏、長頸壺、瑠、甕などである。

蓋坏（１～９）

坏蓋１・３・５は破片であるが、復元口径13㎝以上、器高４㎝ほどで大ぶりである。このうち１は天井部と口縁部の境に稜がつく。１・２の口縁部は内面に稜が残り、端部は細くなる。

坏身２・６～９は、口径12.3㎝～14㎝と幅がある。このうち２・４は口縁部が長く、６は短い口縁部をもち、反り気味に内傾する。

蓋坏は蓋の天井部、身の底部に回転ヘラ削りが施される。

長頸壺（10）

口縁～頸部の破片である。頸部は口縁部に向かって開き、沈線が２条巡る。口縁端部は内湾気味に緩く屈曲する。内外面共に横ナデで調整されている。

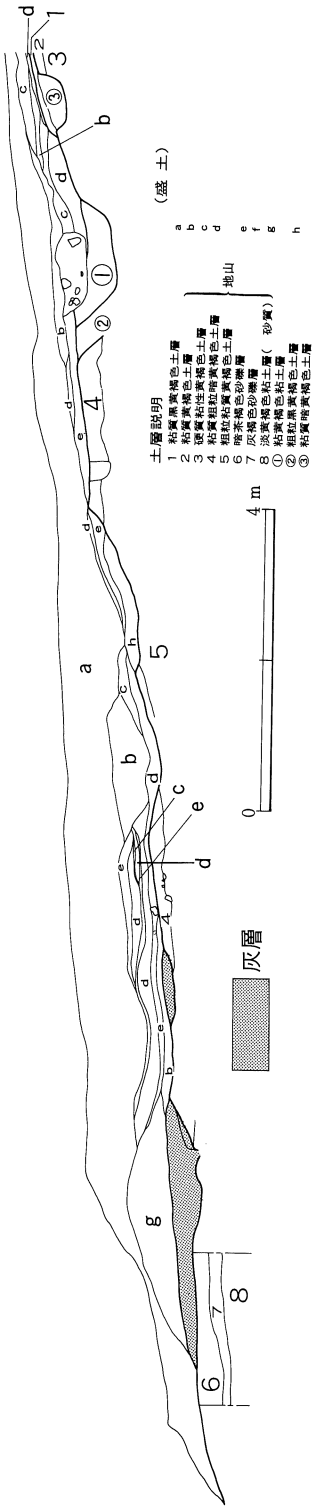
瑠（11）

体部１／２が残っている。体部上半と下半が張る形状を呈し、孔は上半部につく。体部下半には回転ヘラ削りが施されている。

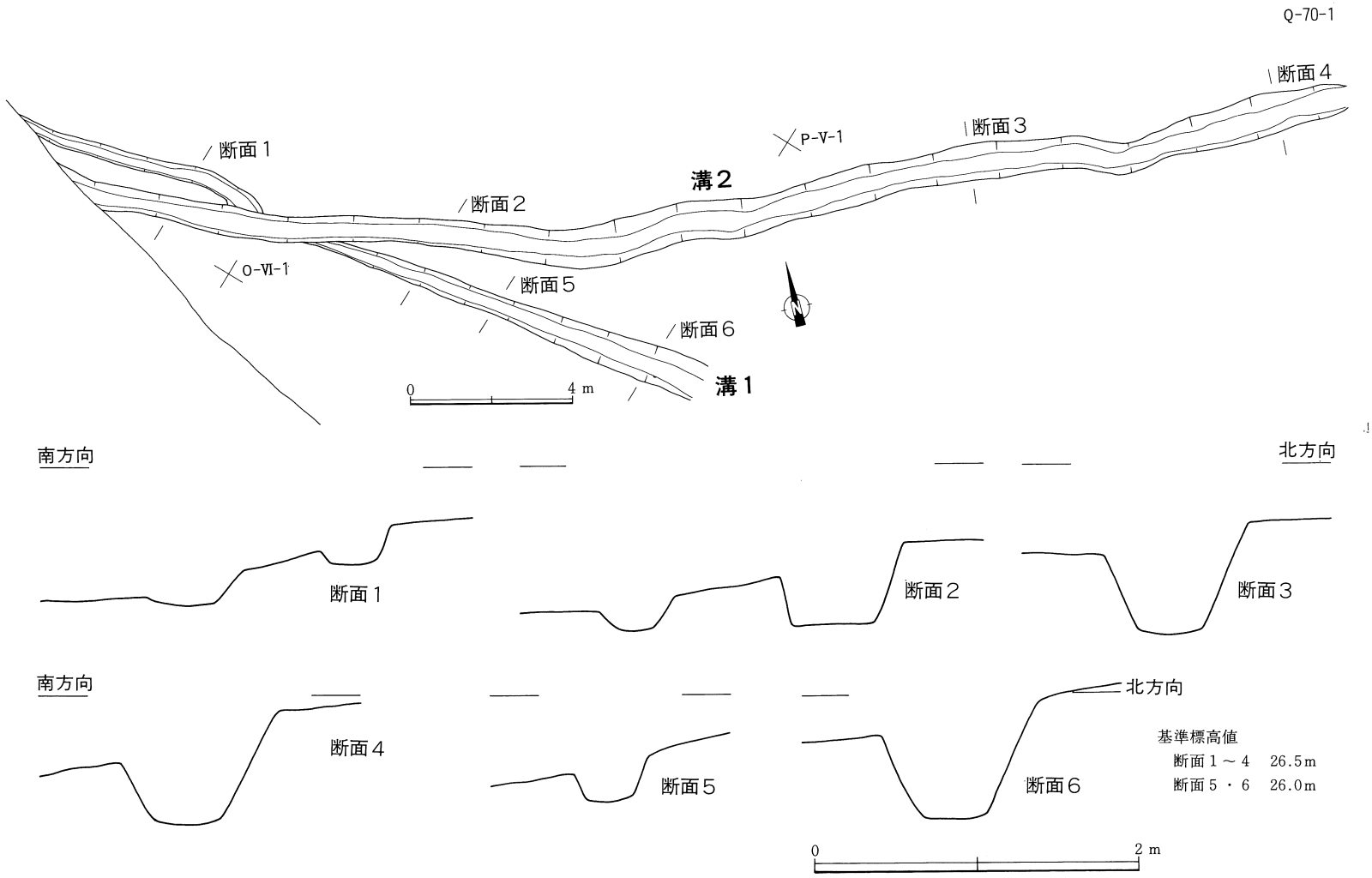
甕（12）

口縁～頸部の破片である。頸部は大きく外反する。口縁端部は丸く肥厚する。復元口径19.2㎝と小形である。胎土に砂粒を含み、焼成は不良で淡灰色を呈する。

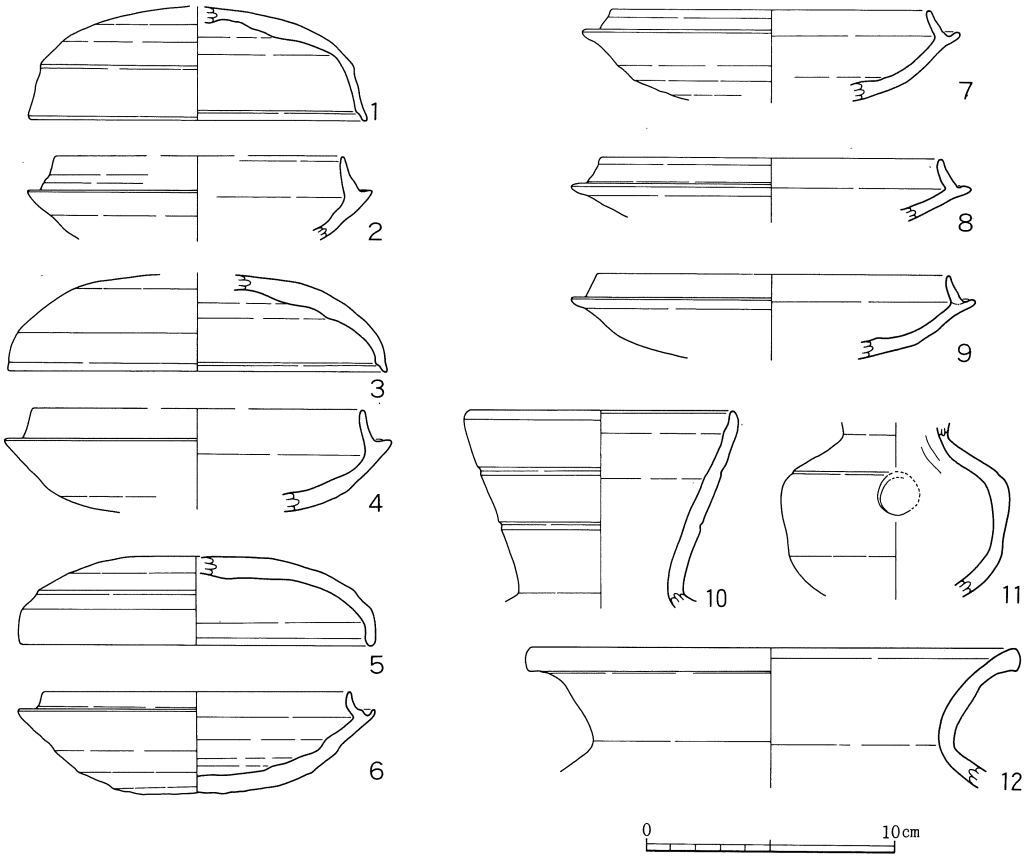
灰原から出土した須恵器の時期は、概ねＴＫ43に該当し、６世紀後半といえるが、坏に古相の特徴を残すものがあり、若干の幅があるものと考えられる。このことは灰原が時期の異なる複数の窯跡で形成されている可能性を示すものである。



第17図　灰原土層断面測図


Q-70-1
断面1
断面2
断面3
断面4
断面5
断面6
溝2
溝1
P-V-1
O-VI-1
0
4 m
南方向
北方向
断面1
断面2
断面3
南方向
北方向
断面4
断面5
断面6
基準標高値
断面1～4　26.5m
断面5・6　26.0m
0
2 m

第18図　溝1、2実測図



第19図　灰原出土須恵器実測図

表１　桐ケ迫遺跡２号墳出土遺物観察表

器種は表記以外はすべて須恵器　　大きさ
単位：cm　　口径
器高

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
10－1	坏蓋	14.7 4.5	天井部右回転ヘラ削	細砂やや多量、焼成は通有、器内部は還元が進んでいない。灰褐色。	完形　1－2とセット
10－2	坏身	12.9 4.6	底部右回転ヘラ削	細砂やや多量、焼成は通有、器内部は還元が進んでいない。灰褐色。	完形　1－1とセット
10－3	坏蓋	15.2 4.2	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含み、焼成は良好、灰褐色を基調とする。	完形　1－4とセット
10－4	坏身	13.5 4.2	底部右回転ヘラ削	斜長石粒・白色砂粒を含み焼成は通有灰褐色を基調とする。	完形　1－3とセット
10－5	坏蓋	13.8 4.0	天井部右回転ヘラ削	斜長石微量、白色砂粒若干、焼成は通有、青灰色～暗灰褐色。	完形　1－6とセット
10－6	坏身	11.7 4.8	底部右回転ヘラ削後、ナデ	斜長石粒・白色砂粒やや多量、焼成は通有暗灰色。内外面に黒色破裂粒。	完形　1－5とセット
10－7	坏蓋	14.0 3.8	器面の荒れのため調整不明	斜長石微量、白色砂粒若干含み、焼成は通有、青灰色～暗灰褐色。	完形　1－8とセット
10－8	坏身	12.3 4.7	底部右回転ヘラ削	角閃石粒微量、斜長石粒・白色砂粒若干。焼成は通有、暗灰色。内外面に黒色破裂粒。	完形　1－7とセット
10－9	坏蓋	14.4 4.0	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒やや多量、焼成はやや軟質、灰褐色。	完形　1－10とセットで出土したが焼成時のセットでない。
10－10	坏身	13.2 3.6	底部右回転ヘラ削	細砂若干。焼成は通有、暗灰色。内外面に黒色破裂粒顕著。	完形
10－11	坏蓋	14.4 3.2	天井部右回転ヘラ削	斜長石粒・白色砂粒を含む、焼成通有灰褐色を基調とする。	完形
10－12	坏身	12.7 3.5	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有、灰褐色を基調とする	完形
10－13	坏蓋	13.3 4.2	天井部右回転ヘラ削	雲母粒・白色砂粒を含む、焼成良好、赤灰褐色を基調とする。内面に黒色破裂粒。	完形
10－14	坏身	11.5 4.3	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は良好、黒灰褐色を基調とする。内外面に黒色破裂粒。	完形
10－15	坏蓋	13.1 4.2	天井部右回転ヘラ削	細砂若干、焼成は堅緻で良好、器面は暗赤褐色、断面は灰褐色。	完形
10－16	坏身	11.5 4.0	底部右回転ヘラ削	細砂若干、破裂砂粒痕、焼成は堅緻で良好。器面は暗赤褐色。	完形
10－17	坏蓋	15.2 —	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有、色調は灰色を基調とする。内面に黒色破裂粒。	口～頸　1/4
10－18	坏蓋	14.3 3.5	天井部右回転ヘラ削	斜長石粒・白色砂粒微量、焼成は通有灰褐色、内外面に黒色破裂粒。	ほぼ完形
10－19	坏蓋	15.2 4.1	天井部右回転ヘラ削	雲母粒微量、白色砂粒若干、焼成は通有。灰色。	口縁部　1/3欠

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
10−20	坏蓋	13.5 4.1	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒若干、焼成は通有。器面は暗赤褐色、内外面に黒色破裂粒。	口縁部　1/4欠
11−1	坏蓋	13.3 (4.1)	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色。	完形
11−2	坏蓋	12.8 4.1	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色内外面に黒色破裂粒。	完形
11−3	坏蓋	12.3 3.4	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。暗灰色。	口縁部　1/4欠
11−4	坏身	12.7 3.4	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を少量、焼成は通有。暗灰色。	口〜底部破片
11−5	坏身	12.6 4.4	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。灰色。	口縁部　2/3欠
11−6	坏身	12.0 4.2	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色。	完形
11−7	坏身	(11.1) —	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。暗灰褐色。	口〜底部破片
11−8	坏身	11.3 4.3	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成は通有。赤灰色内外面に黒色破裂粒。	ほぼ完形
11−9	坏蓋	12.3 3.7	天井部右回転ヘラ切り後、ナデ	細砂若干、破裂砂粒痕、焼成は通有。暗灰褐色。	完形
11−10	坏身	10.8 3.8	底部右回転ヘラ切り後ナデ	細砂やや多量、焼成は通有。暗灰色。	完形
11−11	坏身	10.5 3.2	底部回転ヘラ切り未調整	白色砂粒を含み焼成は通有。暗灰色。	1/3　個体
11−12	坏身	10.8 3.5	底部回転ヘラ切り未調整	白色砂粒を含み焼成は通有。暗灰色。	口縁部　1/4欠
11−13	埦	(11.2) —		斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成は通有。灰色。	体部破片
11−14	無蓋高坏	11.6 11.2	坏底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含み焼成は通有。灰褐色。	坏部　焼歪み　1/2欠
11−15	無蓋高坏	11.6 14.5	坏底部右回転ヘラ削・カキ目	白色砂粒を含み焼成は通有。色調は暗灰褐色。	完形
11−16	無蓋高坏	15.0 10.9	坏底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含み焼成は通有。色調は暗灰褐色。	完形　焼歪み
12−1	瓶	12.0 —	外面櫛描き波状文	白色砂粒を含み焼成は通有。暗灰色。	口〜頸部　1/2
12−2	提瓶	7.2		斜長石粒を含む、焼成は不良。色調は淡灰褐色。	口〜頸部　1/3
12−3	有蓋台付壺	8.6 —		細砂若干、焼成は堅緻で極めて良好。暗灰褐色。	口〜頸部残存
12−4	壺	(12.0) —	横ナデ	斜長石・角閃石・白色砂粒を含む、焼成はやや不良。淡灰褐色。	口〜頸部　1/3

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
12－5	壺	—	体部上半は横ナデ、体部上半は回転ヘラ削	斜長石・白色砂粒を含む、焼成不良。焼成は不良。淡灰褐色。	体部　1／4
12－6	甕	22.5 48.4	口縁部横ナデ、胴外面木目直交叩き内面同心円当具痕	細砂若干、焼成は良好。灰褐色。	口縁部　5／6欠。底部外面に焼成時に坏3個を置いた痕跡が残る
12－7	甕	14.9	口縁部横ナデ、胴外面平行叩き、内面同心円当具痕	白色砂粒を含む、焼成は通有暗灰色。	口～胴部上半
12－8	甕	18.4 —	外面櫛描き波状文	白色砂粒を含む、焼成は通有暗灰色。	口～頸部　2／3
12－9	甕	— —	横ナデ	白色砂粒を含む、焼成は通有暗灰色。	口～頸部破片
12－10	甕	— —	横ナデ	雲母・白色砂粒を含む、焼成は通有。灰色を基調とする。	口～頸部破片
12－11	甕	— —	横ナデ	斜長石・白色砂粒を含む、焼成は通有。灰褐色。	口～頸部破片
12－12	甕	23.6 —	口縁部横ナデ、頸外面櫛描き波状文カキ目後横ナデ	斜長石粒少量、白色砂粒若干、焼成は通有。灰色を基調とする。	口～頸部破片
12－13	甕	23.6 —	口縁部横ナデ、頸外面櫛描き波状文胴部平行叩	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色を基調とする。	口～頸部破片
12－14	甕	22.7 —	口縁部横ナデ、頸外面櫛描き波状文カキ目後横ナデ胴部平行叩	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色を基調とする。	口～頸部1／4
13－1	土師器高坏	29.0	口縁部ナデ、体部外面ハケ、内面ヘラ削後、ナデ	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成通有。橙色。	底部、口縁部　1／4欠
13－2	土師器壺	16.1	口縁部ナデ、体部外面ハケ、内面ヘラ削	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成不良。橙色～褐色。	口～体部破片
13－3	土師器甕	19.0	口縁部ナデ、内面ヘラ削	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成不良。橙色。	口縁部　2／3
13－4	土師器甕		口縁部ナデ、内面ヘラ削	斜長石粒・角閃石粒を含む、焼成不良。赤橙色。	口～胴部　1／2
13－5	小形甕	6.9 6.8	横ナデ、底部外面周縁を回転ヘラ削	白色砂粒やや多量、焼成は良好。灰褐色。	口～頸部　一部欠
13－6	小形長頸壺	4.1 6.9	横ナデ、底部外面一方向ヘラ削、口縁～体部内面に斜方向のヘラ調整痕	白色砂粒若干、焼成は良好。灰褐色。	体部一部欠損
13－7	土師器小壺	5.6 5.8	ナデ調整	斜長石粒を含む、焼成不良。黄褐色。	ほぼ完形
14－1	坏蓋	12.0 3.2	天井部右回転ヘラ削	白色砂粒を微量含む、黒色破裂粒。焼成通有、灰褐色を基調とする。	口縁部　破片
14－2	坏身	13.3 3.2	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色。	1／3
14－3	壺	(14.2)	横ナデ	色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色。	口縁部破片
14－4	甕	(22.2)	自然釉のため調整不明	白色砂粒を含む、焼成通有、灰褐色。	口～頸部破片

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
14－5	甕	— —	口縁部横ナデ、頸部外面カキ目後、櫛描き波状文	斜長石粒少量、白色砂粒を含む、焼成通有。灰褐色。	口～頸部破片
14－6	土師器甕	18.7	ナデ調整	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成不良。橙色。	口～頸部　2／3
14－7	土師質坏	(9.9) 2.4	ナデ調整、底部板状圧痕	斜長石粒、角閃石粒、白色砂粒を含む、焼成通有。橙色。	口～底部破片
14－8	土師質坏	(9.8) 2.6	ナデ調整	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成通有。橙色。	1／3
14－9	土師質坏	(10.0) —	ナデ調整、底部状圧痕	斜長石粒、角閃石粒、白色砂粒を含む、焼成通有。淡橙色。	口縁部破片
14－10	瓦器椀	(14.7) 5.7	ナデ、体部下半指押さえ	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成通有。灰白色～黒灰色。	口～底部破片
14－11	瓦器椀	14.8 5.7	ナデ、体部下半指押さえ	斜長石粒、角閃石粒を含む、焼成通有。白灰色～黒色。	口～底部破片

表2　桐ケ迫遺跡灰原出土須恵器観察表

図版番号	器種	大きさ	整形・調整の特徴	胎土・焼成・色調	残存度・備考
19－1	坏蓋	13.4 4.5	天井部右回転ヘラ削	細砂若干、焼成良好、灰褐色を基調。	1／3　個体
19－2	坏身	(12.4)		細砂若干、焼成良好、暗灰褐色。	1／4　個体
19－3	坏蓋	15.0 3.9	天井部右回転ヘラ削	砂粒若干、砂粒破裂痕、焼成通有、灰褐色を基調とする。	1／6　個体
19－4	坏身	(12.4) —		砂粒若干、砂粒破裂痕、焼成堅緻良好。暗灰褐色。	口縁部破片
19－5	坏蓋	—	天井部右回転ヘラ削	砂粒・細砂若干、焼成は堅緻良好、灰褐色を基調とする。	1／5　個体
19－6	坏身	12.3 4.1	底部右回転ヘラ削	白色砂粒を含む、焼成通有、暗灰褐色を基調とする。	1／5　個体
19－7	坏身	(12.7) —	底部右回転ヘラ削	細砂を含む、焼成通有、暗灰褐色。	口縁部　1／6
19－8	坏身	13.5 —		斜長石粒を含む、焼成通有、暗灰色。	口縁部　1／6
19－9	坏身	(14.0) —	底部右回転ヘラ削	石英粒・細粒若干、焼成堅緻良好。暗灰褐色を基調とする。	1／6
19－10	長頸壺	(10.4) —	横ナデ	細砂若干、砂粒破裂痕、焼成堅緻、暗灰色を基調とする。	口縁部破片
19－11	瓶			砂粒若干・細砂やや多量、焼成良好。	体部　1／2
19－12	甕	(19.2) —	横ナデ、頸部外面カキ目状調整	細砂・砂粒若干、焼成不良、淡灰色。	口縁部　1／3

桐ケ迫遺跡近世墓地（第20図～第25図、第27図～第30図）

墓地は丘陵の先端に近い西向き斜面やや上部に位置する。墓域は斜面上部を掘削し、平坦に整形されている。墓は３基造られており、南から周溝を伴う１号、２号、３号と位置する。

墓地の造営は17世紀後葉から19世紀前葉の間に行われたと考えられる。

１号墓　下部構造は円形墓坑で上部径0.96ｍ、底面径0.7ｍ、深さ0.5ｍの規模をもつ。底面はほぼ平坦をなす。墓坑内の埋土は上半部において急激な堆積が認めら、底面中央部に脂質によると思われる硬化範囲がみられた。遺物としては墓坑の底面付近の北寄に礫とこれに接して錫杖１点、東寄に摩紫金袈裟の輪宝型の金物が６点、このほか銅銭６枚が出土している。

墓坑の上部には調査前に、径1.4ｍの範囲に高さ約1.3ｍの盛土を確認していた。しかし調査着手の直前に大半を掘削されるという事態が生じたため、十分な観察ができなかった。ただ盛土ついては、礫混じりの軟質黄褐色土が用いてられていたことを確認している。また盛土の残存状況は裾の広がりが短いため、後世の改変を受けた可能性がある。

埋葬主体部を囲む周溝は、径5.5ｍ～６ｍの円形に掘られおり、幅0.6ｍ～1.3ｍ、深さ0.03ｍ～0.29ｍの規模をもつ。周溝は全周せず、西側で溝の両端が0.6ｍほど離れる。また斜面上寄りでは周溝が墓域の平坦面からさらに斜面の裾を切って掘られている。

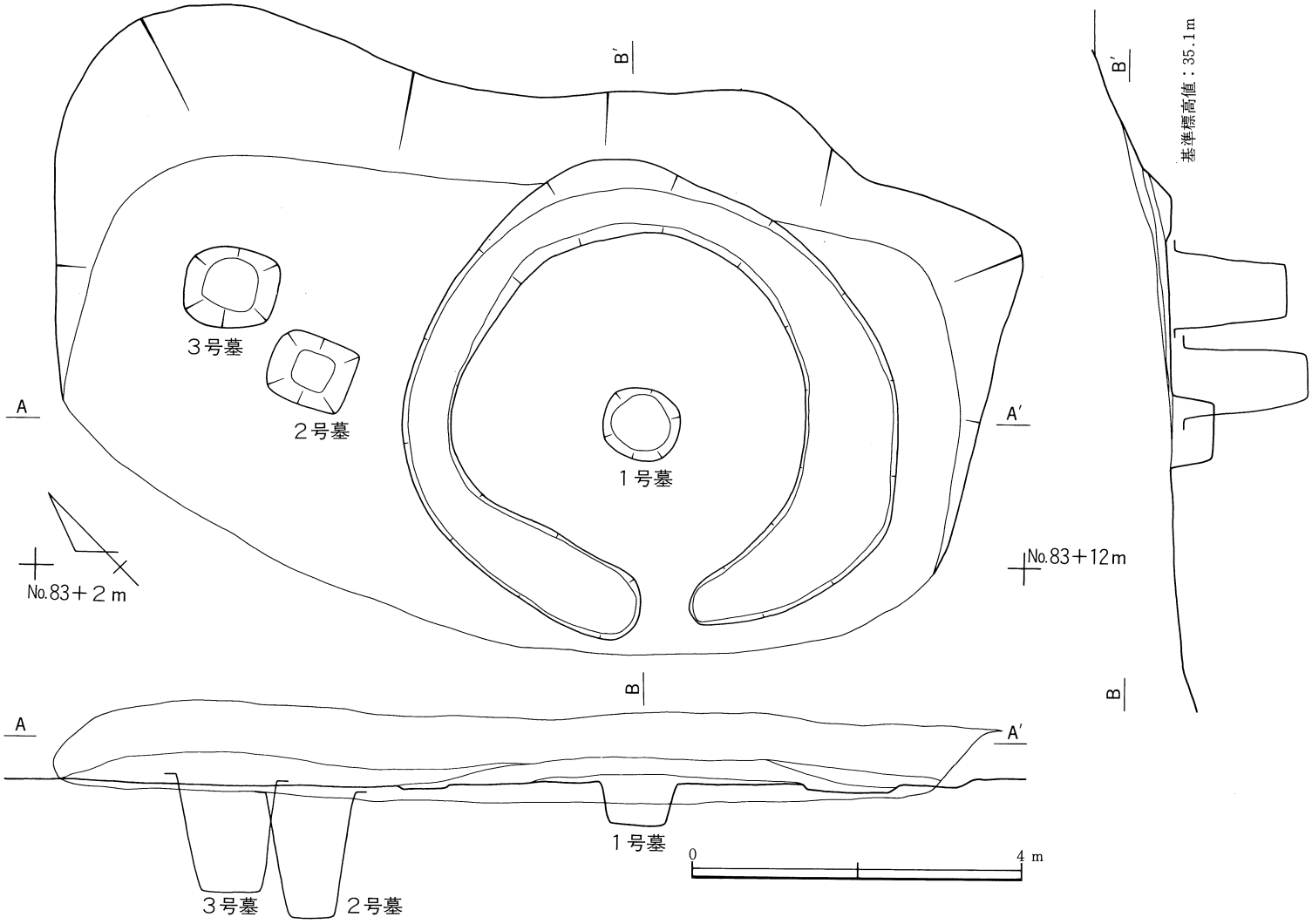
２号墓　１号墓周溝の外縁から0.65ｍ北に位置する。下部構造は上縁1.03ｍ×0.82ｍの長方形、底面が0.49ｍ×0.46ｍの方形を呈する。深さは1.57ｍである。

出土遺物は確認されていない。

３号墓　２号墓の西に0.3ｍの位置に近接して設けられている。下部構造は不整方形を呈する土坑である。上縁は1.13ｍ×１ｍで、底面は0.64ｍ×0.63ｍの不整円形を呈する。深さは1.5ｍである。出土遺物は、底面中央部から３種類の「寛永通寶」６枚が検出された。調査前の墓地状況については、建設省大分工事事務所が実施した「墳墓調査」から知ることができる。以下に示したものは、調査で確認した墓域および周辺の墓標の種類と数量である。墓石の種類は４タイプ７個である。Ａタイプは基壇の上に位牌型墓標をもつもの（３基）。Ｂタイプは基壇の上に球状の自然石が伴う（２基）。Ｃタイプは方形の基壇のみが残る（１基）。Ｄタイプは方形錐状のものである（１基）。Ｄタイプについては自然石か石塔類の残欠か墳墓調査表の付図からは判断できない。このうち現存し、墓標と認定できるものはＡタイプである。またこれらには銘文が刻まれている。

墓標１　正　面　梵字（ア）大越家高林院養須（順？）大徳
　　右側面　元禄二巳年
　　左側面　六月〇二日

墓標２　正　面　梵字（ア）十輪房周全墓
　　右側面　文化十一甲戌天
　　左側面　九月十五日



第20図　桐ケ迫遺跡近世墓地全体図

墓標３　正　面　梵字（ア）大越家高林院養須（順？）大徳

右側面　寛延二巳年

左側面　五月十九日

墓標と下部構造の関係については、位置的に対応するものではないが、Ａタイプ墓標３基は墓坑の数と一致しており墓標が二次的に移動した可能性が考えられる。このことを考慮して墓標と下部構造の対応関係を想定すると次のようになる。

墓標１→１号墓、墓標２→２号墓、墓標３→３号墓

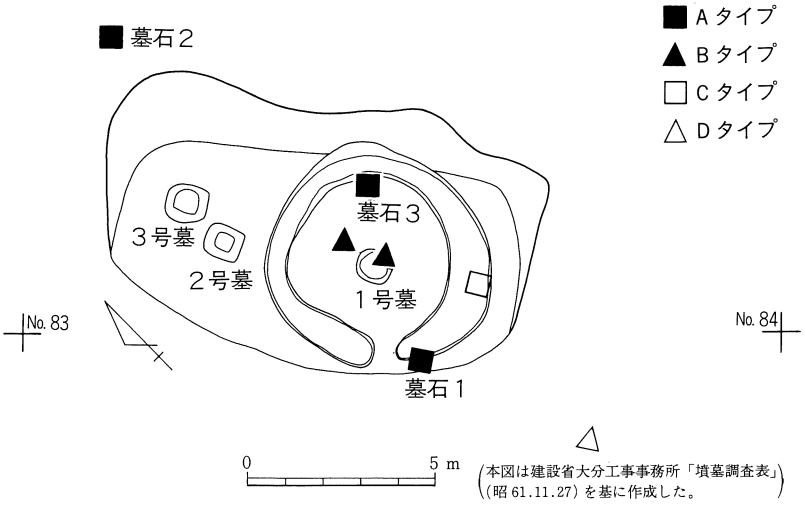
このように桐ケ迫遺跡の近世墓地は墓標の銘文からみると、修験者を埋葬したことがほぼ確実であり、とくに１号墓は錫杖や袈裟金具の出土はこのことを補強するものである。

出土遺物（第26図、第31図、第32図）

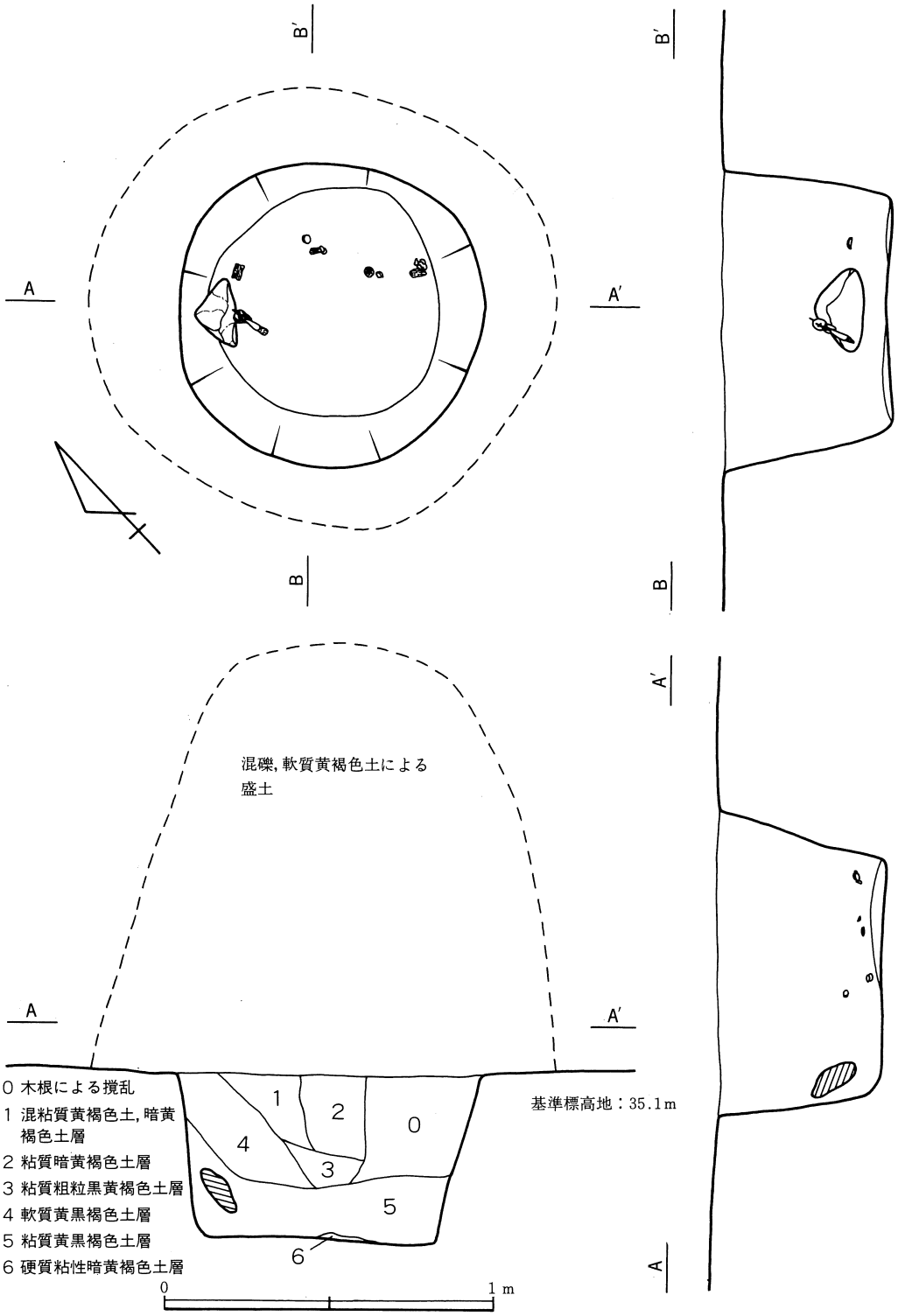
１号墓からは錫杖１点、袈裟金具６点、銅銭６枚が出土している。

錫杖は錫杖頭が完存し、杖部は一部が残存していたものである。手錫杖と考えられる。頭部は銅製で、総高14.7㎝である。輪は高さ5.2㎝、幅5.6㎝で、四天の仰月形座が造りだされ、その内側に抉りをもつ。全体に巣文形を呈し断面形が菱形になっている。輪頂に五輪塔を鋳出し地輪部分の表裏に「×」が刻まれている。輪の中央を通る柄頭は相輪形に表現され、基部から左右に簡略化された蕨手が伸び、その上部に形式的な相輪がつく。輪の下に続く柄は袋穂状に造られ、断面は八角形をなす。表面は四節に分けられ、その間に蓮弁が刻線で表現されている。蓮弁は稜線を中心にして刻まれ４展開する。柄の下端から2.6㎝の位置に径0.3㎝の柄穴があり、木質の目釘が杖部を固定した状態で残っている。遊環は輪の左右に２個づつ付く。大きさは径５㎝、幅0.4㎝、厚さ0.3㎝である。

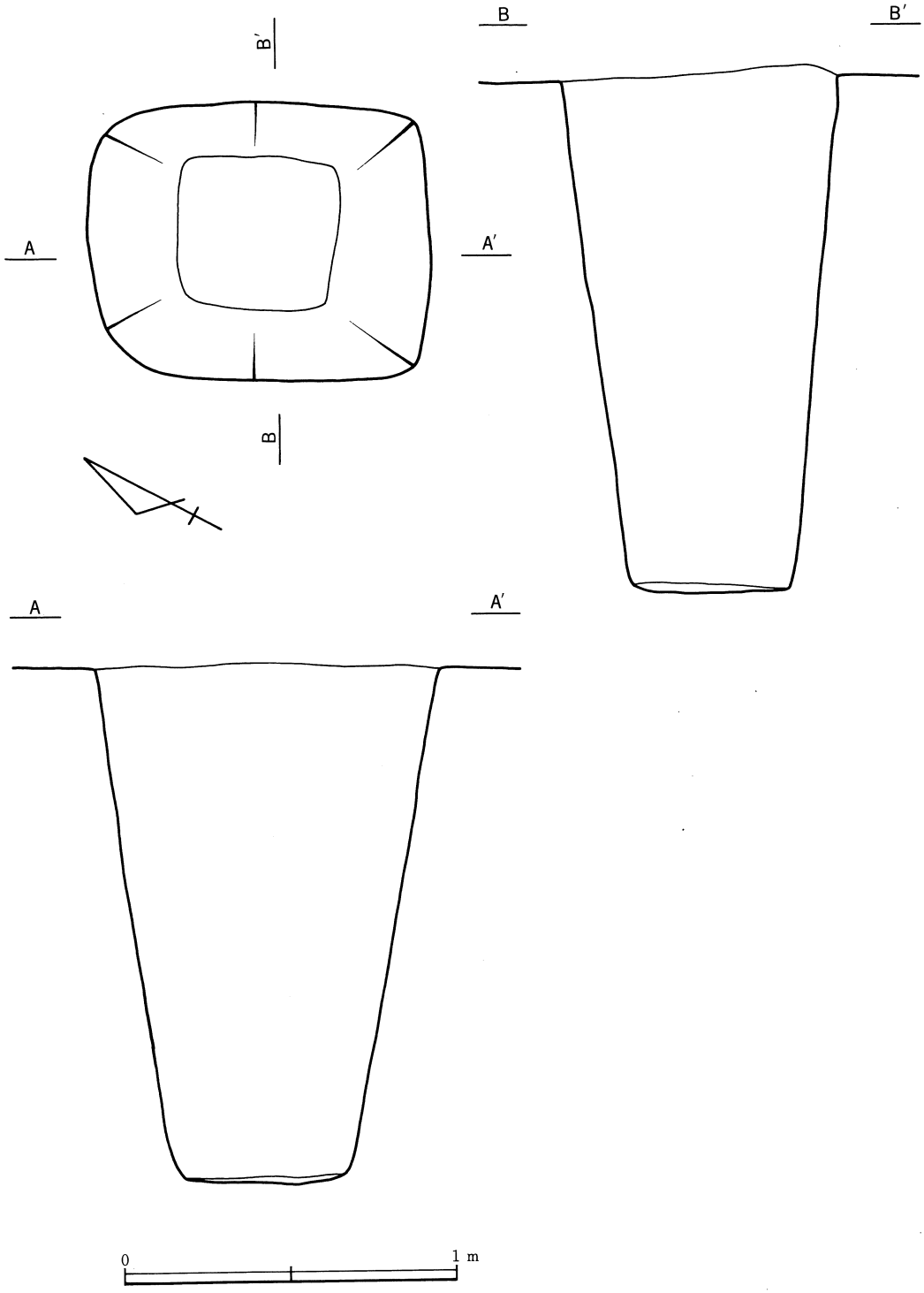
袈裟金具は摩紫金袈裟の輪宝型の金物（註）である。これに袈裟の一部が金物の範囲に限って鋲に留められ状態で残っていた。布には金糸を交えた織りが観察できる。輞は径2.4㎝、珠文16個が配されている。輞の八方に長さ0.2㎝の鋒が付く。輻は鋒と轂を



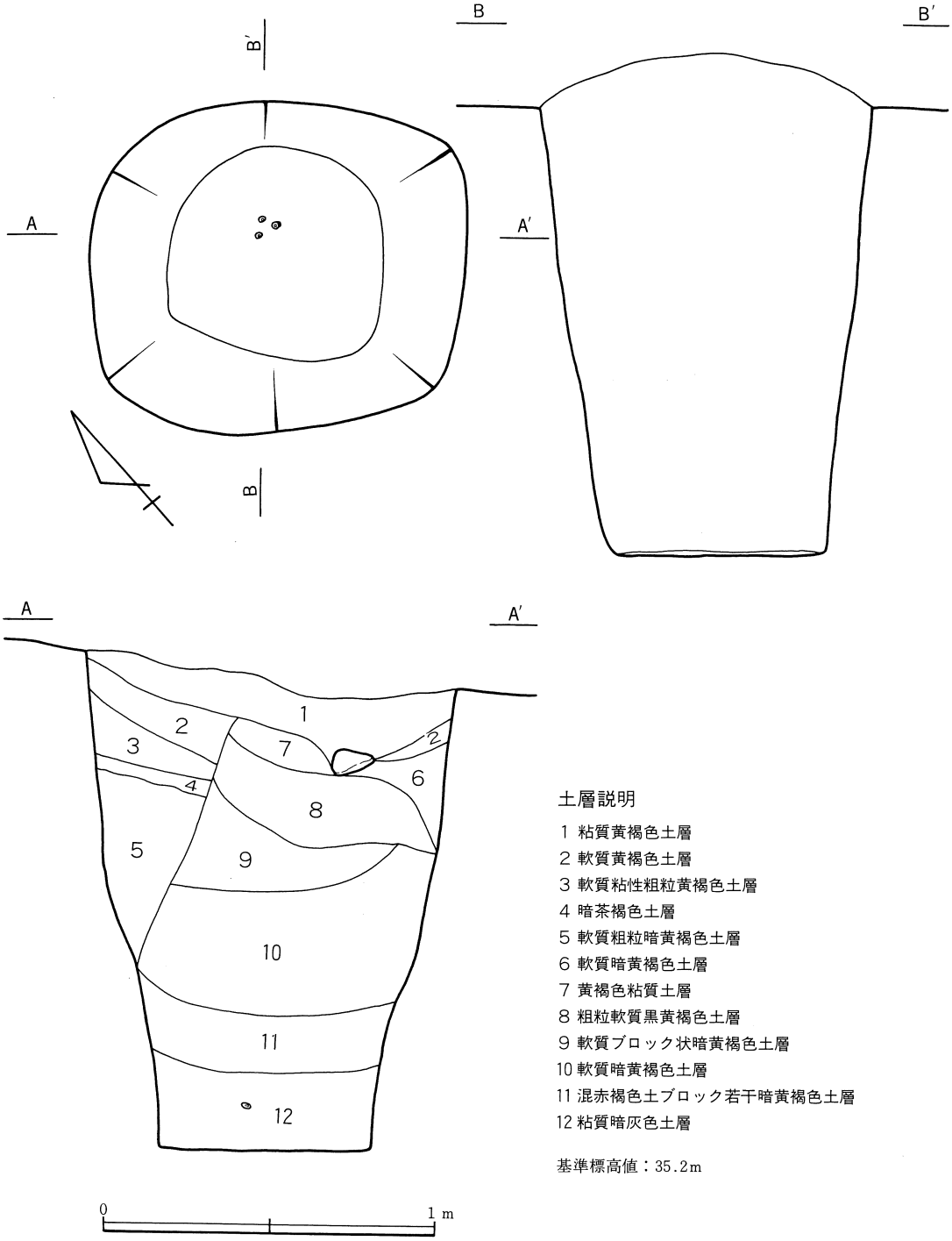
第21図　近世墓周辺墓石位置図


B′
A
A′
B
B′
B
A′
A
混礫, 軟質黄褐色土による
盛土
A
A′
0 木根による攪乱
1 混粘質黄褐色土, 暗黄
褐色土層
2 粘質暗黄褐色土層
3 粘質粗粒黒黄褐色土層
4 軟質黄黒褐色土層
5 粘質黄黒褐色土層
6 硬質粘性暗黄褐色土層
1
2
0
4
3
5
6
基準標高地：35.1m
0
1 m
A

第22図　1号墓実測図



第23図　2号墓実測図

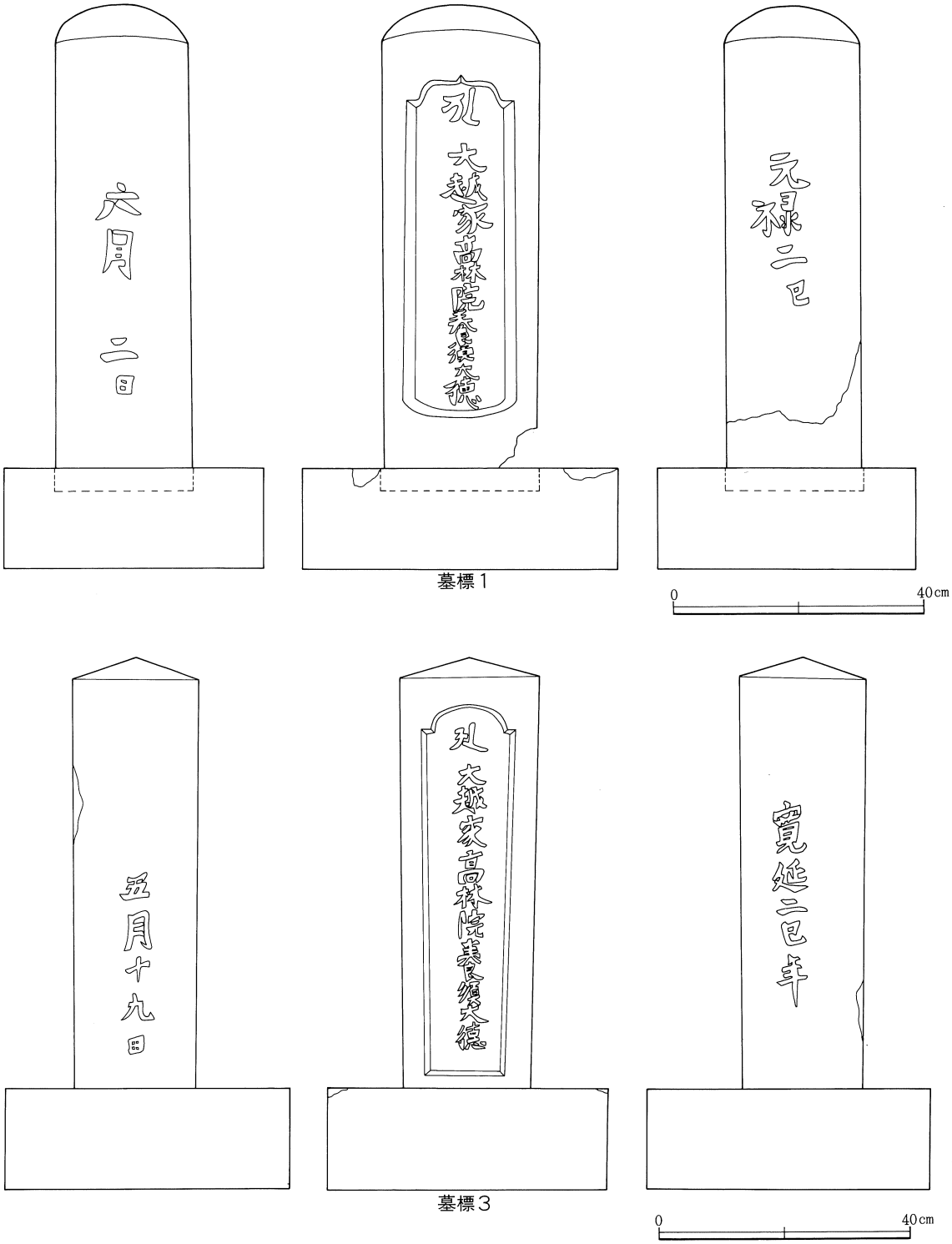


土層説明

1 粘質黄褐色土層
2 軟質黄褐色土層
3 軟質粘性粗粒黄褐色土層
4 暗茶褐色土層
5 軟質粗粒暗黄褐色土層
6 軟質暗黄褐色土層
7 黄褐色粘質土層
8 粗粒軟質黒黄褐色土層
9 軟質ブロック状暗黄褐色土層
10 軟質暗黄褐色土層
11 混赤褐色土ブロック若干暗黄褐色土層
12 粘質暗灰色土層

基準標高値：35.2m

第24図　3号墓実測図



墓標１

墓標３

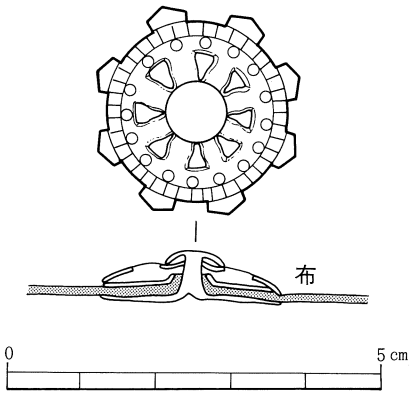
第25図　墓標１・２実測図

結ぶ線上に８本伸びる。鋲は径0.85㎝の半球形で轂をなし裏側に脚部が付く。脚部は袈裟の布を貫通し折り曲げて留められている。金物が袈裟に装着された状態での厚さは0.7㎝となる。

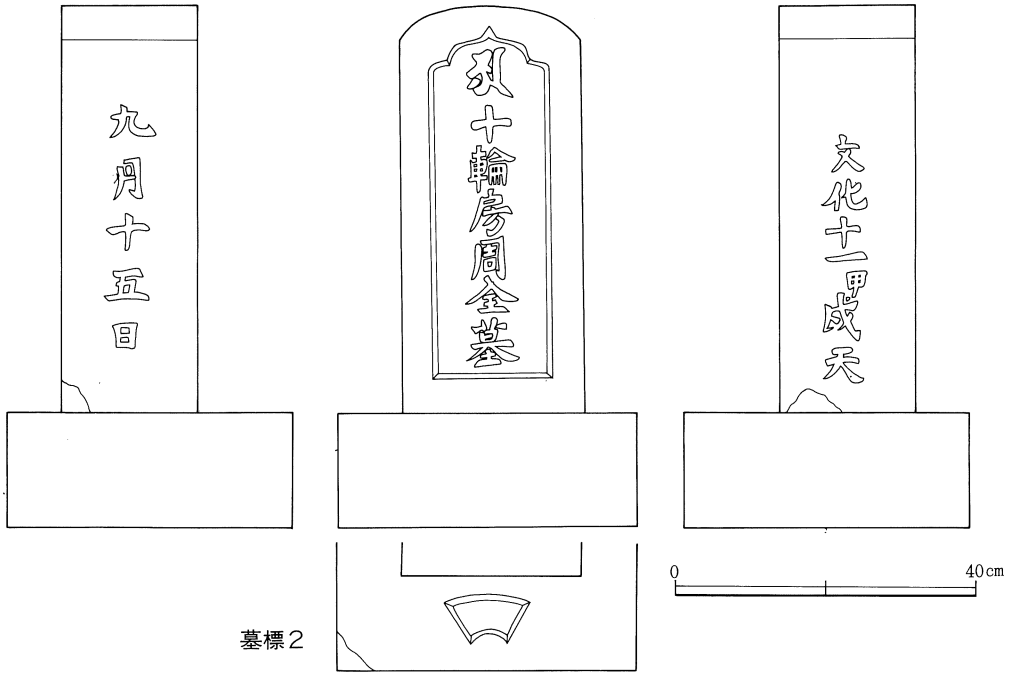
銅銭は６点出土している。そのうち元豊通寶は１点、寛永通寶は古寛永４点、新寛永１点である。

３号墓から出土した遺物は、銅銭のみである。銅銭は寛永通寶６点で、古寛永１点、新寛永５点である。このうち新寛永については、背面「元」が１点、「文」１点、無文３点の３種類を確認している。

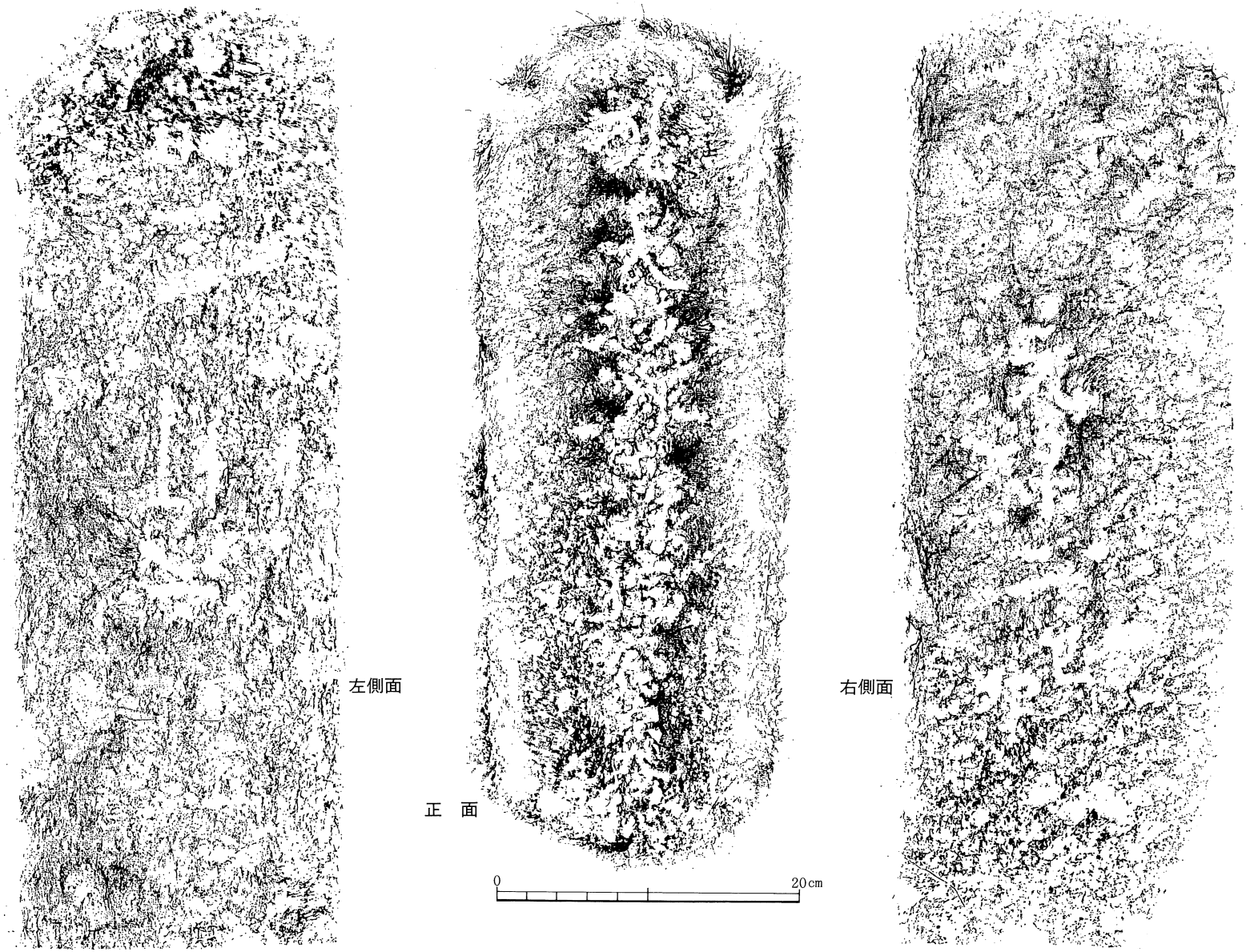
註　輪宝の名処を用いた（「輪宝」『仏具辞典』
　　清水乞編、平成４年７版、東京）



第26図　１号墓出土輪宝型金物復元図

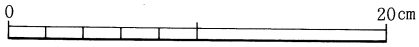


第27図　墓標３実測図

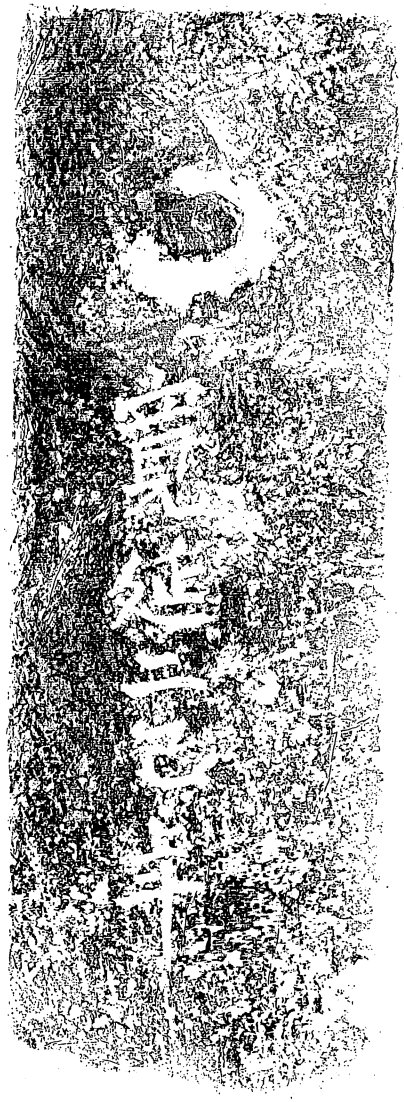


第28図　墓標１拓影図

左側面

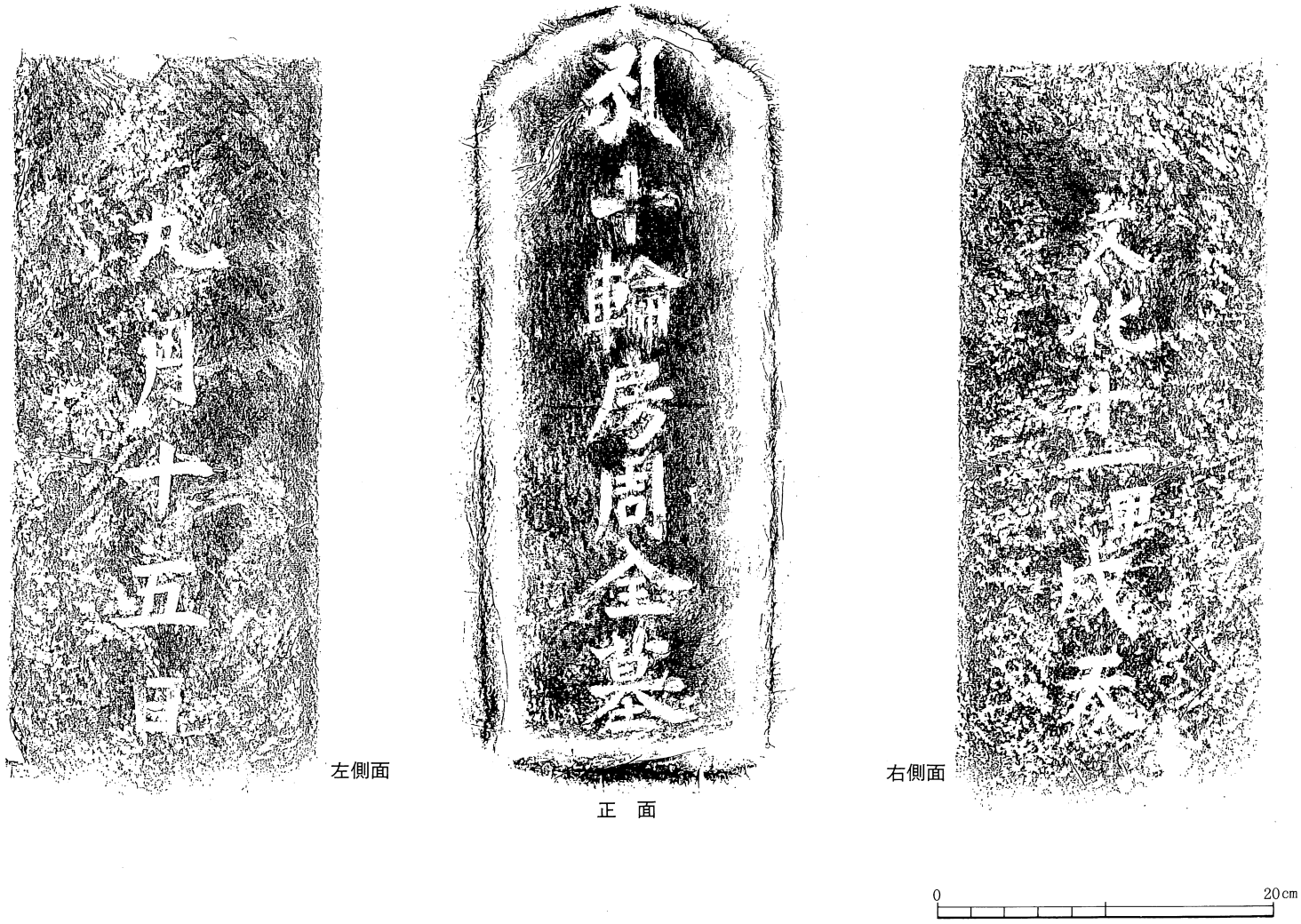


正　面

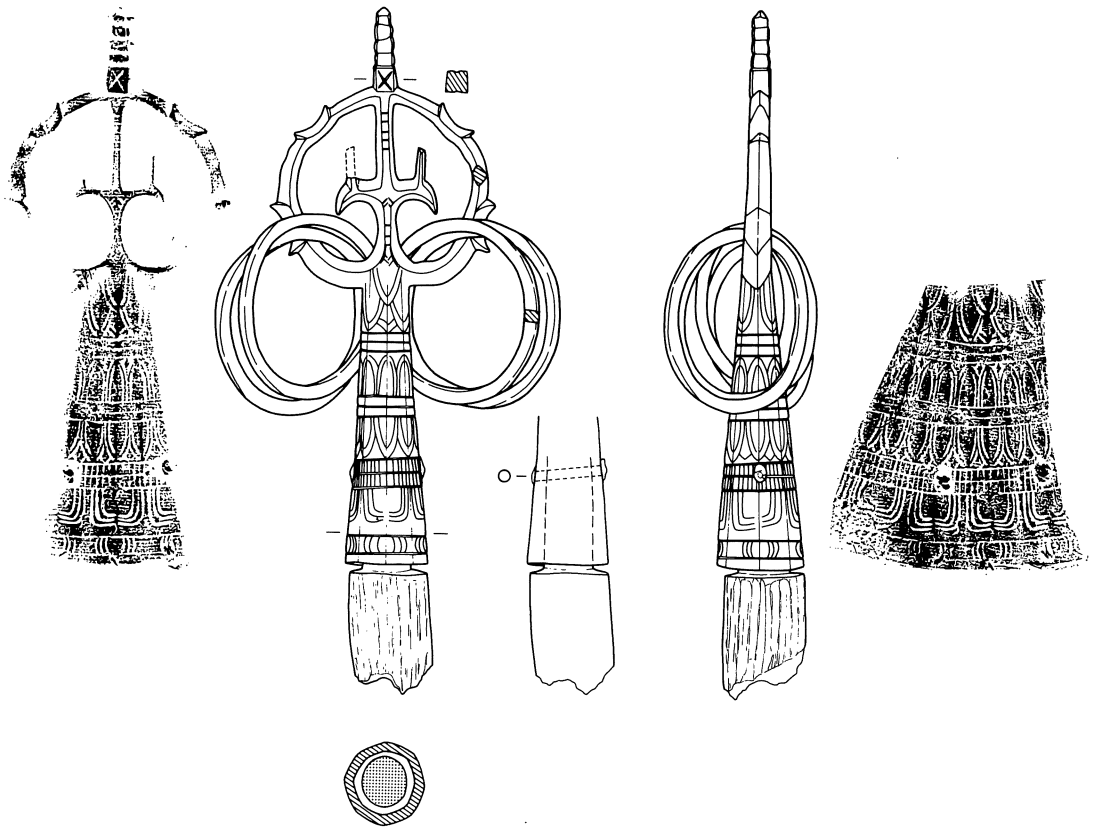


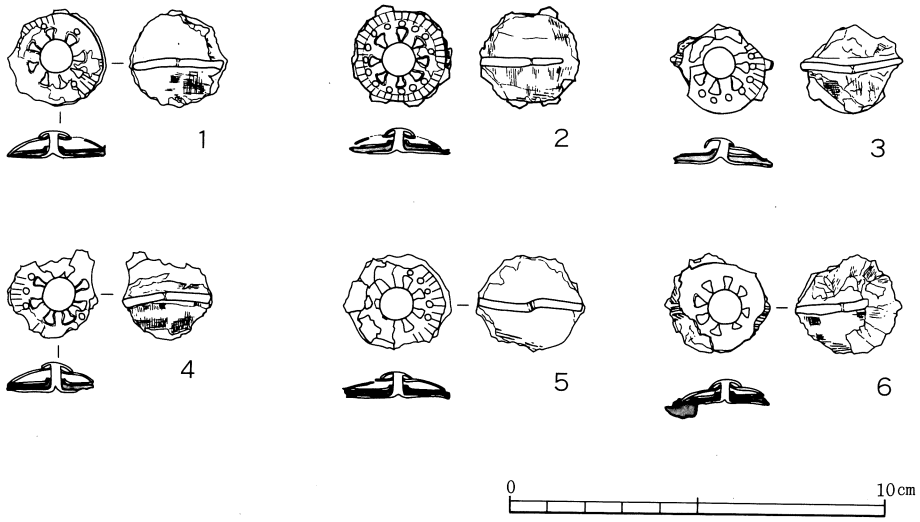
右側面

第29図　墓標２拓影図



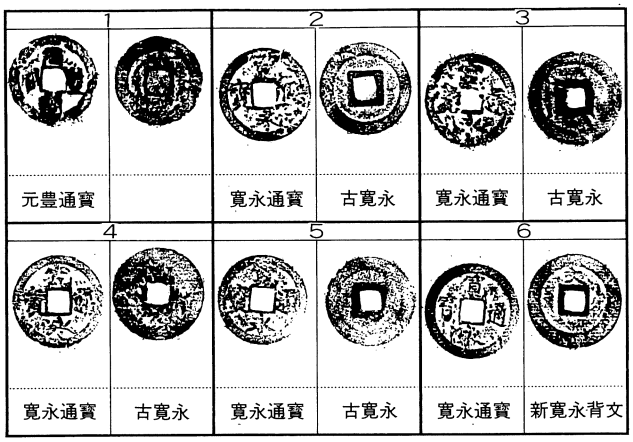
第30図　墓標３拓影図



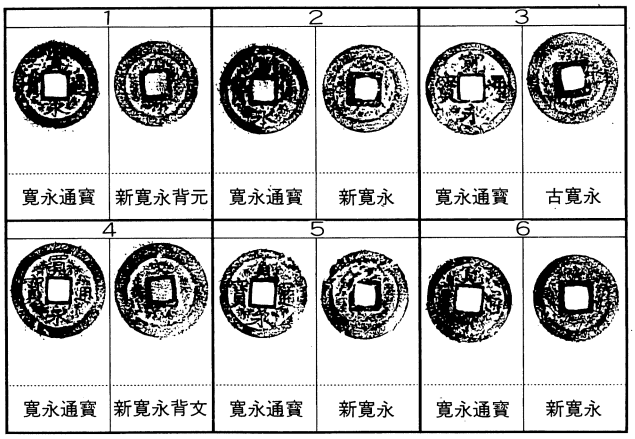


第31図　1号墓出土遺物実測図

1号墓



3号墓



第32図　近世墓出土銅銭拓影

1号墓

No.	銭　名	分　類	初鋳年（西暦）	材質	形状	外径（cm）	内径（cm）	穿径（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
1	元豊通寶	北宋銭	元豊元年（1078）	銅	完形	2.37	1.78	(0.70)	0.14	2.9	刻字が篆書体である
2	寛永通寶	古寛永	寛永3年（1626）	銅	完形	2.47	1.92	0.66	0.16	2.4	
3	寛永通寶	古寛永	寛永3年（1626）	銅	完形	2.47	1.92	0.59	0.16	3.1	
4	寛永通寶	古寛永	寛永3年（1626）	銅	完形	2.44	1.92	0.59	0.18	3.3	
5	寛永通寶	古寛永	寛永3年（1626）	銅	完形	2.38	1.92	0.60	0.14	2.5	
6	寛永通寶	新寛永背文	寛文8年（1668）	銅	完形	2.52	2.04	0.60	0.15	2.2	正字文

3号墓

No.	銭　名	分　類	初鋳年（西暦）	材質	形状	外径（cm）	内径（cm）	穿径（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	
1	寛永通寶	新寛永背元	寛保元年（1741）	銅	完形	2.26	1.75	0.68	0.13	1.7	
2	寛永通寶	新寛永	元禄13年（1700）	銅	完形	2.34	1.90	0.61	0.12	2.2	
3	寛永通寶	古寛永	寛永3年（1626）	銅	完形	2.45	2.00	0.65	0.15	2.8	
4	寛永通寶	新寛永背文	寛文8年（1668）	銅	完形	2.52	2.03	0.67	0.14	3.1	正字文
5	寛永通寶	新寛永	元禄13年（1700）	銅	完形	2.35	1.90	0.75	0.14	2.2	
6	寛永通寶	新寛永	元禄13年（1700）	銅	完形	2.30	1.87	0.68	0.11	2.3	

表3　桐ケ迫遺跡近世墓出土銅銭一覧表

2　峯添遺跡の遺構と遺物

峯添遺跡は桐ケ迫遺跡と同様に四日市台地から西に向って派生する樹枝状の丘陵上に位置する。この調査範囲は長く伸びているため地形によって南北２地区に分け、北からⅠ区、Ⅱ区と設定した。

Ⅰ区

Ⅱ区北西側の丘陵部がこの範囲である。調査は、対象範囲5155㎡のうち旧地形の残る3966㎡について行った。

遺構としては竪穴遺構１、炭窯１、土坑25、ピットなどを確認した。これらは丘陵の上半部に帯状に分布していた。

炭窯は調査区西部に１基残っていたものである。窯は規模が長さ3.66ｍ、幅1.56ｍで確認面からの深さ0.355ｍの長大な形状をもつが、付帯施設は検出されていない。主軸方向は等高線を斜めに横切る方向である。床面はほぼ平坦面をなしている。窯内から土師器、須恵器の破片が数点出土している。炭窯の時期については出土土器を根拠とは必ずしもできるとはいえない。

須恵器については、８世紀前半に比定できる。また周辺からほかの遺物は出土していない。

竪穴遺構は東端部に位置している。出土遺物は覆土上層から下城式土器がまとまってみられた。下層からナイフ形石器や石核などが出土しており、この竪穴遺構について石器の示す時期の遺構として考える必要がある。

土坑は調査区全体に分布しているがピットは東部範囲に偏って分布する傾向がみられた。遺構内からの出土遺物は少なく、黒曜石の剝片、土器の細片が僅かに出土したにすぎない。またピットの分布は不規則であった。

出土遺物（第36図、第39図）

竪穴状遺構の上層から出土した甕（第36図－１・２）は、下城式土器の甕である。１は口唇が僅かに立ち上がる。口縁下に断面三角形の突帯が付く。

２は底部で縦方向のハケ目が施されている。

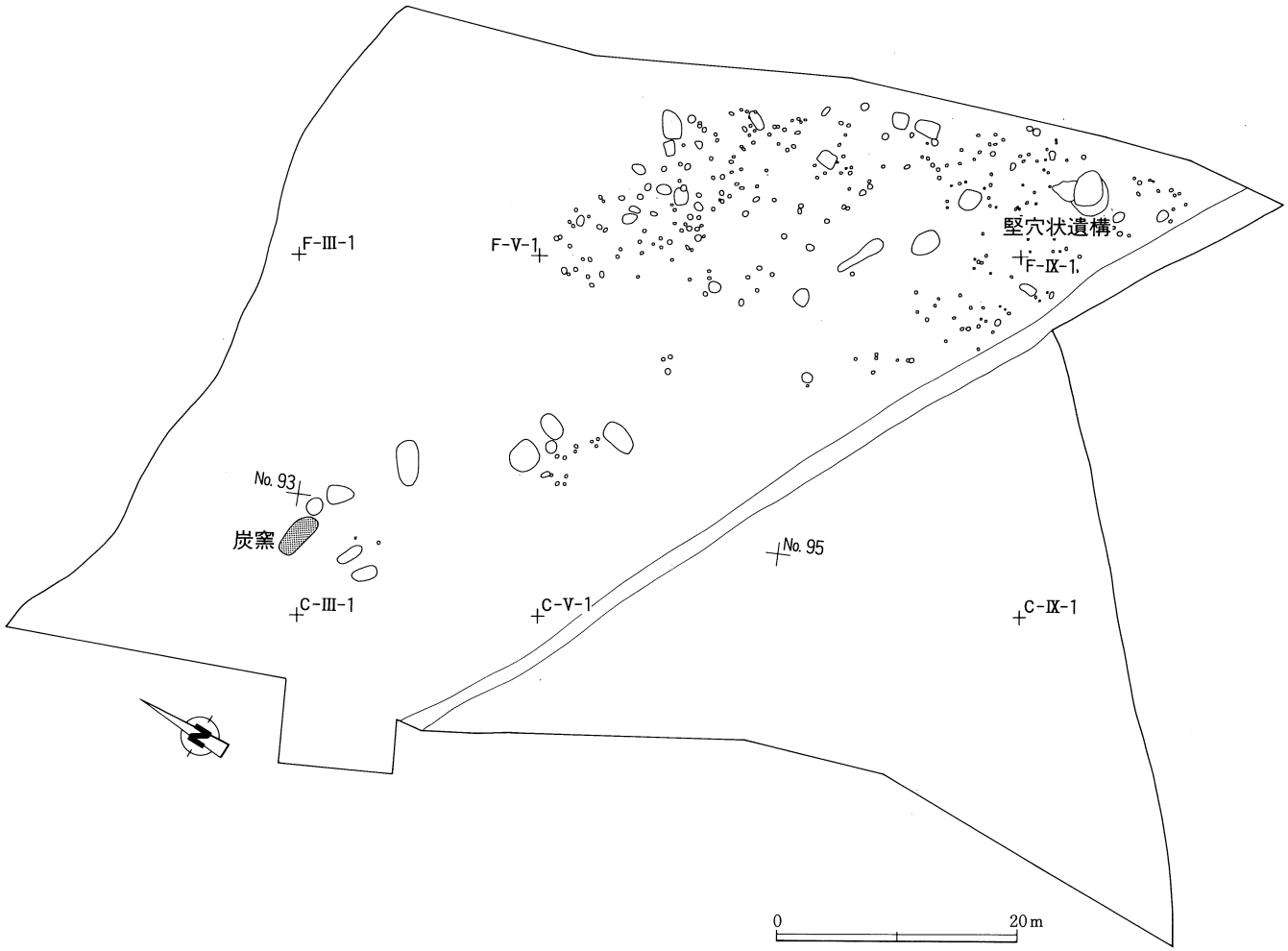
炭窯・周辺から出土した遺物（第39図）として８点を図示した。このうち須恵器６点はすべて蓋である。１は鈕が宝珠の退化した形状を示す。４は器高が高く口縁部の屈曲は弱い。７は天井部から口縁部にかけてＳ字状に屈曲する。８は器高が低い形状である。大きさは口径が復元できる４～８は14.3㎝～16.4㎝である。

土師器（２）は坏で内面にミガキ、外面にナデが施されている。

３は鉄製品の残欠であるが種別は不明である。

時期については、１、４～６が８世紀前半代、７・８は８世紀中葉以降と考えられる。

第33図　峯添遺跡・周辺地形図



第34図　峯添遺跡Ⅰ区遺構分布図

竪穴状遺構と出土遺物（第35図・第37図）

竪穴状遺構（１号住居跡）は旧石器時代後期と弥生時代中期の遺構が重なりあって形造られていた。つまり旧石器時代遺構の真上に弥生時代の円形住居跡が造られていたのである。そのため、当初は弥生時代の円形住居跡として認識して調査を行っていた。その後調査が進行し、弥生時代遺物が見つかるレベルより下位に旧石器時代遺物が含まれていた。そこで、遺構の中央部に設定していた地層観察用の断面を検証したところ弥生時代住居によって切られる状況で旧石器時代遺構が存在していた。地層断面の検証と遺構平面の追求から、遺構は下記に示すような状態であった。

弥生時代の住居跡部分は削平のためか、竪穴の立上り部分が不明瞭であるが、おおむね直径が約33㎝前後の規模を有する（第35図）。弥生時代の住居内にほぼとり込まれる状況で旧石器時代遺構が位置する。その平面形と規模は、東西に長い楕円形で長さ320㎝、短軸長250㎝である。この旧石器時代遺構の床面には４つの柱穴があり、長方形的な配置状況からみて上面に位置する弥生時代遺構に由来する主柱穴の可能性がある。

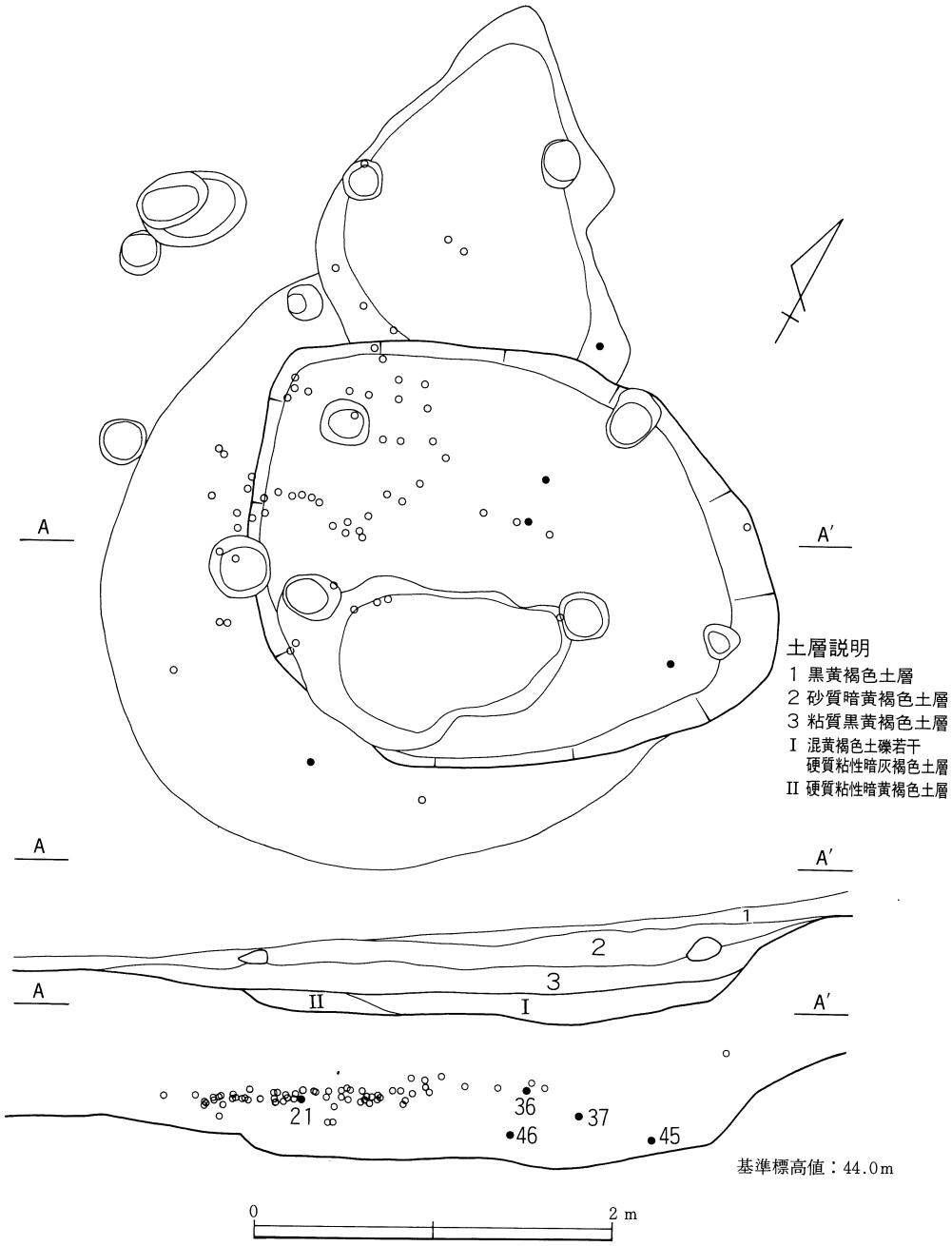
遺構内堆積土は、２層・３層が弥生時代遺構の覆土で、Ⅰ層・Ⅱ層が旧石器時代遺構の覆土である。したがって３層とⅠ層の境界部分は、弥生時代遺構が旧石器時代遺構と切合った部分の床面となる。遺構内堆積土のおおまかな特質は、２層・３層が暗黄褐色～黒黄褐色系の砂質・粘質土なるのに対し、Ⅰ層・Ⅱ層は粘性暗灰褐色～粘性暗黄褐色系の砂質土である。遺構内堆積土のうち２層・３層に弥生時代遺物の存在は限らる。Ⅰ層・Ⅱ層においては弥生時代遺物は全く存在せず、旧石器時代後期の遺物が包含される。なお床面には炭化物が分布していた。

以上、上部の竪穴状遺構と下部の竪穴状遺構について記載してきたが、次に、見つかった石器の特徴と出土状態との関わりに触れてみたい。さて上部遺構は見つかった土器から弥生時代中期に属することはすでに触れているが、石器類も特徴的な例がでている。そのわけは、やじり２点（姫島産黒曜石２点）、やじり未製品・製品32点（姫島産黒曜石32点）、剝片25点（姫島産黒曜石24点、ガラス質安山岩１点）である。こうした石器類は石器の種類と石材から、縄文時代か弥生時代のどちらかに所属することになろう。上部遺構内では明確に縄文時代と推定できる土器はなく、石器類に見合う土器は弥生時代中期の土器だけである。したがって上部遺構に残された石器類は弥生時代中期に属すると考えるのが自然であろう。そこで上部遺構の性格は弥生時代中期のやじり製作場所といえる。

下部遺構から見つかった遺物は９点有る。この中には本来下部遺構に由来する遺物が攪乱や浮き上りを経て上部遺構覆土内で見つかった例を含めている。

ナイフ形石器：形態が水滴形をした１例が見つかっている（第37図１）。整形剝離痕は左側縁の全域と右側縁の下半に若干ある。主要剝離面側に二次的な調整剝離もある。刃部は右側縁の上半であるが、台形様石器といえないくもない例である。石材はメノウ。重さは4.7ｇ。

剝片：横長と縦長の２例が見つかっている（第37図２・４）。重さはそれぞれ2.0ｇ、3.8ｇであ



第35図　Ⅰ区竪穴状遺構実測図

る。石材は金山産のサヌカイトである。

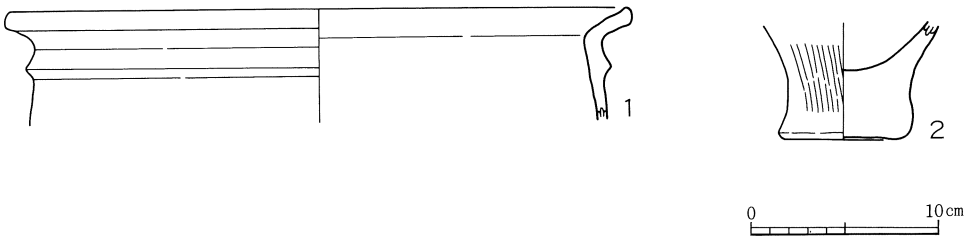
加工痕のある剝片：縦長の不定形剝片が素材である（第37図３）。左側縁より、縁が鋭い右側縁の突出部に若干の加工痕がある。石材は多久産のサヌカイトと思われる。重さは17.3ｇである。

使用痕のある剝片：縦に長い不定形剝片素材である（第37図５）。右側縁とこれに接する表には細かい剝離痕があるが、これは剝片剝離以前に行われた稜作出作業痕であろう。使用痕は縁の鋭い左側縁の裏面側にある。石材は鉄石英。重さは13.6ｇ。

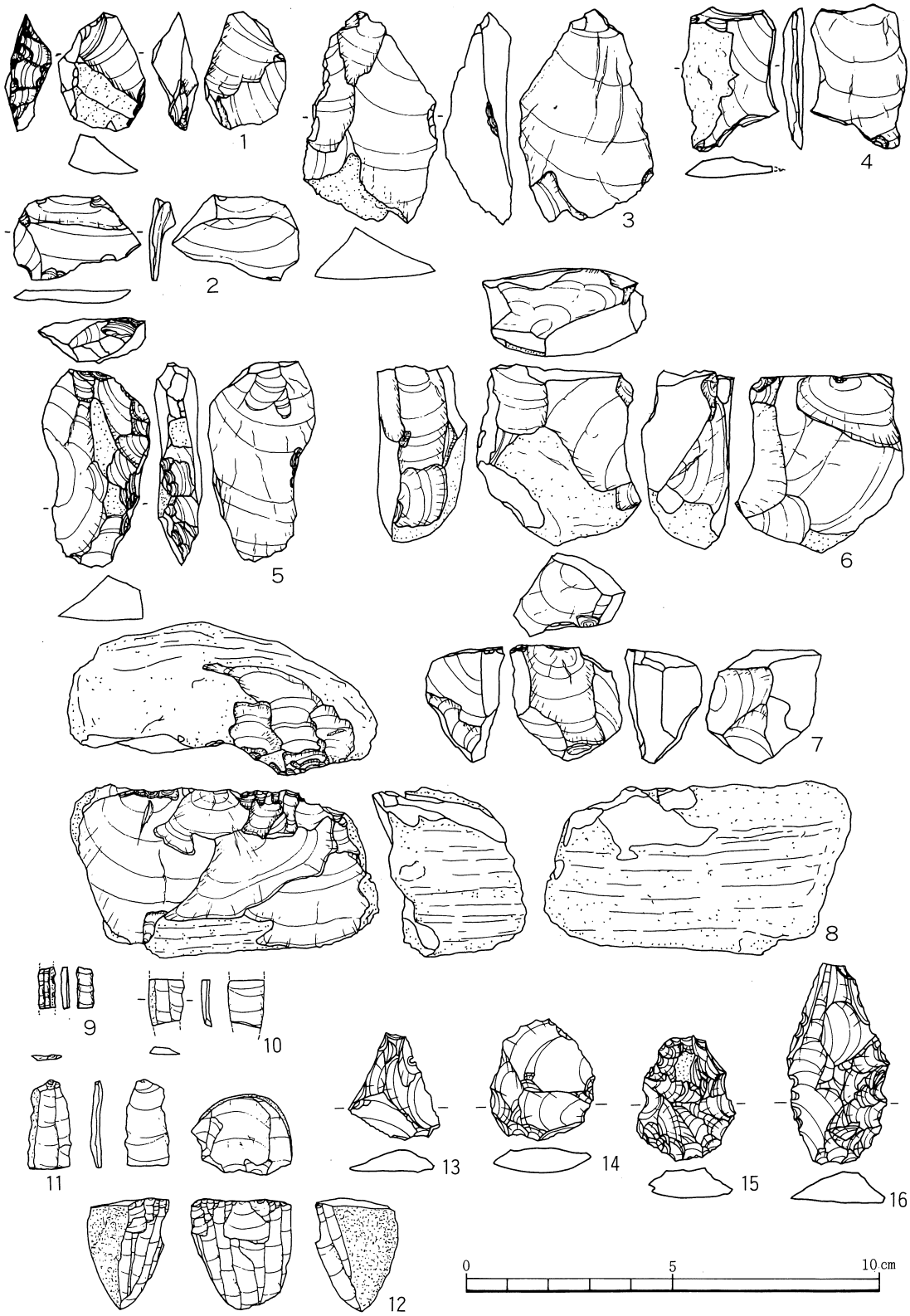
石核：３個ある（第37図６～８）。１例は約２㎝程度の厚さの剝片に打面を作る。ここから小口方向または表裏両面方向から剝片をとる。重さは38.9ｇで、石材は流紋岩に似ているがはっきりしない（第37図６）。もう１例はプリズム形となった残核である。重さは13.1ｇで、石材はアージュライトか石英である（第37図７）。３例目は棒状の角礫を横位に用い、傾斜する自然面を打面として剝離するが、打面に若干の調整を行っている（第37図８）。重さは99.6ｇで、石材は腰岳産黒曜石である。

また近隣の遺跡である桐ケ迫遺跡においても旧石器時代後期の遺物が採集されている。細石刃が３点と、細石刃用石核である（第37図９～12）。石材はいずれも黒色の黒曜石であるが、細石刃用石核を除いては原石産地の推定ができない。細石刃用石核は小円礫の特徴をもった自然面の存在から佐賀県牟田産と推定できる。細石刃用石核は、打面作出作業のほかは石核調整を施さず、細石刃剝離をう。これは野岳・休場型細石核の範疇にある例で、重さは13.2ｇである。細石刃の重さはそれぞれ0.1ｇ、0.2ｇ、0.6ｇである（第37図９～11）。

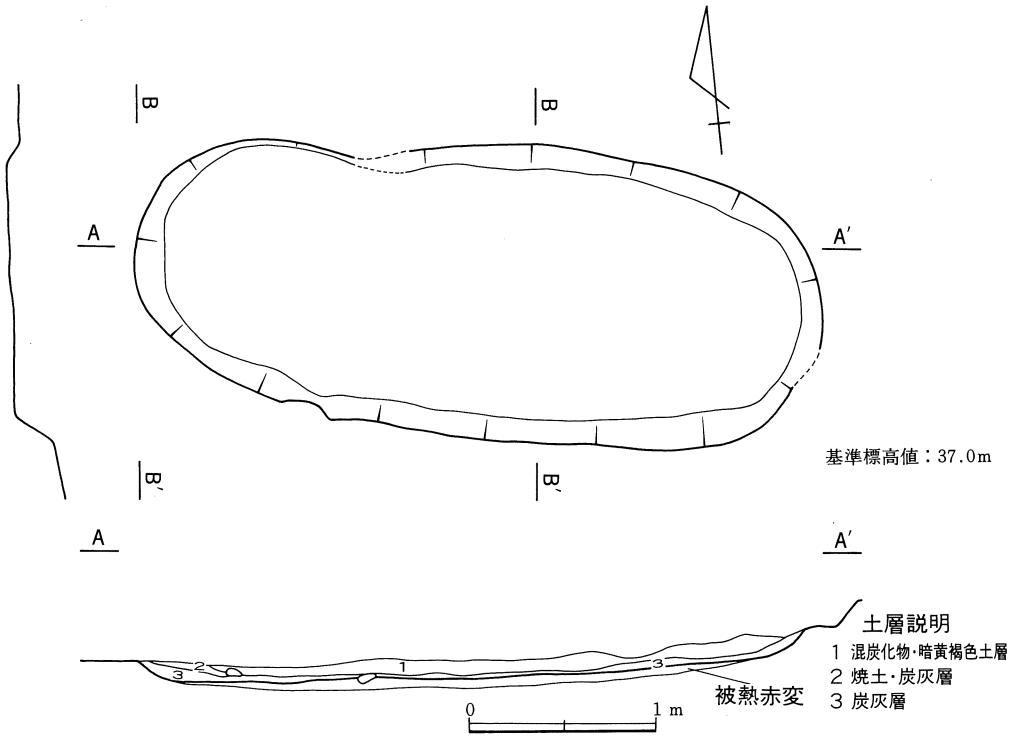
さて竪穴状遺構出土石器の時期について、その特徴からみてみよう。まずはっきりと時期が推定できる遺物はないが、大野川流域で駒方古屋（ＡＴ以前）段階から多用される流紋岩がないことに特徴がある。また見方によってはナイフ形石器を台形様石器とできれば、駒方古屋段階以前に位置づけられる可能性がある。なお遺構は一定のプランと居住できる規模を有していることと、旧石器以外の遺物を含まない点から旧石器時代の住居跡と言ってよいだろう。



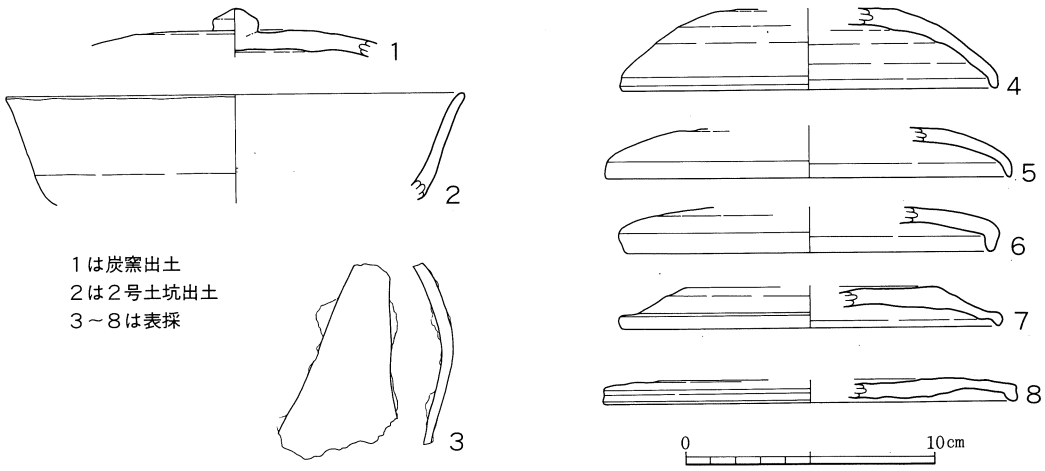
第36図　Ⅰ区竪穴状遺構上層出土遺物実測図



第37図　Ⅰ区竪穴状遺構出土石器・関連資料実測図



第38図　Ⅰ区炭窯実測図



第39図　Ⅰ区炭窯・周辺出土遺物実測図

Ⅱ区

Ⅰ区の南東部に位置する。遺構は丘陵の上半部に大半が分布していた。この範囲において、竪穴住居跡４基、周溝状遺構２、炭窯１、土坑、不整形の落ち込み、ピット、近世墓地などを確認した。このうち竪穴は竈をもち、出土土器からみて６世紀後半に位置付けられる。周溝状遺構は２基あるが、遺物は伴っていない。

竪穴住居跡　今回の調査では竪穴住居跡を南地区の南半部に４基確認した。このうち１基は３壁と竈を欠いておりその構造は不明であるが、他の３基は北壁に竈をもつ。このなかでは１号住居跡が最もよく残っていた。

１号竪穴（第41図）　南北5.0m×東西3.7mの長方形プランをもつ。主軸方向は北15度西を指向する。壁の高さは0.08m～0.2mほど残っていた。しかし北東、南西隅付近は木根によって広く攪乱を受けていた。

竈は北壁のほぼ中央に付設されていたが、確認時にはすでに崩壊しており竈用材としての白色粘質土が袖部に若干残る程度であった。ただ両袖には芯となる角礫が残っていた。火床面は比較的残存状態が良く、支脚の一部が出土している。柱穴は４個で、各隅を結ぶ対角線上にほぼ位置する。

竪穴内の出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は崩壊後の竈上および周辺から壺、甑、甕などが出土している。須恵器は覆土中から坏類が若干出土している。

２号竪穴（第42図）　南北2.82m×東西3.72mの長方形プランをもつ。主軸方向は北97度西を指向する。壁の高さは0.08mほど残っていた。北東隅は土坑が切り合っている。

竈は西壁の南西寄りに付設されていたが、南半部を削平され右袖と火床の右半部の残すのみである。袖には白色粘質土が用いられていた。柱穴は２個で、1.7mの間隔であった。

３号竪穴（第43図）　南北3.9m×東西3.5mの方形プランをもつ。主軸方向は南24度西を指向する。壁の高さは0.12mほど残っていた。

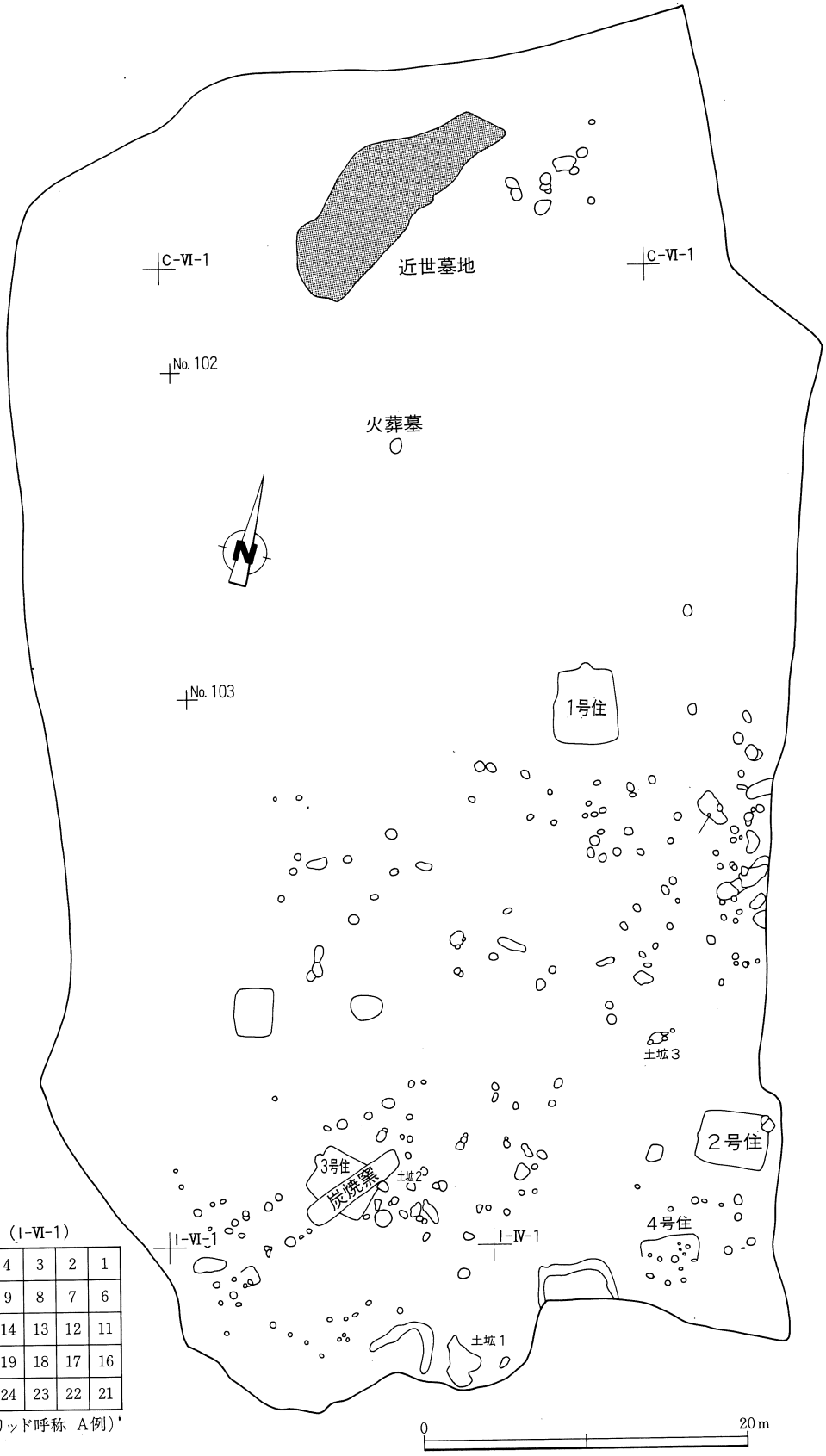
竈は南壁のやや西寄りに付設されていた。南壁を0.4mほど掘り込んで構築されていた。攪乱によって袖を失っていたが、火床内に石製支脚１点が残っていた。
主柱穴は４個であった。

４号竪穴（第44図）　調査区の最も南側に位置する。南半部は後世の掘削によって消失している。東西3.7mの規模をもつ。壁の高さは0.2mほど残っていた。

主柱穴になると思われるピットは残存床面において２個確認されているが、恐らく４本柱と考えられる。

炭窯（第45図）　調査区南東部に位置し、３号竪穴を切って構築されている。全長6.6m、幅1.1m～1.5m，深さ0.2mの規模である。

周溝状遺構　調査区南部に２基検出した。１号周溝は東西５mで南半部は掘削によって消失し

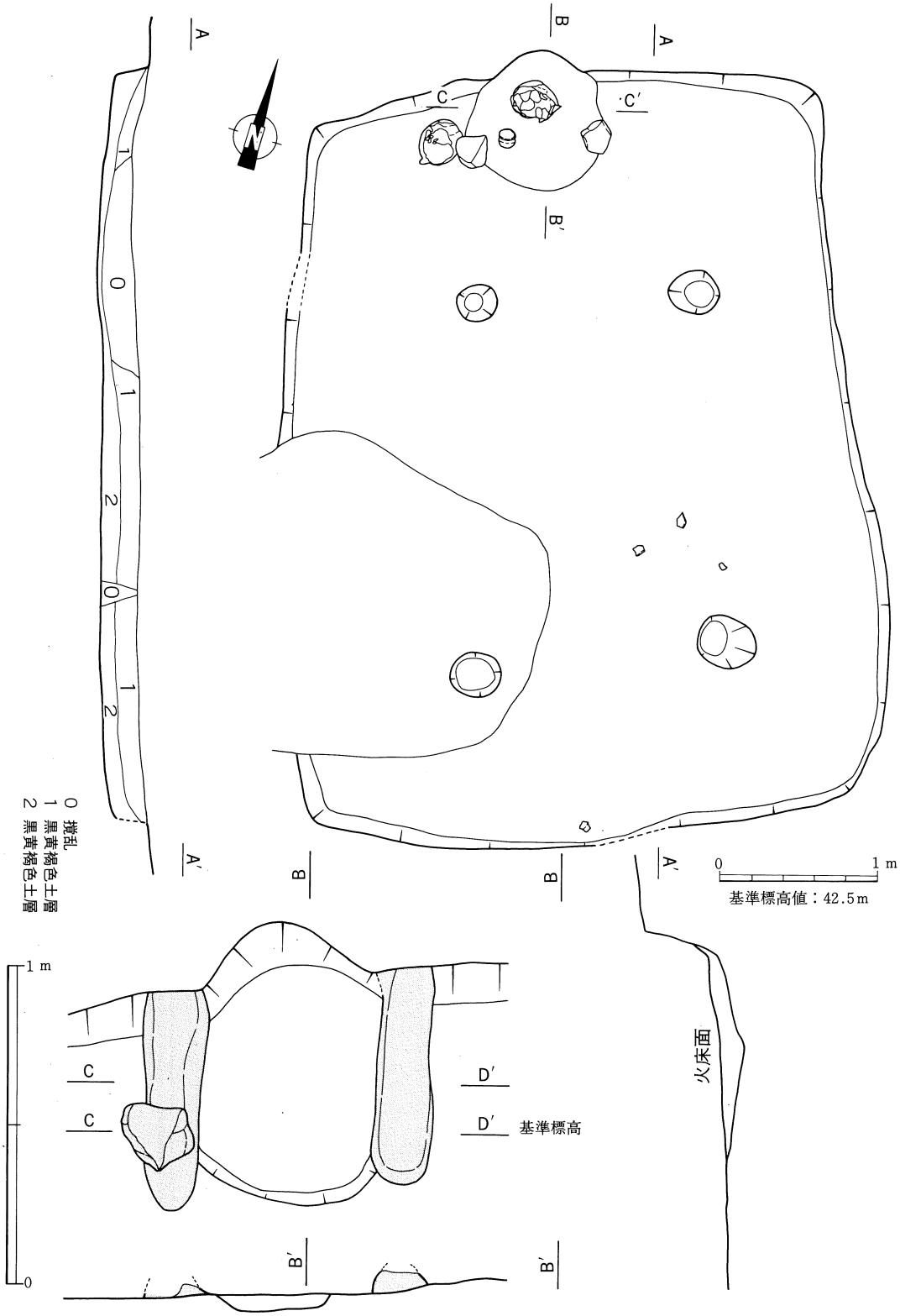


(I-VI-1)

5	4	3	2	1
10	9	8	7	6
15	14	13	12	11
20	19	18	17	16
25	24	23	22	21

(グリッド呼称 A例)

第40図　峯添遺跡Ⅱ区遺構分布図



第41図　Ⅱ区１号竪穴実測図

ている。溝の幅は0.3m～0.6m、深さは0.05m～0.1mである。

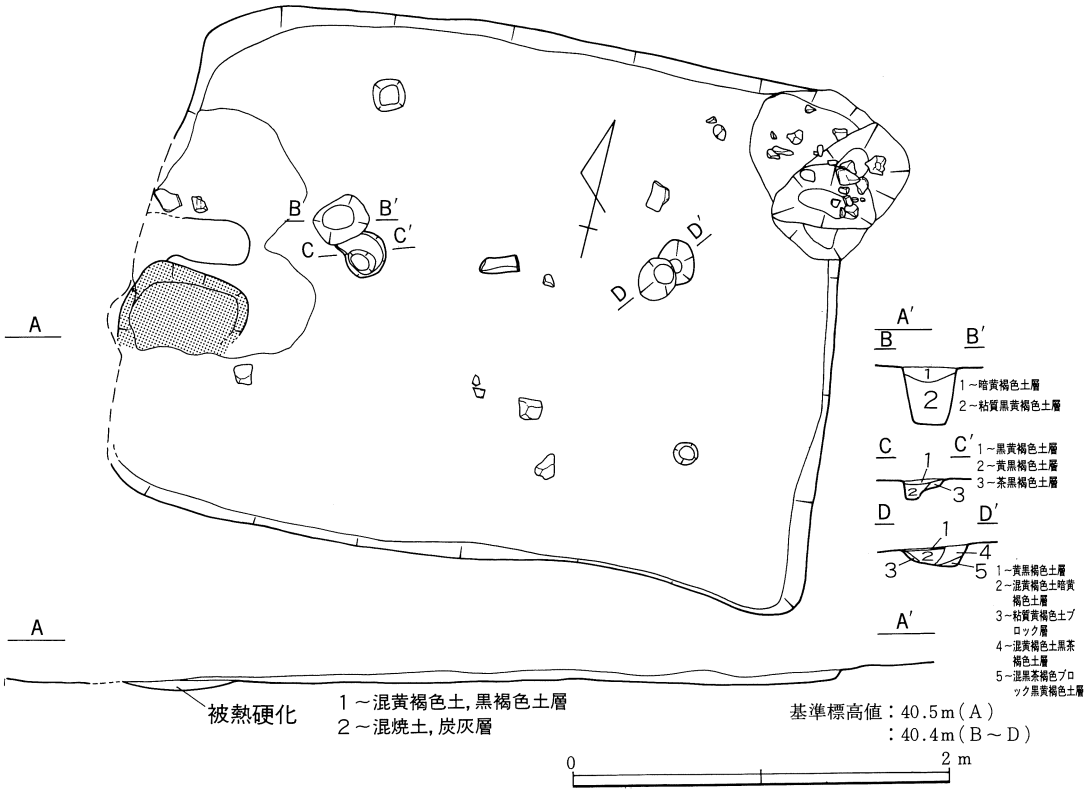
2号周溝は全周せず弧状の形態を呈する。溝の幅は0.4m～0.7m、深さ0.06m～0.1mである。

火葬墓（第47図）　長径0.83m短径0.72mの不整円形を呈し、深さは0.4mである。墓坑内には礫を多く含む炭灰層が堆積していた。骨片はみられないが、火葬墓の可能性が高い。

出土遺物（第48図、第49図）

第48図に掲載した実測図は、1が土坑1、2は土坑3、3・4は2号土坑、5～9は表採である。1は土師器坏である。大きさは口径12.8cm、器高4.1cm。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は不良である。2は甑の胴部上半～口縁部の破片である。口径12.6cmである。3～4は胴部上半～口縁部の破片である。口縁部はくの字に屈曲する。5～9は須恵器である。5は坏蓋で天井部と口縁部の境に沈線が巡る。口径14.4cmである。6は高坏の脚部破片、7は埦で底部を欠失する。8は甕の口縁～頸部破片で外面に櫛描き波状文が施される。9は横瓶の体部破片で外面にカキ目状の調整、端部にヘラ削りが施されている。

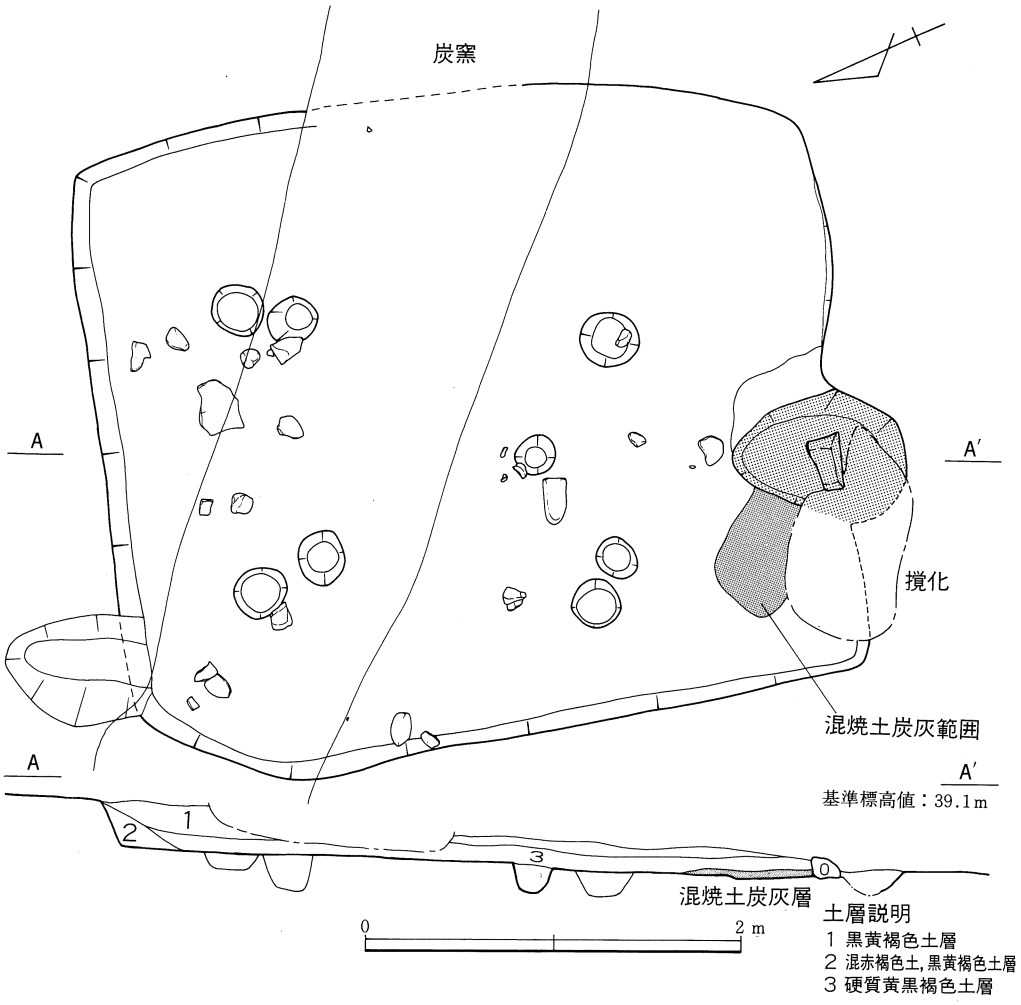
須恵器は胎土に角閃石、斜長石を含み、色調は灰褐色を基調とし、焼成は概ね良好である。出土遺物の時期ついては1号竪穴攪乱範囲出土遺物が8世紀後半代を示すが、ほかは6世紀後半



第42図　Ⅱ区2号竪穴実測図

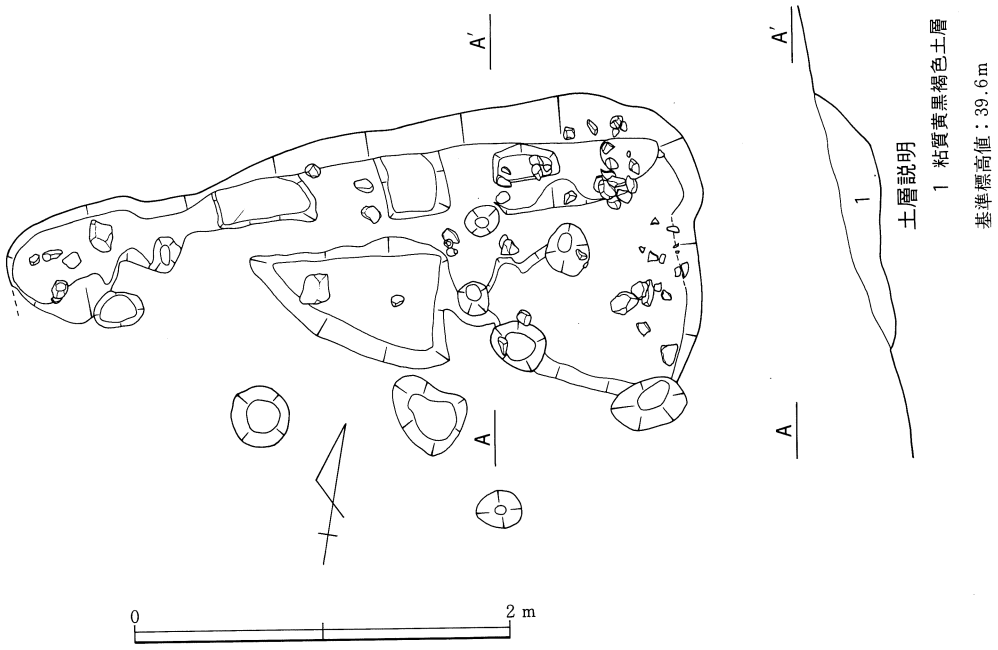
と考えられ、竪穴の時期を示すものと思われる。

1号竪穴から第49図1～8が出土した。このうち1～5は竈周辺から出土したものである。1は須恵器坏蓋の口縁部である。器壁は薄く、天井部へは緩やかな曲線をもって移行するものと思われる。2は須恵器短頸壺で口縁部付近が残っていた。口径11.4cmである。3は土師器の壺で小型品である。大きさは口径10.8cm、器高9.7cmである。口縁部は緩く外反し、体部はあまり張らない。底部は丸底となっている。整形は外面において器面の荒れが著しく不明であるが、内面は底部付近に指頭痕によるナデがみられる。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は橙色を呈し、焼成は通有である。4は土師器甑で器高24.8cm、復元器高31.3cm、穿孔径12.6cmである。胴部は長胴で牛角状の把手をもつ。穿孔部は単孔である。内面に指頭によるナデがみられる。胎土に角閃石を多量に含む。暗褐色を呈し、焼成は通有である。5は土師器の甕で卵形を呈し、緩く外反する口縁部をもつ。器高36.5cm、復元口径14.3cmである。外面にナデ、内面に縦方向のヘラ削りが

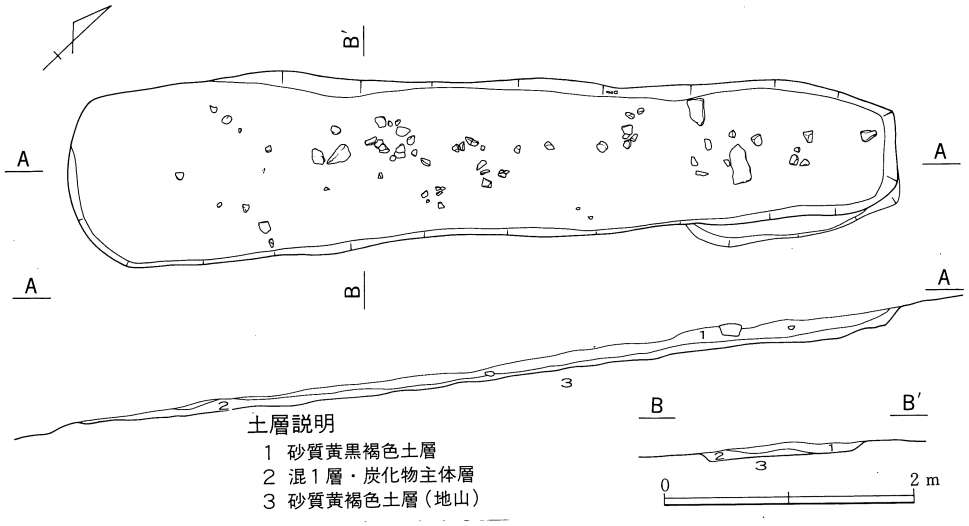


第43図　Ⅱ区3号竪穴実測図

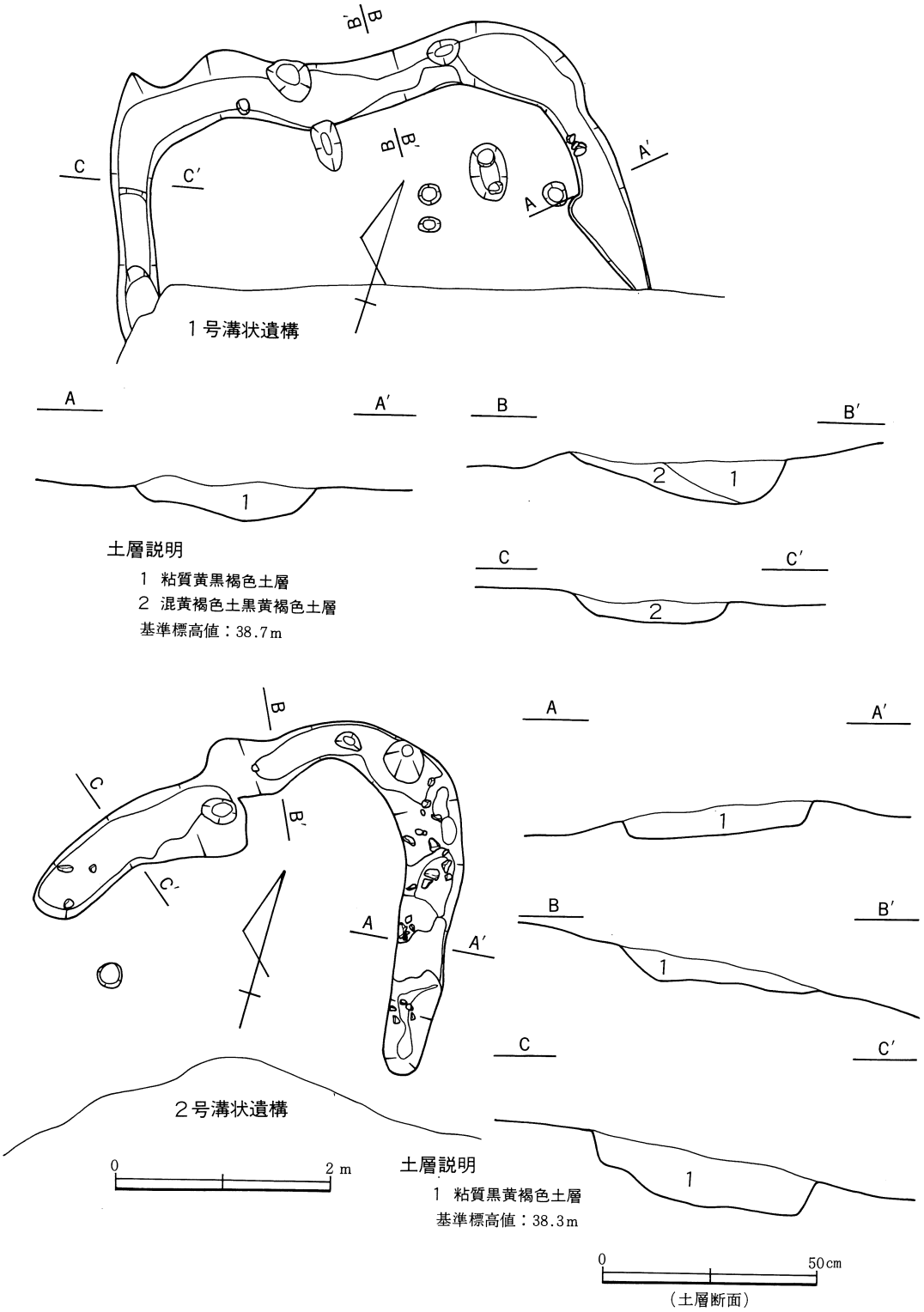
施される。胎土に角閃石を含み、赤褐色を呈し、焼成は通有である。6～8は竪穴の攪乱範囲から出土した。6・7は須恵器蓋で、6は低平な宝珠鈕をもち、口縁端部は明確な屈曲をせずに伸びる。大きさは口径15.8㎝、器高2.2㎝である。7は嘴状に屈曲する口縁部をもつ。8は土師器



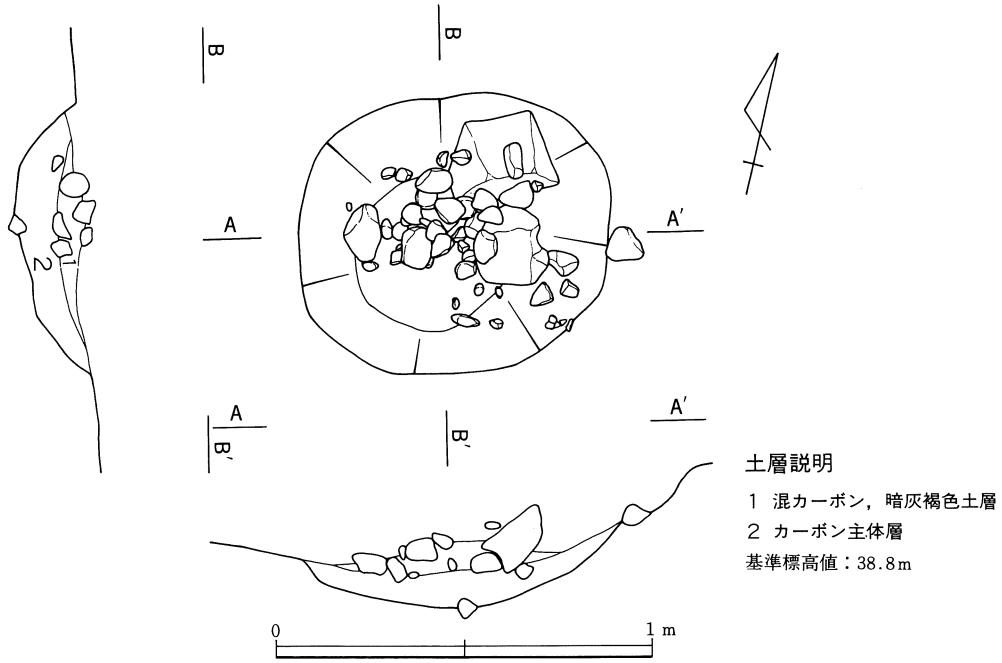
第44図　Ⅱ区4号竪穴実測図



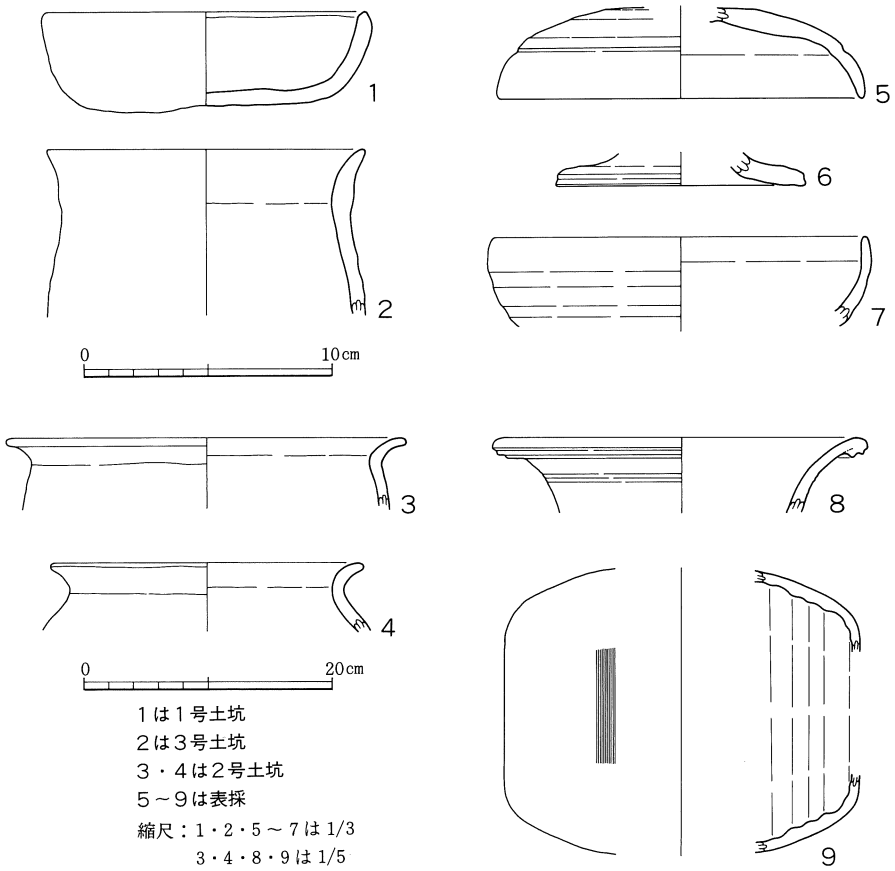
第45図　Ⅱ区炭窯実測図



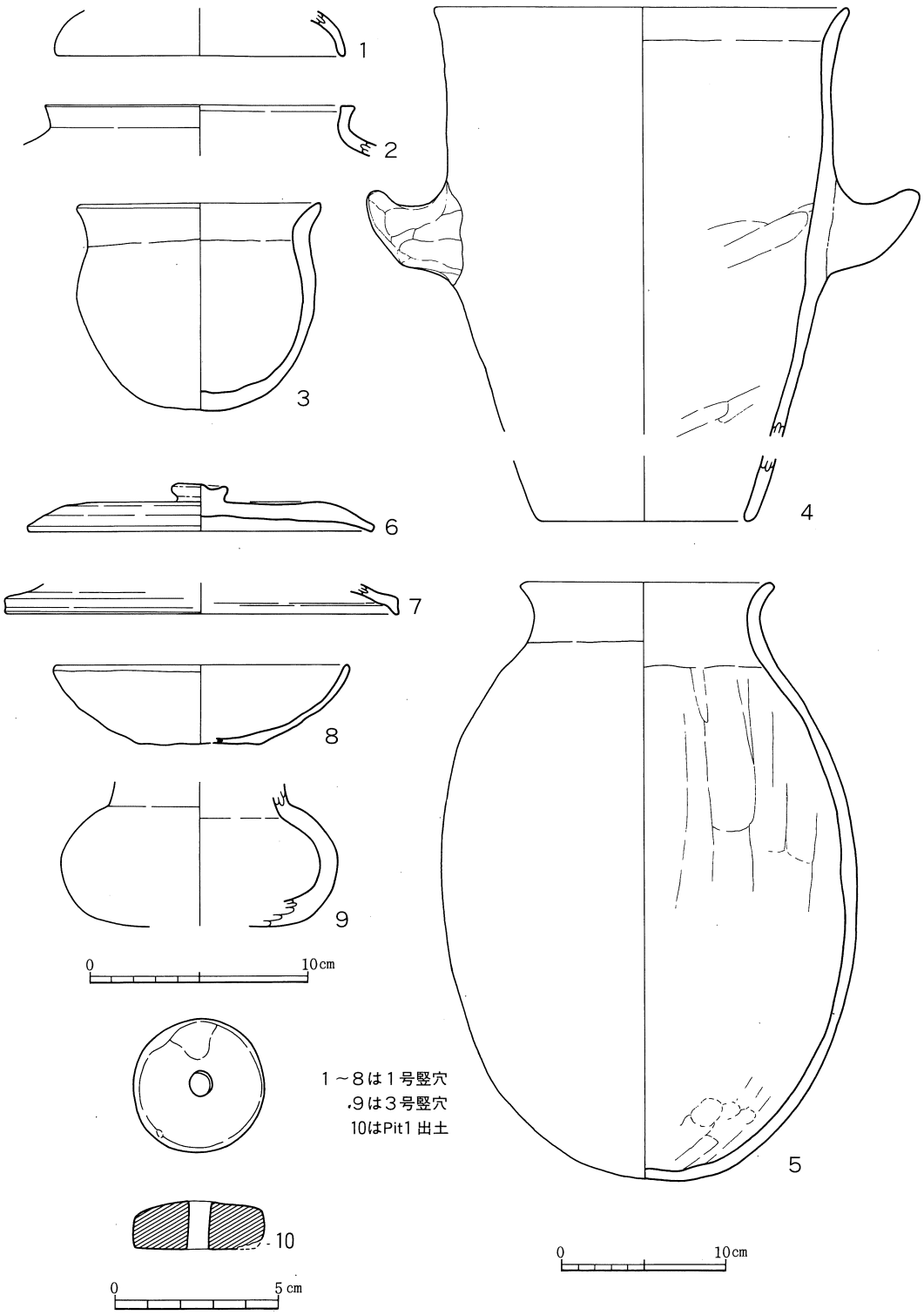
第46図　Ⅱ区溝状遺構実測図



第47図　Ⅱ区火葬墓実測図



第48図　Ⅱ区土抗出土、表採遺物実測図



第49図　Ⅱ区1号、3号竪穴、ピット出土遺物実測図

橙色を呈すが、焼成は不良である。

9は3号竪穴出土の土師器小壺の体部である。10はピット1出土の滑石製の紡錘車で、径4.1㎝、厚さ1.5㎝、孔径0.6㎝の大きさである。

峯添遺跡Ⅱ区近世墓地（第50図～第56図）

四日台地西部において展開する樹枝状の丘陵部には、近世、近代の墓地が形成されている。墓地は丘陵上の造られており、西部の平野を望む位置にある。

峯添遺跡ではⅡ区の北部西向き斜面中腹付近に近世墓地が造られていた。墓地は斜面中腹を掘削した後に、再び埋めて平坦に整形されている。墓地の範囲は15.4m×1.8～3.5mで帯状を呈している。この範囲に上部施設である墓標などが一定の配列をもたずに散在していた。

上部施設　墓標は3基確認できるのみで、残りは何群かみられる礫の集積であった。墓標は墓地の中央部に1、2号が隣接して置かれており、3号はやや離れて南部に位置する。礫の集積は下部施設の分布とほぼ重なる。北部では径0.5m程度の角礫、円礫の配されている箇所がみられる。中央部でも同様にやや大きめの角礫、円礫と小礫が集中している。この下部には墓坑や骨蔵器がみられる。

下部施設　墓坑、骨蔵器など埋葬遺構として確実なものは28基で、ほかに土坑1基を確認している。墓坑には円形と方形の2種類がある。方形の例は8基で、深く掘られた墓坑となっている。円形の墓坑は3基が径、深さ共に0.6m以上の規模をもつ。円形の掘形は骨蔵器を伴う例が6基あり、ほかの9基は径0.6m以下と小規模で骨片が出土している例もあり恐らく火葬墓と考えられる。

遺構の切合い関係　墓坑の構築順序については、切合い状況から次のように確認できた。

29号墓→17号墓、18号墓→27号墓、24号墓→3号墓、25号墓→22号墓のようになる。

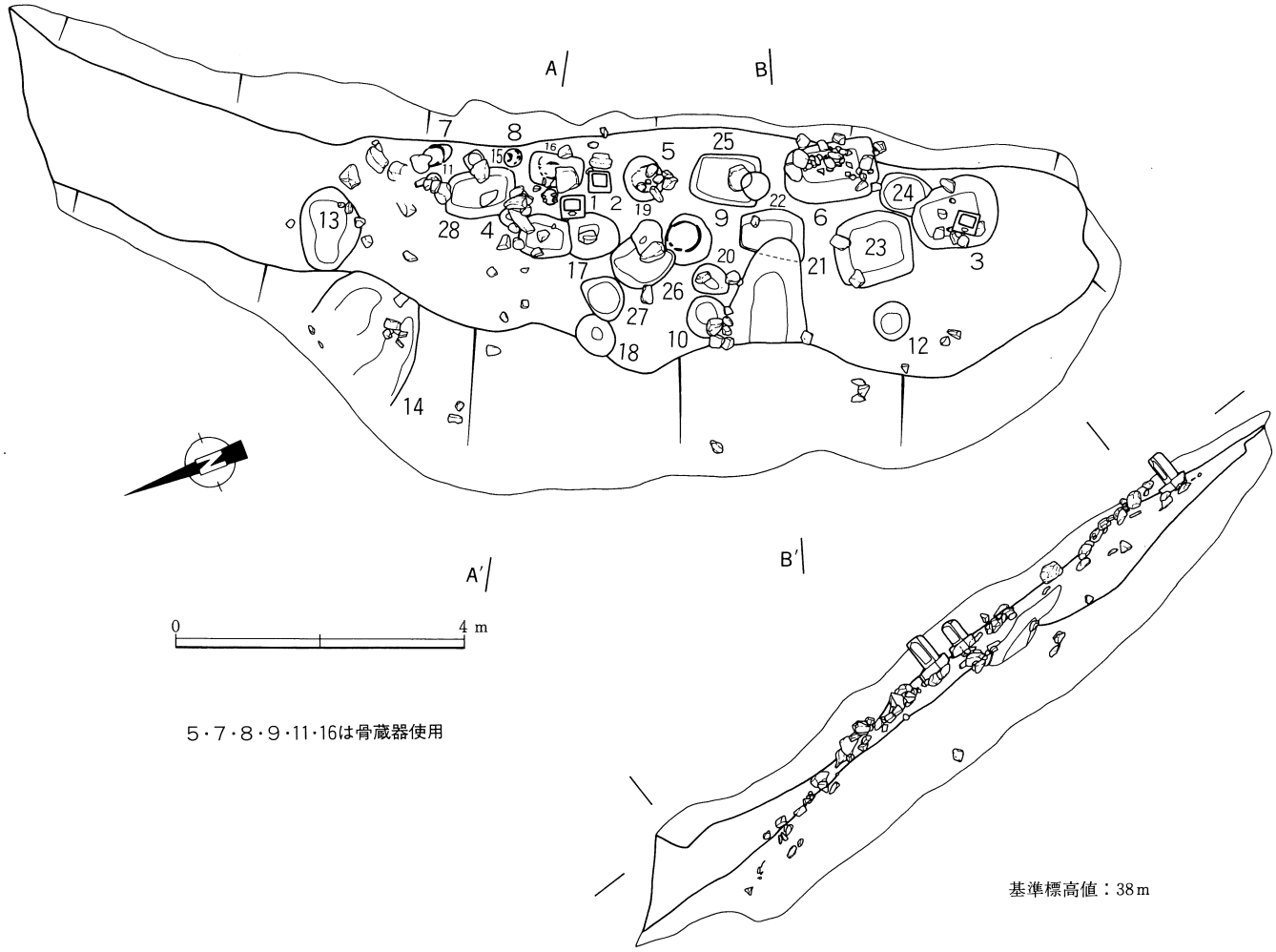
墓標　現存するのは3基で位牌型の形態である。

個別の墓遺構（第52図～第56図）

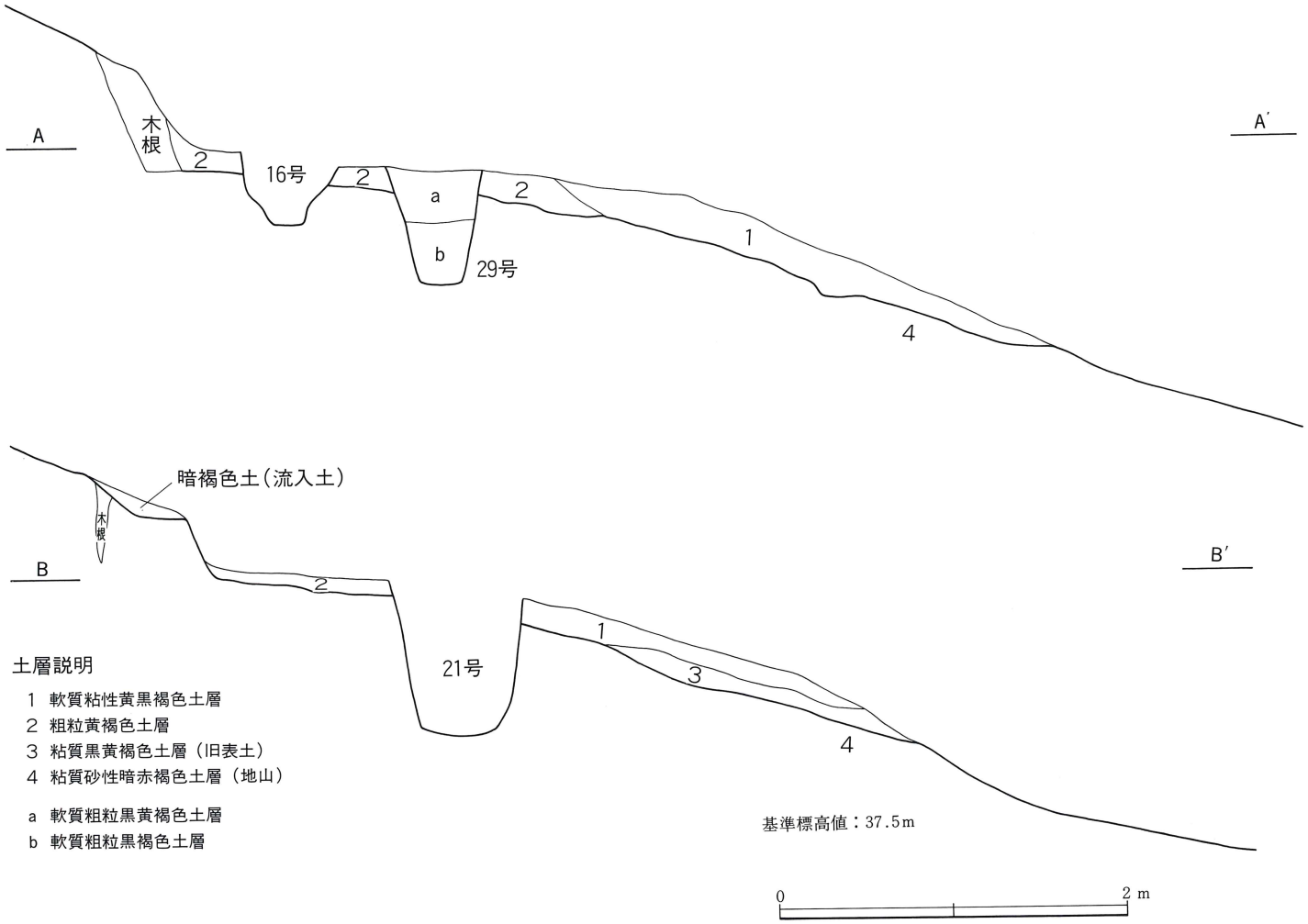
1号墓（第56図）　墓標のみで下部に施設を伴わないが、墓地の形成に伴って移動されたものであろう。墓標は形態は位牌型で、高さ45㎝、幅20.2㎝～23㎝、厚さ14㎝、台座は高さ13.6㎝、横32.5㎝、縦29㎝の大きさである。正面に「釈圓教」、右側面に「寛政二年（1790年）」、左側面に「戌四月六日」の銘が刻まれている。

2号墓（第56図）　1号墓と同様に下部に施設を伴わない。墓標は高さ34㎝、幅18㎝～20㎝、厚さ17㎝、台座は高さ16.5㎝、横31.6㎝、縦31.4㎝の大きさである。正面に「釈妙（甫）」、右側面に「宝暦四年（1754年）」、左側面に「二月十日」の銘をもつ。

3号墓（第53図、第56図）　墓標は高さ42.5㎝、幅19㎝～22㎝、厚さ15.5㎝、台座は高さ13㎝、横32㎝、縦30㎝である。正面に「釈妙保」、右側面に「寛政十牛年（1798年）」、左側面に「十一月サ六日」の銘をもつ。墓坑上部に礫が若干散乱する。下部の墓坑は上縁が1.2m×1mの偏楕円形を呈し、深さ1.1mでほぼ垂直に掘られており、底面は0.8m×0.6mの長方形である。出土



第50図　Ⅱ区近世墓地全体図



第51図　Ⅱ区近世墓地整地範囲土層断面図

遺物として、鉄釘８点が底面の縁辺部から検出されている。

１、２、３号墓の背面にはともに銘文がなく整形痕が残っている。

４号墓（第52図）　墓坑の上に石が数個置かれていた。墓坑は径0.35ｍの円形を呈し、深さ0.2ｍである。骨蔵器は検出されていない。

５号墓（第52図）　火葬墓である。掘形の上に礫が10個ほど集積されており標識的な意味合い考えられる。掘形は長径0.6ｍ×短径0.57ｍの円形で、深さ0.13ｍの規模をもつ。このなかにコネ鉢利用の骨蔵器である。骨片が若干出土している。

６号墓（第52図）　墓坑上部に礫が集積していた。墓坑は上縁が1.3ｍ×0.85ｍの不整方形を呈し、深さ1.1ｍで、底面は0.83ｍ×0.43ｍの長方形である。

７号墓（第52図）　火葬墓である。掘形周辺に若干の礫が置かれていた。掘形の上部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は長径0.5ｍ×短径0.27ｍの楕円形で、深さ0.15ｍの規模をもつ。このなかに甕利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。

８号墓（第52図）　火葬墓である。掘形の上部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は長径0.3ｍ×短径0.27ｍの楕円形を呈し、深さ0.15ｍで骨蔵器の大きさほぼ同じ規模となっている。このなかに甕利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。

９号墓（第52図）　火葬墓である。掘形の上半部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は長径0.72ｍ×短径0.65ｍの円形を呈し、深さ0.1ｍである。このなかにコネ鉢利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。

10号墓（第53図）　周辺に礫が集中していた。墓坑は0.6ｍ×0.55ｍの円形を呈し、深さ0.3ｍである。規模は小さいが、骨蔵器は検出されていない。20号墓と隣接する。

11号墓（第52図）　火葬墓である。周辺に礫が若干みられた。掘形の上半部が削られており骨蔵器は露呈していた。掘形は径0.3ｍの円形を呈し、深さ0.12ｍで骨蔵器の大きさとほぼ同じ規模となっている。このなかに甕利用の骨蔵器が納められていた。骨片が若干出土している。７号墓と隣接する。

12号墓（第54図）　墓坑は長径0.54ｍ×短径0.5ｍの円形を呈し、深さ0.36ｍである。規模は小さいが、骨蔵器は検出されていない。

13号墓（第55図）　墓坑は1.17ｍ×0.87ｍの偏楕円形を呈し、深さ0.2ｍである。平面規模に比較して残存壁高が低く、骨蔵器も検出されていない。

14号墓（第55図）　墓とする明確な根拠はない。墓地整地範囲の西縁辺から斜面にかけて位置する不整形の落ち込みである。残存する規模は、16ｍ×1.4ｍで、底面は斜面下に向かって傾斜する。堆積土は１層軟質暗褐色土層、２層粘質暗黄褐色土層、３層粘質粗粒黄褐色土層となっており自然の堆積状態を示している。

15号墓（第52図）　墓坑は0.34ｍ×0.31ｍの円形を呈し、深さ0.07ｍである。骨蔵器は検出さ

れていないが、歯を含む骨片が出土している。

16号墓（第52図）　掘形の上に、長さ0.12m～0.32mの石が5個配されていた。また至近地に1号、2号の墓標が置かれている。墓の形態は火葬墓であるが、先行する墓と重複している可能性がある。掘形は0.75m×0.45m、深さ0.4mの規模で長方形を呈する。掘形内のやや短辺寄りに骨蔵器を埋置した径約0.3m、深さ0.13mの円形掘形が造られている。骨蔵器は下半部を円形掘形内に、上半部を長方形掘形内に置いた状態となっている。骨蔵器は甕を利用している。

17号墓（第55図）　29号墓を切って造られている。墓坑は長さ約0.8m×0.65m不整円形を呈する。深さ0.65mで、底面は0.4m×0.34mの方形である。

18号墓（第53図）　27号墓に若干切られた状態で検出された。径0.5m～0.62m、深さ0.3mの規模をもつ円形土坑である。骨蔵器は検出されていない。

19号墓（第53図）　正確な規模は不明であるが、残存部分から推定すると、長径0.6m×短径0.45mほどの楕円形を呈すものと思われる。深さは0.3mと浅い。骨蔵器は検出されていない。

20号墓（第53図）　10号墓に隣接して造られている。長径0.6m×短径0.4mの楕円形を呈し、深さ0.2mである。土坑内から骨片が出土している。

21号墓（第54図）　墓坑は0.9m×0.65mの不整方形を呈し、深さ0.88mでほぼ垂直に掘られている。底面は0.7m×0.45mの不整方形である。

22号墓（第54図）　25号墓を切って造られている。土坑は長径（0.6）m×短径0.5mの楕円形を呈し、深さ0.55mである。

23号墓（第53図）　3号墓、24号墓に隣接して造られている。墓坑の上に礫2個がみられた。墓坑は1.1m×1mの不整方形を呈し、深さ1.05mで底面は0.72m×0.64mの不整方形である。出土遺物として、鉄釘12点と鉄製金具1点が底面の縁辺部から検出されている。

24号墓（第54図）　3号墓に切られている。土坑は長径0.7m×短径0.55mの楕円形を呈し、深さは0.55mである。

25号墓（第54図）　22号墓に切られている。土坑上部に大きめの礫が1個置かれてた。土坑は0.94m×0.7mの長方形を呈し、深さ1.06mで底面は0.78m×0.58mの長方形である。

26号墓（第53図）　土坑は楕円形を呈し、規模は長径0.88m、深さ0.11m程度である。

27号墓（第53図）　18号墓を切って造られている。長径0.62m×短径0.54mの不整円形を呈する。深さ0.16mと浅いが、骨蔵器は検出されていない。

28号墓（第54図）　墓坑は1m×0.65mの長方形を呈し、深さ0.6mで底面は0.73m×0.43mの長方形である。

29号墓（第55図）　17号墓に切られている。墓坑は0.75m×0.64mの長方形を呈し、深さ0.72mで、底面は0.52m×0.36mの台形状となっている。

骨蔵器（第57図）

1は5号墓、2は9号墓、3は16号墓、4は8号墓、5は7号墓、6は11号墓の骨蔵器に用いられたものである。

1はコネ鉢のほぼ完形品である。低く丸い体部をもち、口縁部は外反する。高台は丸みをもち貼付けられている。大きさは口径35.2㎝、器高1.07㎝、高台径15.7㎝である。調整は、口縁部が横ナデ、体部上半は回転方向の削り、体部下半～底部はナデ。内面は体部の上部にヘラミガキが施される。

2はコネ鉢でほぼ完形品である。低く丸味を帯びた体部をもち、口縁部は短く外反する。体部の中程に刻み突帯を巡らす。突帯は断面台形を呈する。高台は断面が三角形に近い形状である。底部には幅1.4㎝の低い突帯が巡る。大きさは口径43㎝、器高12.2㎝、高台径18.2㎝である。調整は、口縁部外面が横ナデ、体部～底部には回転方向の削りが施されている。内面は横方向のヘラミガキがみられる。

3は甕のほぼ完形品である。胴部が口縁部に向かって緩く狭まる。口縁部は台形状に肥厚し、上端で平坦面をなす。底部はやや上底状で縁辺において接地する。底径が大きく安定感のある形態である。調整は外面に斜方向の削り後、ナデが施され、内面では上部に指押え、下半部にナデがみられる。胴部内面には横方向の板ナデ痕も認められる。大きさは口径17.5㎝、器高26㎝、底径21㎝である。

4は甕のほぼ完形品である。胴部が緩く立ち上がる。口縁部は台形状に肥厚し、上端はやや凹面をなす。底部は上底状となっており縁辺部で接地する。胴上部に突帯は巡る。調整は口縁部にナデが施され、胴部上半に横方向の削り、下半部には縦方向の削り後横方向の削りがみられる。底部はナデで、縁辺に削り後のナデ調整がなされている。胴下半部には板状工具による縦方向のナデ調整が行われている。大きさは口径18.7㎝、底径14.4㎝である。

5は甕で胴部上半と下半は同一個体と考えられる。胴部は直線的に立上がり、頸部に緩い曲線をもって移行する。肩部に刻み突帯が巡る。口縁部は台形状に肥厚し、上端は平坦面をなす。底部はやや上底状で縁辺において接地する。調整は口縁部にナデ、肩部に斜方向の削り後ナデ、胴部下半には縦方向の削り後横方向の削りがみられる。底部は、縁辺に削りがなされている。内面には削り後ナデ調整が行われている。下端に指押さえによる整形がみられる。大きさは口径24㎝、器高26.7㎝、底径19.2㎝である。

6は甕のほぼ完形品である。胴部は球状に近い形態で立上がり肩部に刻み突帯が巡る。頸部は直線的に伸び、口縁部は台形状に肥厚し、上端は平坦面をなす。底部はやや上底状で縁辺において接地する。調整は口縁部にナデ、胴部削り後ナデがみられる。内面には削り・ナデが施される。大きさは口径15.5㎝、器高24.8㎝、底径16.6㎝である。

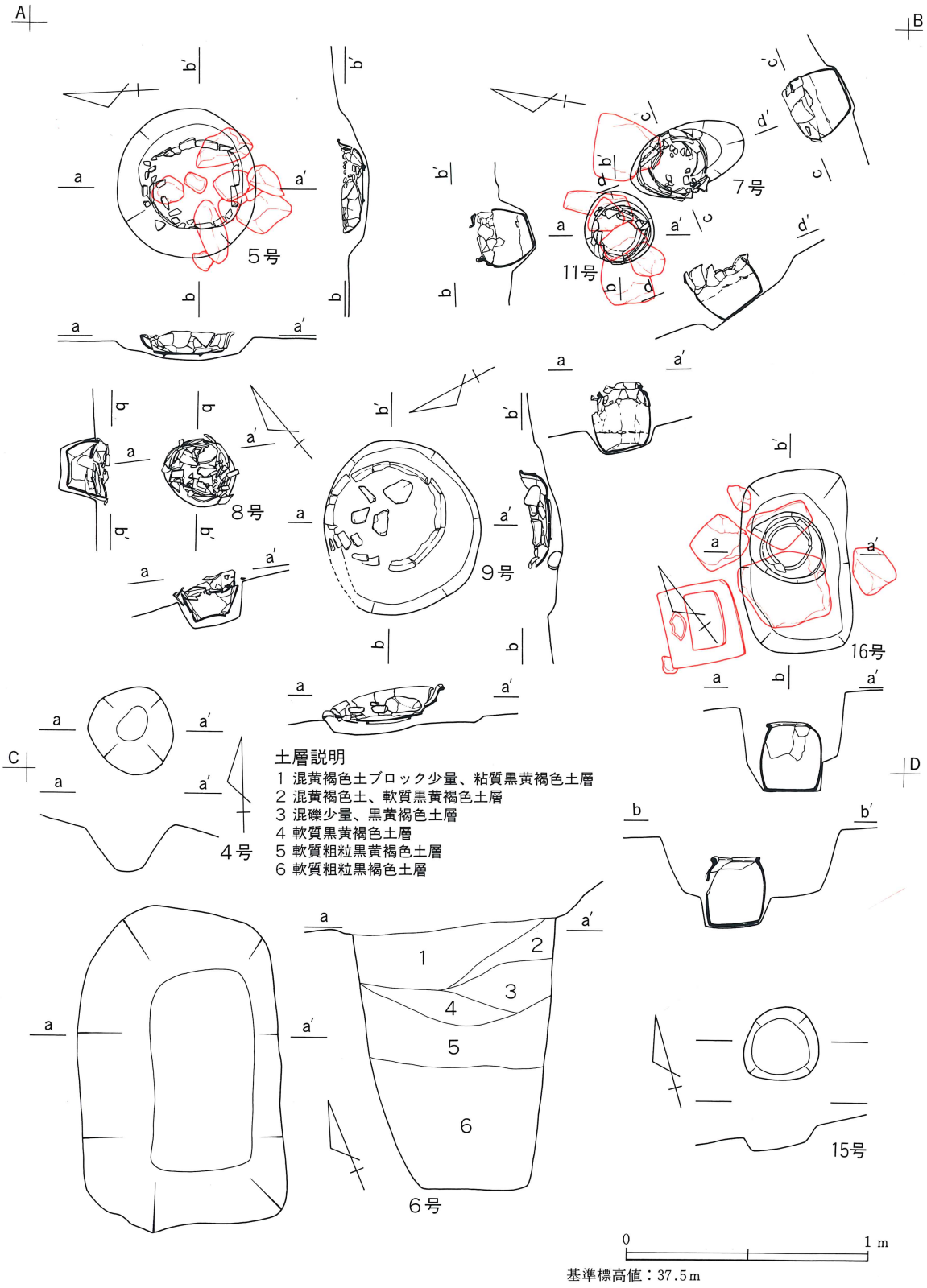
1～6は胎土に角閃石・斜長石・白色砂粒を含む。焼成はほぼ良好で、黄褐色～橙色を呈する。

出土遺物（第58図）

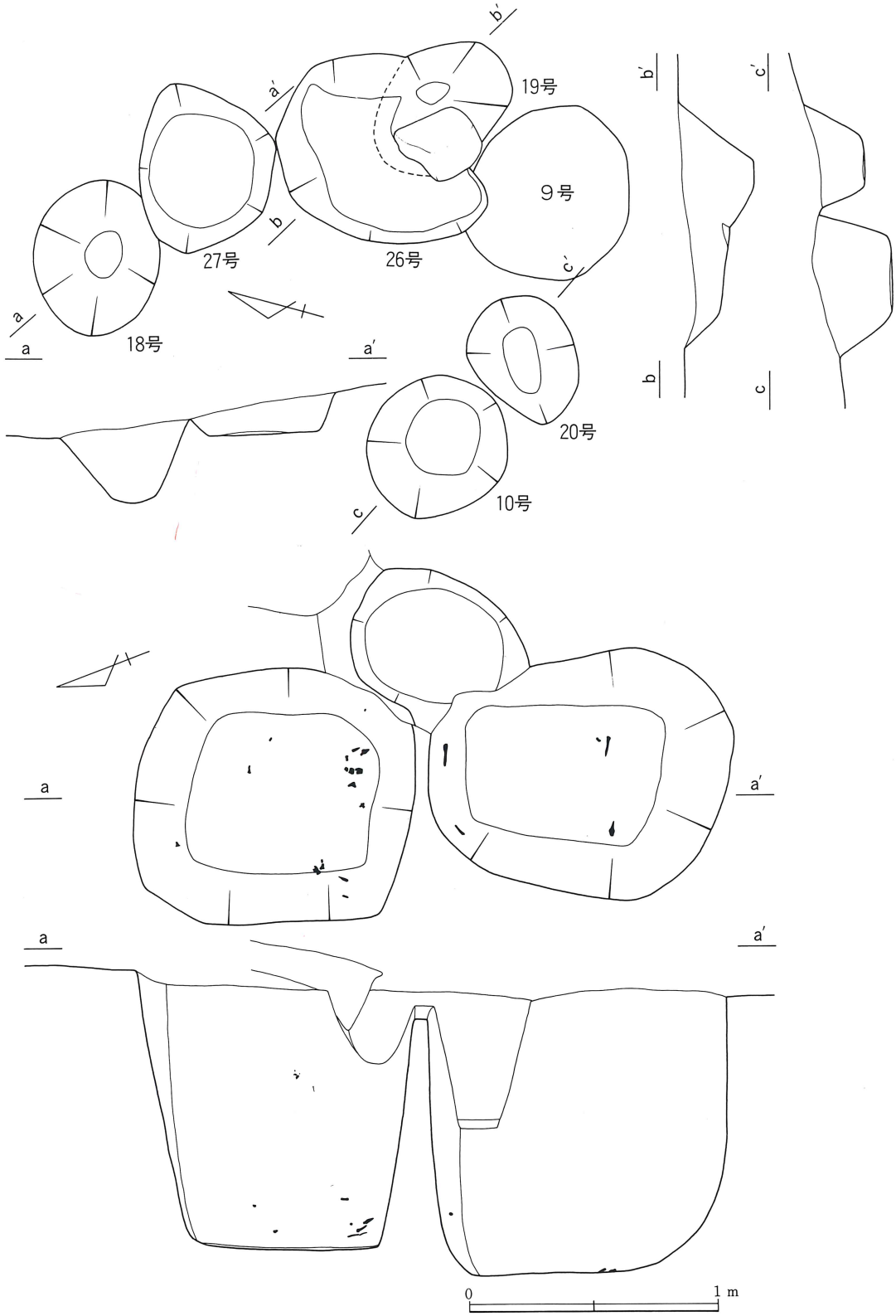
3号墓から鉄釘（1～8）、23号墓鉄釘（9～21）と金具（22）が出土した。このほか人骨が5・7・8・9・11・15・16・20号墓から出土している。20号墓以外はすべて骨蔵器に納められていたものである。なお人骨の分析については、5・7・8・11・15・16号墓の6例を対象として実施した。その結果は、本報告第5章2に掲載している。

鉄釘1～5は完存しないが長さ8㎝以上と想定され、厚さは頭部下で0.7㎝～0.8㎝、方形断面をもつ大型品である。釘頭部は方形に造られている。6～21は長さ3㎝～4㎝、厚さは頭部下において0.4㎝～0.5㎝で方形の断面形を呈し、先細りに造られている。このうち9、14、16、17、19、20の6点は完存する。また11、16、18、19、20には木質が残っている。頭部の形状は6・9は円形、8、11、13、14は楕円形、16は方形を呈す。22は板状の素材の一端を折り曲げたものであるが用途は不明である。

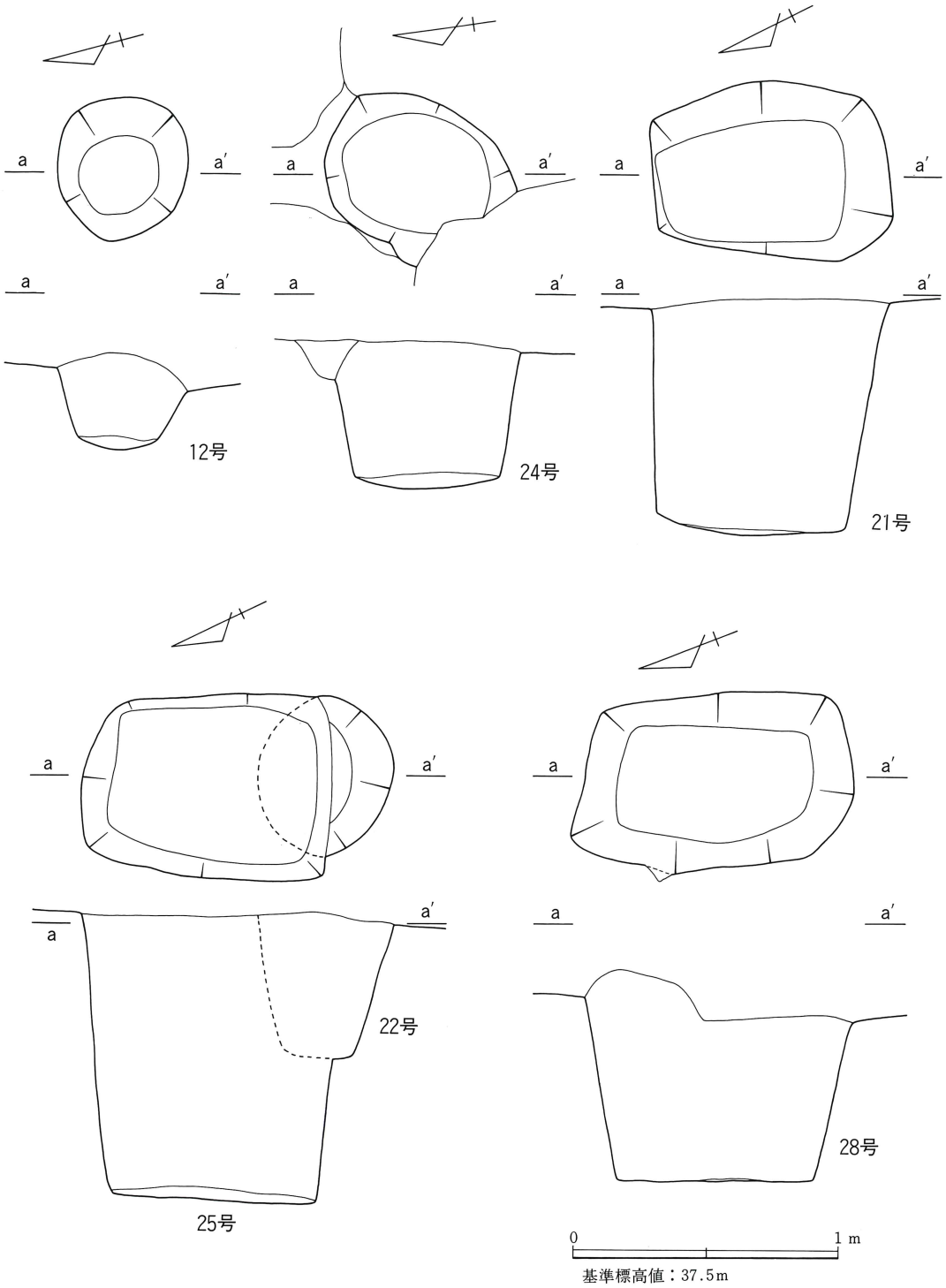
23は陶胎染付碗である。外面に唐草文が描かれている。大きさは口径10.3㎝、器高7.4㎝，畳付は露胎である。



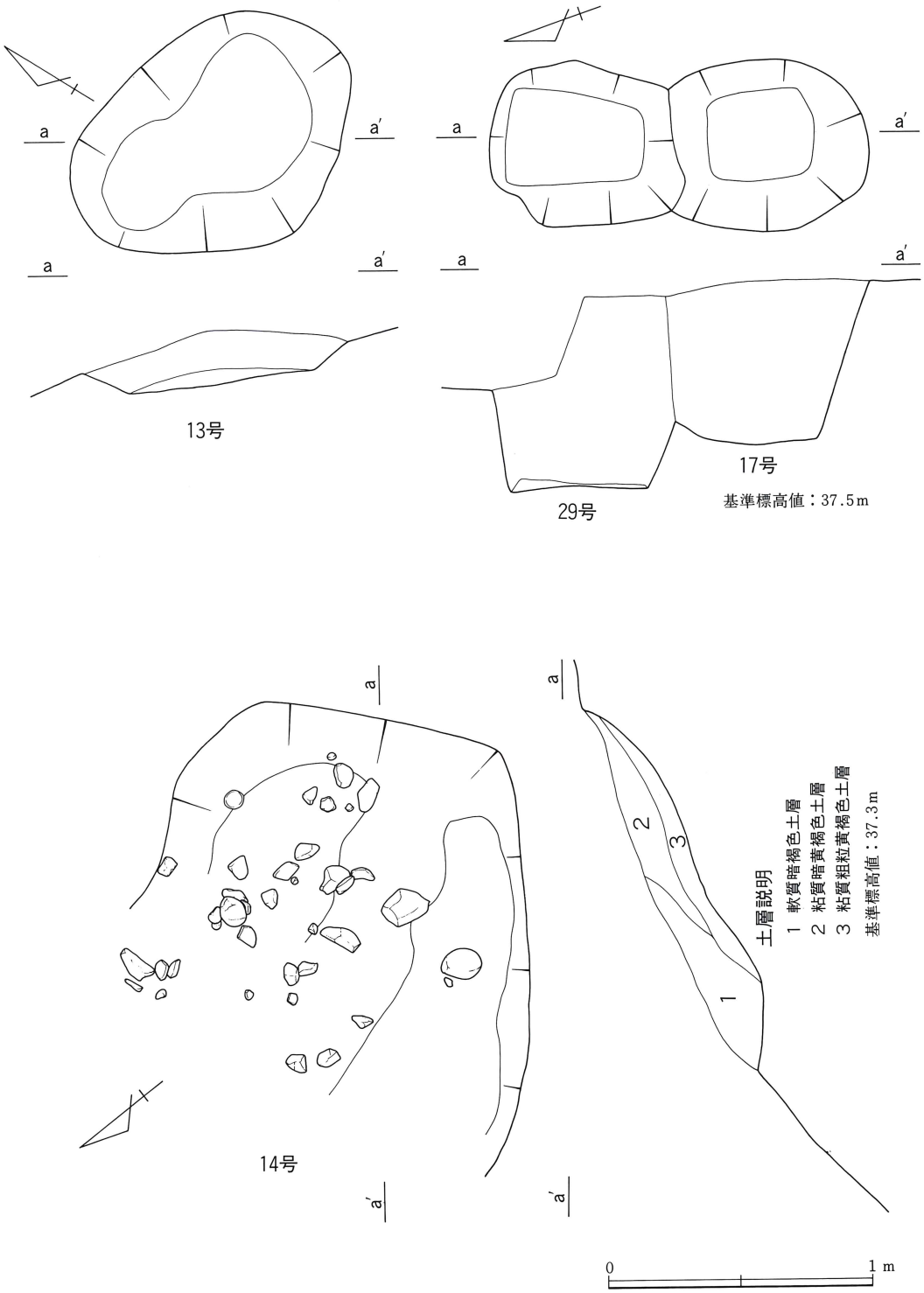
第52図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(1)



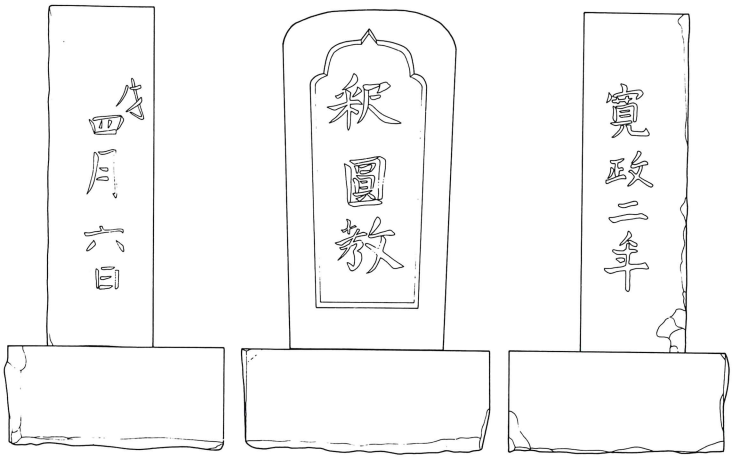
第53図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(2)



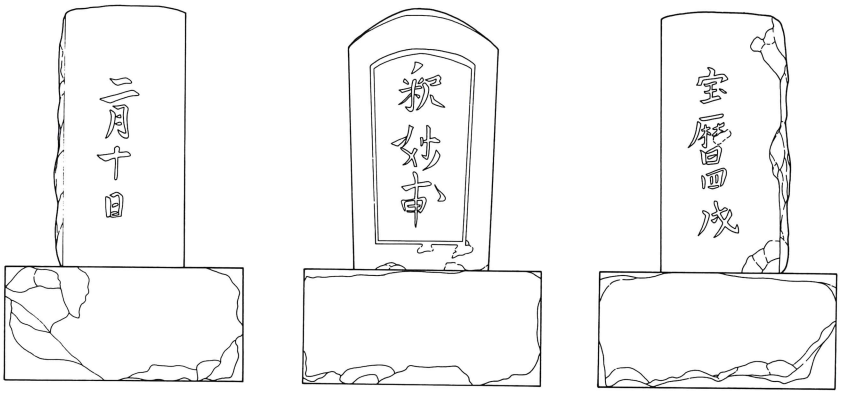
第54図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(3)



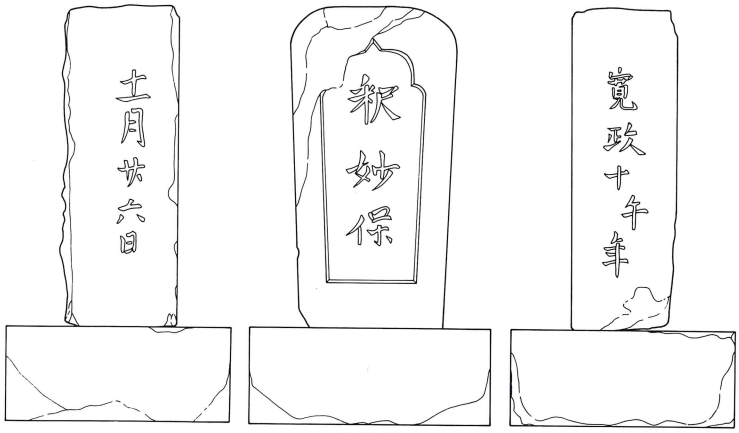
第55図　Ⅱ区近世墓地内部主体実測図(4)



1号墓



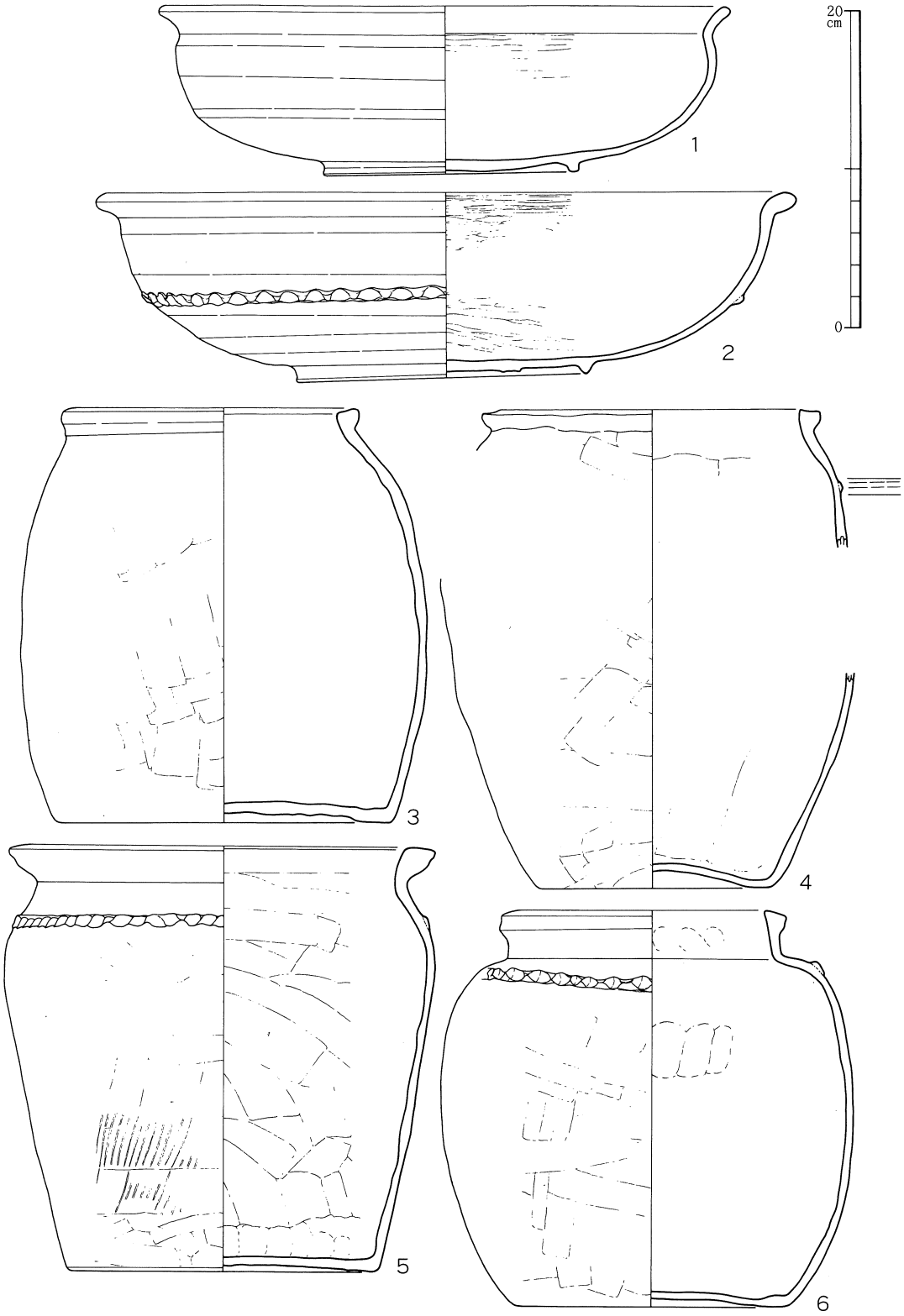
2号墓



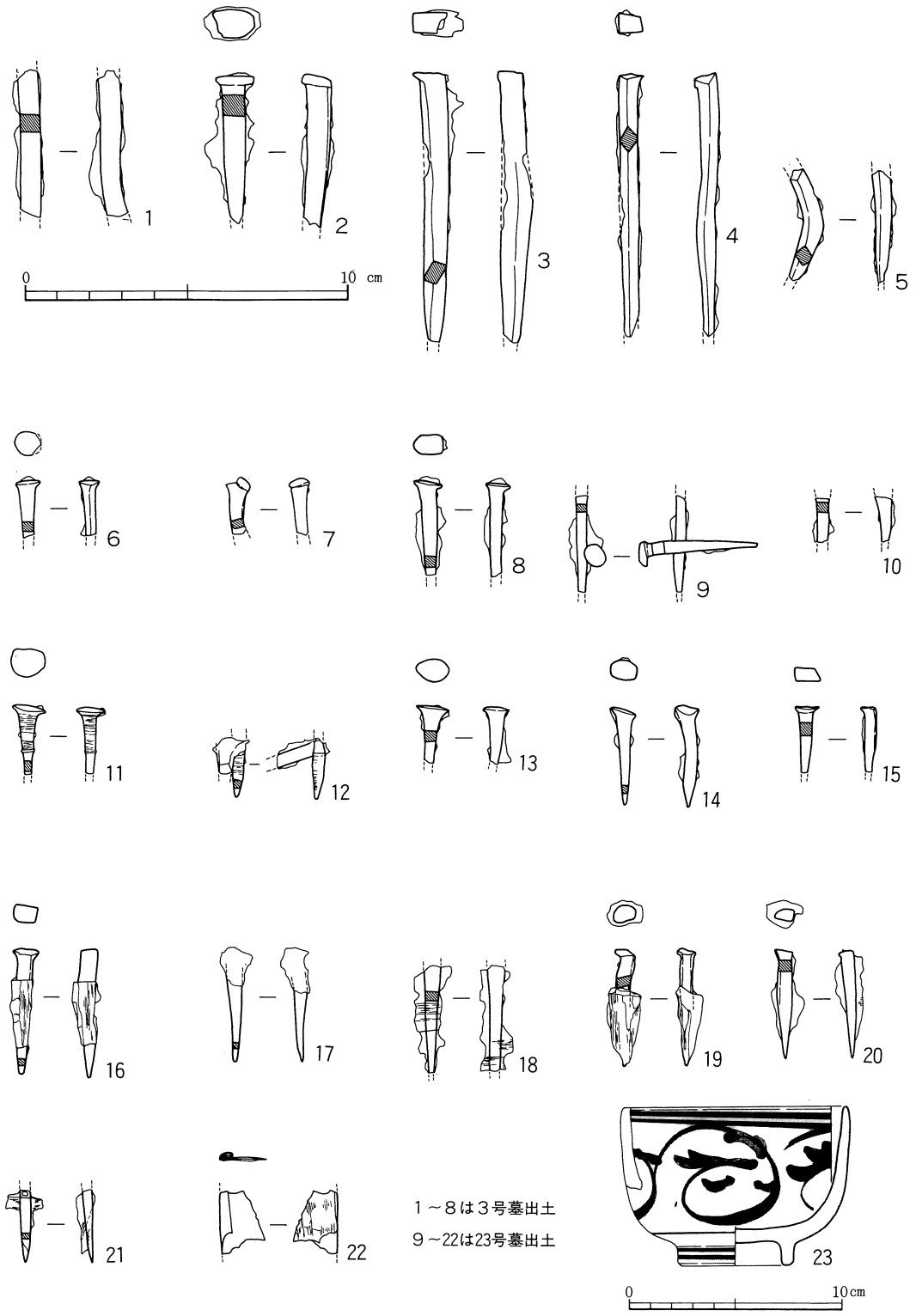
3号墓

0　40cm

第56図　Ⅱ区近世墓地墓標実測図



第57図　Ⅱ区近世墓骨蔵器実測図



第58図　Ⅱ区近世墓3・23号墓および周辺部出土遺物実測図

表４　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地一覧表

単位：m

墓番号	外部標識	下部施設	規模(長さ(長径)×幅(短径)×深さ)	備　　考
1	墓　石	―――		２次的に移動か
2	墓　石	―――		２次的に移動か
3	墓　石	方形墓坑	1.2×１×1.1	鉄製釘出土、24号を切断、礫
4		円形土坑	径0.3×0.2	地表に礫散在
5		骨蔵器	径0.57～0.6×0.13の円形掘形	コネ鉢利用、骨破片
6		方形墓坑	1.3×0.85×1.1	
7		骨蔵器	径0.5×0.27×0.15の円形掘形	甕利用、骨片
8		骨蔵器	径0.3～0.27×0.15の円形掘形	甕利用、骨片
9		骨蔵器	径0.72～0.65×0.1の円形掘形	コネ鉢利用、骨破片
10		円形土坑	径0.6～0.55×0.3	火葬墓？、地表に礫散在
11		骨蔵器	径0.3×0.12の円形掘形	甕利用、骨片、地表に礫散在
12		円形土坑	径0.5×0.54×0.36	火葬墓？
13		円形墓坑	0.87×1.17×0.2	
14		方形落込み	１×1.4×0.25	墓地関連施設？
15		円形土坑	0.3×0.31×0.07	骨破片、火葬墓？
16	配石？	骨蔵器	0.75×0.45×0.4の方形土坑	径約0.3の円形掘形を伴う、甕利用、骨片
17		方形墓坑	0.75×0.65×0.62	29号を切断
18		円形土坑	0.5×0.62×0.3	火葬墓？27号に切断
19		円形土坑	0.45×0.6×0.3	火葬墓？
20		円形土坑	0.4×0.5×0.2	骨片、火葬墓？
21		方形墓坑	0.9×0.65×0.88	
22		円形墓坑	0.5×0.6×0.55	25号を切断
23		方形墓坑	1.1×1.1×1.5	鉄製釘・金具出土、上部に礫
24		円形墓坑	0.7×0.55×0.55	３号に切断
25		方形墓坑	0.94×0.7×1.06	22号に切断、上部に礫有り
26		円形墓坑	径0.88×0.6	
27		円形土坑	径0.54×0.66×0.16	18号を切断
28		方形墓坑	１×0.65×0.6	
29		方形墓坑	0.6×0.75×0.72	17号に切断

第 4 章　遺構と遺物の検討

1　近世墓地について

桐ケ迫遺跡の近世墓地

桐ケ迫遺跡の近世墓地は、整地された範囲に3基の墓が造られていた。被葬者は袈裟金具や錫杖などの副葬品、墓標の銘文から修験者であることが明確となった。

修験者の墓については、17世紀中葉～後半の島根県松江市檜山古墓群（文献1）、京都府舞鶴市中山城跡（文献2）などの調査例が知られており、本例との比較ができる。

上部施設については、1号墓では盛土とこれを囲む円形周溝を確認した。2・3号墓には、1号墓のような施設は伴わない。盛土を伴う例は、檜山、中山例でもみられる。檜山古墓の場合、確認された17基すべての墓に盛土が伴い、高さは0.5m～1.3mである。中山城跡では6基の古墓が確認され、高さ0.5m程度の盛土がみられ、これに方形の浅い周溝が巡る。

下部主体は3基ともに土坑であり、規模と形態からすべて土葬と考えられる。釘は確認されていないので、桶形棺が想定される。檜山例では、桶形・箱形棺が用いられ、中山例では、棺に方形の櫃が使用されていた。葬法については、檜山例において、元禄7年の『意宇郡松江分并成山畑検地帳』に「人焼場」、「山ぶし塚」の記載から、修験者の墓地が独立していたことが指摘されており、一般的な火葬が並存することも推察できる。一方、中山例では同一の丘陵上に火葬墓6基がある。先行する城跡との関係から修験墓と同時期に造られたものと考えられている。このような事例から、17世紀中葉以降に修験者の埋葬が土葬優位で行われた傾向を僅少な例ながら窺うことができる。

副葬品についてみると、檜山古墓では錫杖、銅鉢、袈裟金具、数珠をセットとして副葬している。中山城跡の墓地では、錫杖、銅鉢の出土が知られている。桐ケ迫例では銅鉢、数珠を欠くが錫杖、袈裟金具が副葬されており、修験者の墓に伴う遺物の一般的な構成をみせている。

墓地の造営時期については、墓標の銘文から年代を知ることができ、1号・3号墓出土の銅銭と併せて、墓地の時期を想定する材料とした。まづ、3基の墓標銘文が示す年代は1号墓が元禄2年（1689年）、2号墓が文化11年（1814年）、3号墓が寛延2年（1749年）と、60年・65年の間隔をもつ。銅銭は、1号墓出土例で最も新しいものが寛永通寶（新寛永背文－初鋳1668年）、3号墓出土では、寛永通寶（新寛永背元－初鋳1741年）が最も新しい。2基の墓坑から出土した銅銭のうち最も新しいものの年代は次に鋳造される銭の初鋳年から、1号墓が1700年、3号墓が1767年を下限とすることを一つの可能性として指摘できる。もちろん銅銭自体は新規の銅銭が鋳造さ

れた後も流通しており、鋳造期間と流通期間が単純に合致するものでないことは十分に考慮しなければならないが、1号墓の紀年1689年は銅銭の示す1668年～1700年と、3号墓の紀年1749年が銅銭の示す1741年～1767年とは矛盾なく対応するものといえる。これから類推すると、2号墓の墓碑銘文も被葬者の没年を示すものといえよう。したがって、墓碑に刻まれた没年は、3基の墓の被葬者それぞれにあてることができると考えられる。

被葬者は出土した輪宝型の金物が磨紫金袈裟に使用されることから、当山派に属す。また墓標の銘文にある「大越家高林院養須大徳」の大越家は当山派官位のうち第2位を示し、行者が生前に修行を積み重ねたことを墓碑に刻み強調したものである。高林院は院号あるいは寺名を示し、養須は「養順」という行者名を表したものと理解できる。大徳は僧を示す。また「大越家高林院養須大徳」は1、2号墓に没年の異なるもので同一のものが刻まれているが、これは襲名の結果と推察される。

峯添遺跡の近世墓地

墓地は28基の骨蔵器・墓坑で形成されている。整地された墓地範囲は北から1/3ほどが細く墓の分布しない平坦面が造られ、墓道的な機能が考えられる。奥に向かって幅が広くなり墓が密集する。骨蔵器を伴う火葬墓は、墓地範囲の中央部から北部にかけて東縁辺よりに造られてる。火葬骨を伴う浅い土坑墓は骨蔵器の分布とほぼ同一の範囲に造られている。一方土葬墓は深さ1m前後を中心とする墓坑をもち、墓地中央付近で火葬墓と重複するが、分布は南に向かって展開する。土葬墓は中央付近の火葬墓を一部切断する例があるものの、これを大きく破壊することなく構築されている。墓地の形成が連続的に行われたことを示している。

時期を知る資料は、3基の墓標紀年銘と骨蔵器に用いられた甕、コネ鉢のみである。墓標の年代は、1号が寛政二年（1790年）、2号が宝暦四年（1754年）、3号は寛政十年（1798年）となっている。土葬墓8基に対して、墓標の数は3基と少なく移動したものと考えられる。骨蔵器は、別項の検討のように17世紀後半～18世紀前半と考えられるものである。付近から陶胎染付碗が出土していることも参考となろう。

この墓地の様相は、18世紀中頃から火葬から土葬へと葬法が変化したことを示すものといえる。これに対して、院内町広瀬墓地では18世紀～19世紀前葉を通じて火葬が確認されており、葬法に差があることを確認した（註1）。

<文献>

文献1　近藤正「V松江市・檜山古墓群」（『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集』島根県教育委員会、1971年）
文献2　竹原一彦「3.中山城跡」（『京都府遺跡調査概報第10冊』（財団）京都府埋蔵文化財調査研究センター、1984年）

<註>

註1　県文化課原田昭一氏の教示（「広瀬遺跡」『一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』大分県教育委員会、1991年）

＊ 修験関係の遺物や墓標銘文については、東京国立博物館有史室の時枝務氏、立正大学文学部池上悟氏、立正大学大学院博士課程松原典明氏に多大なご教示をいただいたことを明記しておきたい。

2　峯添遺跡近世墓地の骨蔵器について

峯添遺跡では近世墓地の調査が行われ、納骨容器として素焼きの甕やコネ鉢が使用されているのが確認された。いずれも上部施設として墓標を持たず、直接的に年代を決めることは出来ないが、墓地の形成（骨蔵容器を持つものの集中性など）や葬法の変化（火葬から土葬へ）を考慮すると、この種墓制は17世紀後葉から18世紀前半までに納まる可能性が高い。それを証するために骨蔵容器そのものの年代を考えてみたい。ただし、紙幅が限られているのでここではコネ鉢の型式変化について結論的に触れるに止め、他は後日を期したい。

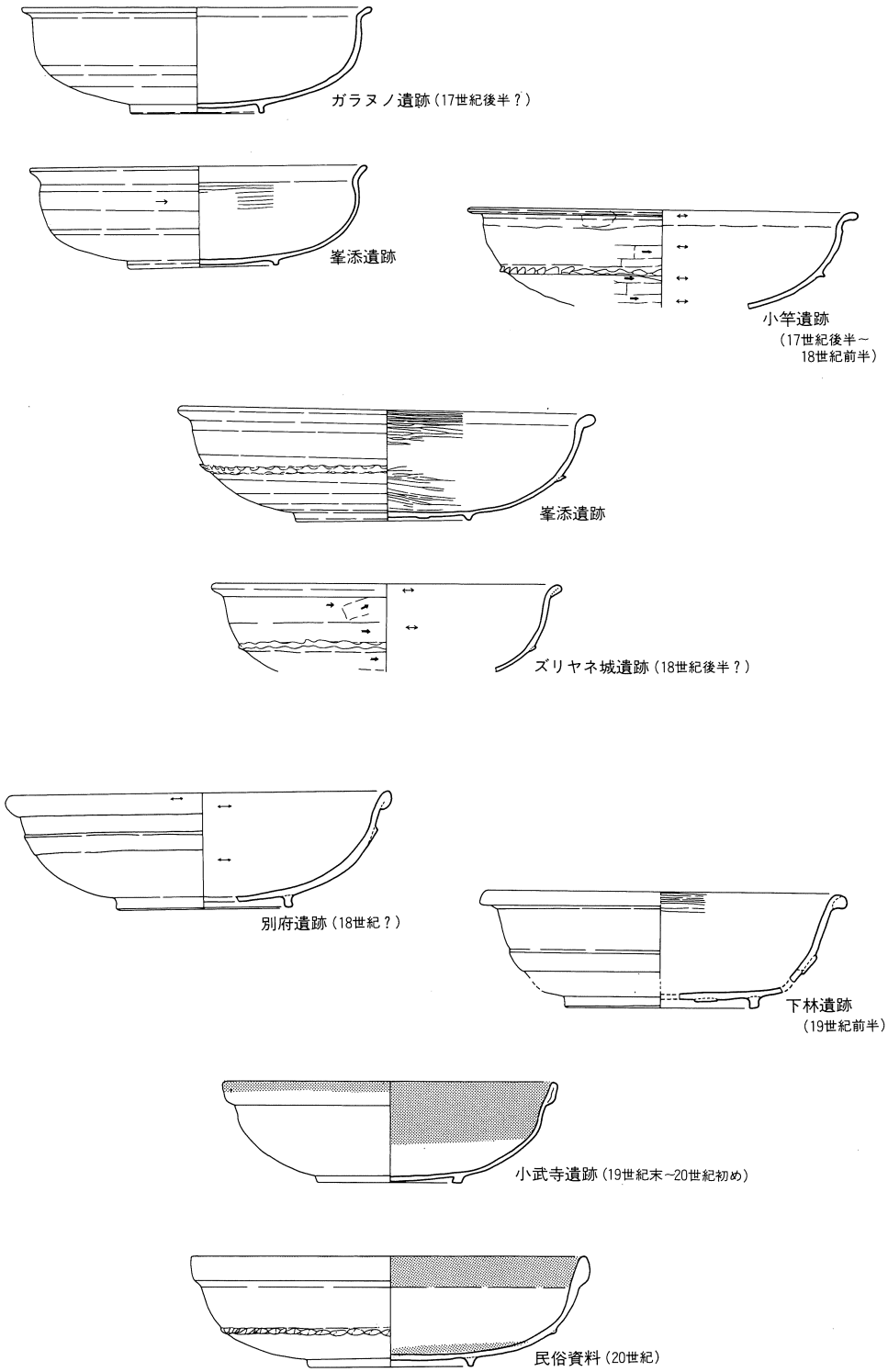
コネ鉢という呼び方は、その使用状態（粉をこねる）から付けられたものであり、考古学的には形態から浅鉢と呼称するものである。高台をもち小さく口縁部が外反する浅鉢は、16世紀後半に瓦質のものが存在する。口縁部に突帯を巡らせ、花文などのスタンプ文を持つ深鉢形の火鉢や、内面底部に花文状に摺り目を施す摺鉢などと共伴する。基本的には口縁部を明瞭な稜線を持って小さく外反させるか玉縁状につくる。この瓦質のものは17世紀前半まで残る可能性があるが、良好な資料がなく不明である。

17世紀後半から18世紀前半には素焼き（土師質）のコネ鉢が出現する。溝一括資料の玖珠町小竿遺跡、共伴資料はないがこの時期の墓地を形成する中津市ガラヌノ遺跡出土のものが該当する。いずれも口縁部が「く」字状に外反し、肥厚しない。胴部はやや張る。以後の資料も同様であるが、外面はヘラ削り、内面はミガキである。

これに続くものとしては、19世紀前半の宇佐市下林遺跡出土資料、幕末から明治期の山香町小武寺資料があるが、前者は直口の口縁部を大きく肥厚させるもので、後者はやはり直口の口縁部を折り返して幅広く肥厚させる。これらは胴部の張りがなくなる。さらにごく最近まで商品として売られていた資料も直口の口縁部を幅広く肥厚させるもので、これらの事例からすると少なくとも19世紀以降は、直口の口縁部が特徴となる。そうすると、三光村ズリヤネ城遺跡出土資料のゆるやかに外反し折り返して小さく肥厚させるものは18世紀後半におかれる可能性が高い。

このように型式変化が追えるとすると、峯添遺跡出土のコネ鉢の年代はいつに求められるであろうか。５号墓のものは口縁部が「く」字形に折れ、肥厚しない。さらに胴部も大きく張るなど、古式の様相をもつ。17世紀後半から18世紀前半に位置づけられよう。９号墓のものは口縁部が小さく「く」字形に折れ、やや肥厚する。胴部の張りが５号墓より小さく、後出の要素が多いが、ズリヤネ城遺跡出土のものに比較してまだ口縁部の折れが強く、18世紀後半まで下ることはなかろう。甕についてはいまのところ時期比定の根拠がないが、出土位置から見てコネ鉢と大きくは時期が違わないと考えられる。つまり、火葬墓の多くは17世紀後半から18世紀前半に納まるものと考えられるのである。

なお、これらの土器類の大部分はその形態からみて、宇佐市高村で焼かれたものである。


ガラヌノ遺跡（17世紀後半？）
峯添遺跡
小竿遺跡
（17世紀後半～
18世紀前半）
峯添遺跡
ズリヤネ城遺跡（18世紀後半？）
別府遺跡（18世紀？）
下林遺跡
（19世紀前半）
小武寺遺跡（19世紀末～20世紀初め）
民俗資料（20世紀）

第59図　コネ鉢変遷図

第 5 章　自然科学的調査の成果

1　桐ケ迫遺跡２号墳出土須恵器の脂質分析について ※1

埼玉大学　小池　裕子

＜分析試料＞

大分県宇佐市桐ケ迫遺跡２号墳の墳丘から、蓋つきの須恵器の坏が４組出土した。これらのうち、２組の須恵器について、坏内に貯蔵あるいは埋納していたものの推定するため、No.４坏身（569－１）とNo.６坏身（569－２）の脂質分析を行った。抽出の際、坏の内部と外部に抽出液を浸漬したが、そのうち坏身内部の抽出液のみを分析対象とした。

またこれらの須恵器には土壌がほとんど充填していなかったが、須恵器内面に付着していた粘土状の土壌を採取し、No.４坏身付着土壌3.3ｇ（569－３）、No.６坏身付着土壌0.9ｇ（569－４）を比較試料として分析した。

＜分析方法＞

試料からの脂質抽出および精製法は常法（小池、1990）により、クロロホルムーメタノール（２：１）を用い超音波抽出を行い、得られた全脂質を計量した。全脂質に５％HC１-MeoHを加えメチル化し、ヘキサンージエチルエーテルー酢酸（80：30：１）用いて展開した薄層板から、遊離脂肪酸部位とステロール部位をかきとり、濃縮して検出試料とした。

脂肪酸分析には20％DEGSカラムを、ステロール分析には２％OV-17カラムを用い、標準試料の検出時間を基準にして第60図に示す17種の脂肪酸および９種のステロールを同定した。

GC-MS分析には、埼玉大学分析センターのガスクロマトグラフィー質量分析機JEOL- GCMS-DX 303を用い、MegaboreDB５カラム、カラム温度250℃の条件で分析した。

＜全脂質抽出量＞

分析資料から抽出された全脂質重量は、No.４坏身（569－１）が0.85mg、No.６坏身（569－２）が1.29mgであった。これらの全脂質を脂質重量にすると、No.２坏身が0.28mg/100ｇ、No.６坏身が0.43mg/100ｇとなり、ともに土器としてはかなり低い抽出率であった。また土器付着土壌ではNo.４坏身土壌（569－３）が0.01mg、No.６坏身土壌（569－４）が0.02mgで、ともに分析限界であった。

※１　本原稿は1991年３月に送付されたものである。

＜脂肪酸組成について＞

今回分析した須恵器の脂肪酸組成・ステロール組成を第59図に示す。No.2坏身の脂肪酸組成は中級脂肪酸を主体とし、土壌によくみられるC22以上の高級脂肪酸は検出されなかった。中級脂肪酸の中ではC18：1が40％を占め、それにC16：1・C18：1・C16：1が伴うのを特徴とし、飽和脂肪酸のC18：0はわずか3％であった。

No.6坏身の脂肪酸組成もNo.4坏身と同時に中級脂肪酸を主体とし、C18：1が40％以上を占め、C16：1・C18：1・C16：1が10～20％、C18：0は約3％であった。

一方土器付着土壌では、No.4坏身土壌試料およびNo.6坏身土壌試料ともに須恵器試料の脂肪酸にくらべ、飽和脂肪酸のC16：0やC18：0がやや増加するものの、ともに中級脂肪酸を主体にし、土壌特有の高級飽和脂肪酸はあまり検出されなかった。

＜ステロール組成について＞

ステロールのガスクロマトグラムに示すように、No.4坏身試料からは有効なステロールが検出されなかった。No.6坏身試料からはコレステロールとステロール分解物と考えられるコレスタノンが検出された。これらの須恵器からは、土壌試料によくみられる飽和型ステロールは認められなかった。

GC-MS分析によって、No.6坏身のステロールの各ピークを調べたところ（第61図）、コレステロール（分子ピーク386）の存在をスペクトルムで確認することができた。従って、なんらかの動物性食糧が関連していたと推定される。

土器付着土壌では、No.4・No.6坏身土壌ともに有効なステロールは検出されなかった。

＜考　　察＞

No.4坏身試料（569－1・3）

この試料の脂肪酸組成はC18：1が40％、C16：1・C18：1・C16：1が10％前後で、動植物の脂質に特徴的な脂肪酸を主体とした脂肪酸組成を示した。この試料からは有効なステロールが検出されなかったため、このような脂質が植物質なのか動物質なのか直接推定することはできないが、このような条件でコレステロールが検出されなかったことから、動物性脂質の可能性は低く、どちらかというと植物性の遺物の可能性が考えられるであろう。

No.6坏身試料（569－2・4）

No.6坏身の脂肪酸組成もNo.4坏身とよく似た脂肪酸組成を示したが、ステロール組成では動物性ステロールのコレステロールが植物性ステロールを伴わずに単独で出現したことから、動物性脂質が相当量存在していたものと推定される。またコレスタノンがかなり含まれていたことは、

このような脂質組成のとき注意しなければならない人の手の汚染によるコレステロールと中級脂肪酸の検出ではなく、コレステロールが変成してコレスタノンになったと考えられる。

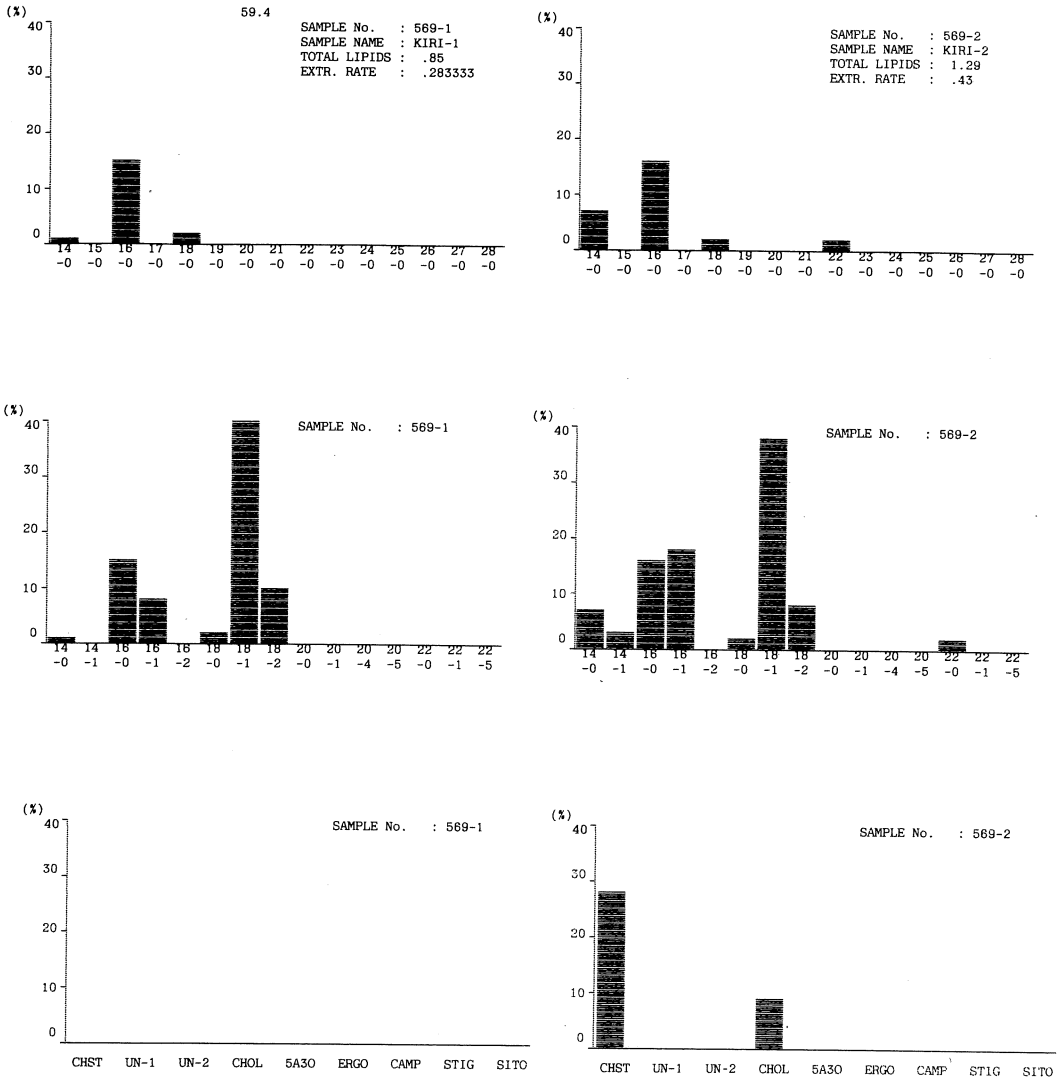
＜参考文献＞

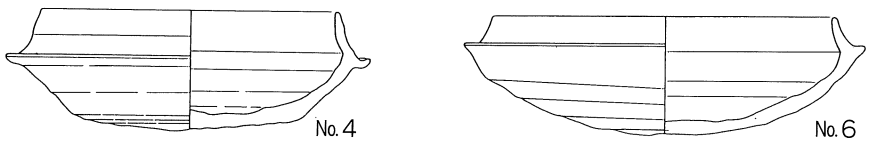
小池裕子・土屋朋子（1988）水産動物の脂肪酸組成について。埼玉大学紀要（自然科学編）、24：55－72

瀬川裕一郎・小池裕子（1990）煮堅魚と鍋型土器・覚え書。沼津市博物館紀要14：1－19

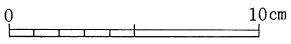
小池裕子（1990）S1－038A住居覆土と出土土器の脂質について。「一般国道4号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過」、25－30

小池裕子（1991）有用植物のステロール組成について。埼玉大学紀要（自然科学編）、26：13－29

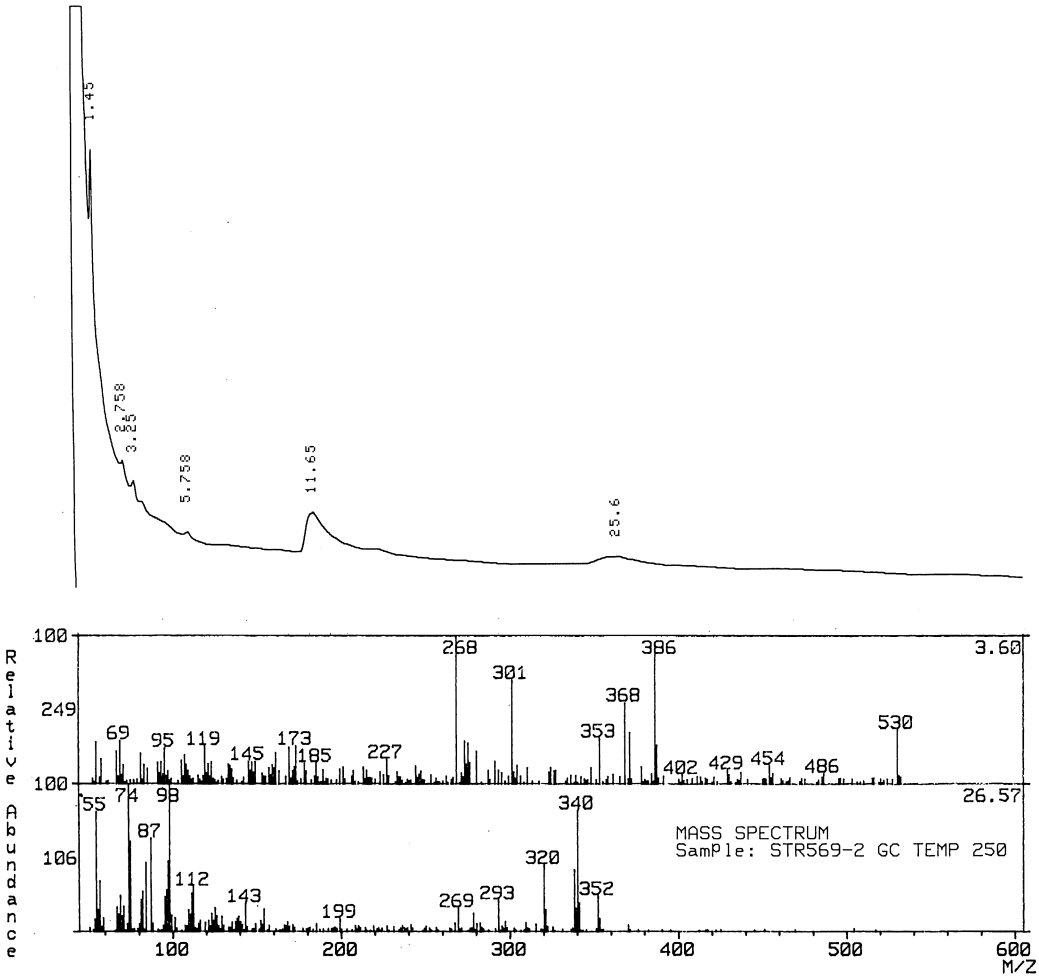




（桐ヶ迫遺跡２号墳出土須志器）



第60図　桐ケ迫遺跡２号墳出土No.４坏身（569－１）とNo.６坏身（569－２）の脂質分析。
上段：飽和脂肪酸、中段：不飽和脂肪酸、下段：ステロール組成



第61図　桐ケ迫遺跡２号墳出土No.６坏身（569－２）のステロールにおける
クロマトグラムとＧＣ－ＭＳスペクトル。

2　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地出土人骨について

九州大学　金　宰賢・田中　良之

本遺跡では近世墓6基から人骨が検出された。いずれも火葬骨であり、保存不良で砕片となっている。また、火葬による変形も著しく、計測はおろか年齢・性別等の鑑定に耐える個体も少ない。以下、遺構ごとに記載する。

5号人骨

筆者らの手元に送られてきた資料は、歯根3点のみであった。歯根も先端の部分だけであるため、歯種の判定も不能であった。したがって、年齢・性別とも不明である。

7号人骨

頭骨および上下肢の破片を認める。

頭骨は、前頭骨と右頭頂骨の小片が認められた。矢状縫合は開離する。他に小臼歯の歯根が認められたが、それ以上の部位は判定できない。

上肢は、前腕と思われる破片がみられたが、熱による変形が著しく、部位の特定はできなかった。

下肢は、左右寛骨と左右大腿骨の一部がそれぞれ認められた。そのうち左寛骨は、腸骨耳状面・弓状線を含む部位であったが、前耳状溝は認められなかった。大腿骨は、左右とも骨体部であるが、右は遠位、左は近位である。とくに右大腿骨は、火葬による変形はあるものの、粗線の発達を認めることができた。

以上のように、大腿骨粗線の発達からみて男性であった可能性が高いと考えられる。また、寛骨前耳状溝が認められなかったことも、消極的ながら、この性判定を支持する。年齢推定に有効な所見はないが、矢状縫合が開離していることから高齢ではなく、大腿骨の厚みや太さからみて小児以下でもないと考えられることから、成年か成人に迫る若年の個体であったと推定される。

8号人骨

頭骨と四肢骨の砕片が認められた。

頭骨は、小片のみであるため部位の判定が困難であり、わずかに後頭骨（左乳突縫合、外後頭隆起の部分）のみ部位が判定できた。外後頭隆起はやや発達する。歯牙は、切歯から小臼歯にかけての歯と思われる歯根が2点認められたが、歯種の特定はできない。

上肢は、右上腕骨の三角筋粗面および外側縁の部分が確認されたが、他は小片のみである。熱による変形はあるが、三角筋粗面は発達していたものと思われる。

下肢は、大腿骨骨体の破片が多くみられるが、左右の判定はできない。破片ではあるが、粗線の発達が認められた。

以上のように、上腕骨三角筋粗面および大腿骨粗線からみて、男性であったと推定される。年

齢については、骨質からみて成人に達していた可能性が高い。

11号人骨

四肢骨の砕片が認められるが、部位の判定が可能なものはなく、年齢・性別とも不明である。

15号人骨

下顎大臼歯の歯根１点が認められるのみで、詳細は不明である。

16号人骨

頭骨および四肢骨の破片が認められた。頭骨は、右頭頂骨前頭縁の一部と後頭骨右乳突縫合の部分があり、冠状縫合・乳突縫合とも開離する。下顎は左下顎体が認められた。歯槽から得られる歯式は以下のとおりである

○ ／ ○ | ／ ○ ○ ○ ○ ○ ／

○歯槽開放　×歯槽閉鎖　／欠損　△歯根のみ・遊離歯　（　　）未明出

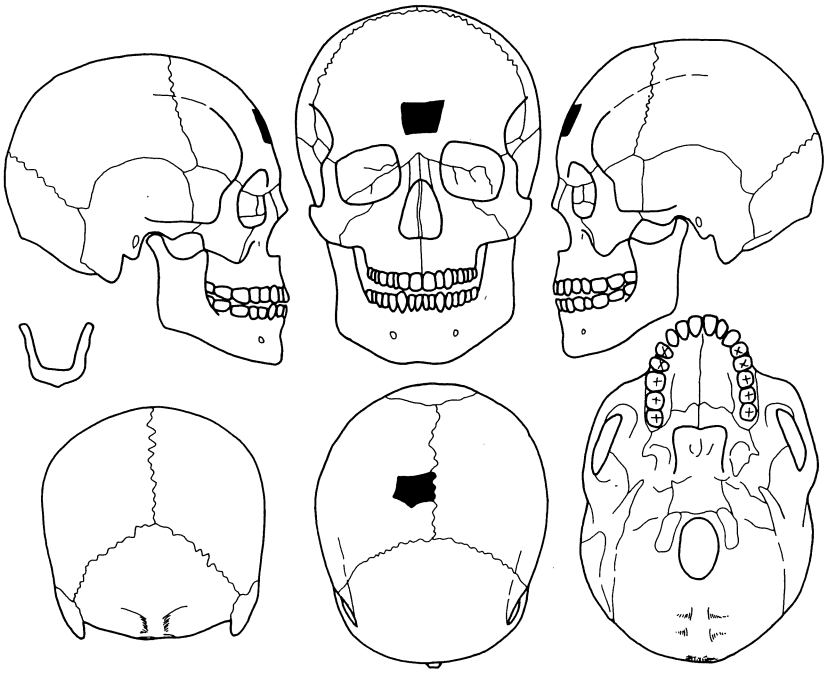
また、切歯～犬歯と臼歯の歯根がそれぞれ１点ずつ認められたが、歯種の判定はできなかった。

上肢は、右上腕骨骨体外側部と左上腕骨遠位が認められた。三角筋粗面は、発達した形状を示す。

下肢は、寛骨片が認められるが、小片のため部位の判定は不能である。大腿骨は、小片が多くみられるが、部位が特定できるのは右骨体遠位部のみである。残存した骨体から粗線の発達が確認された。脛骨は、小片が多くみられたが、部位の判定はできなかった。また、左膝蓋骨片も認められた。

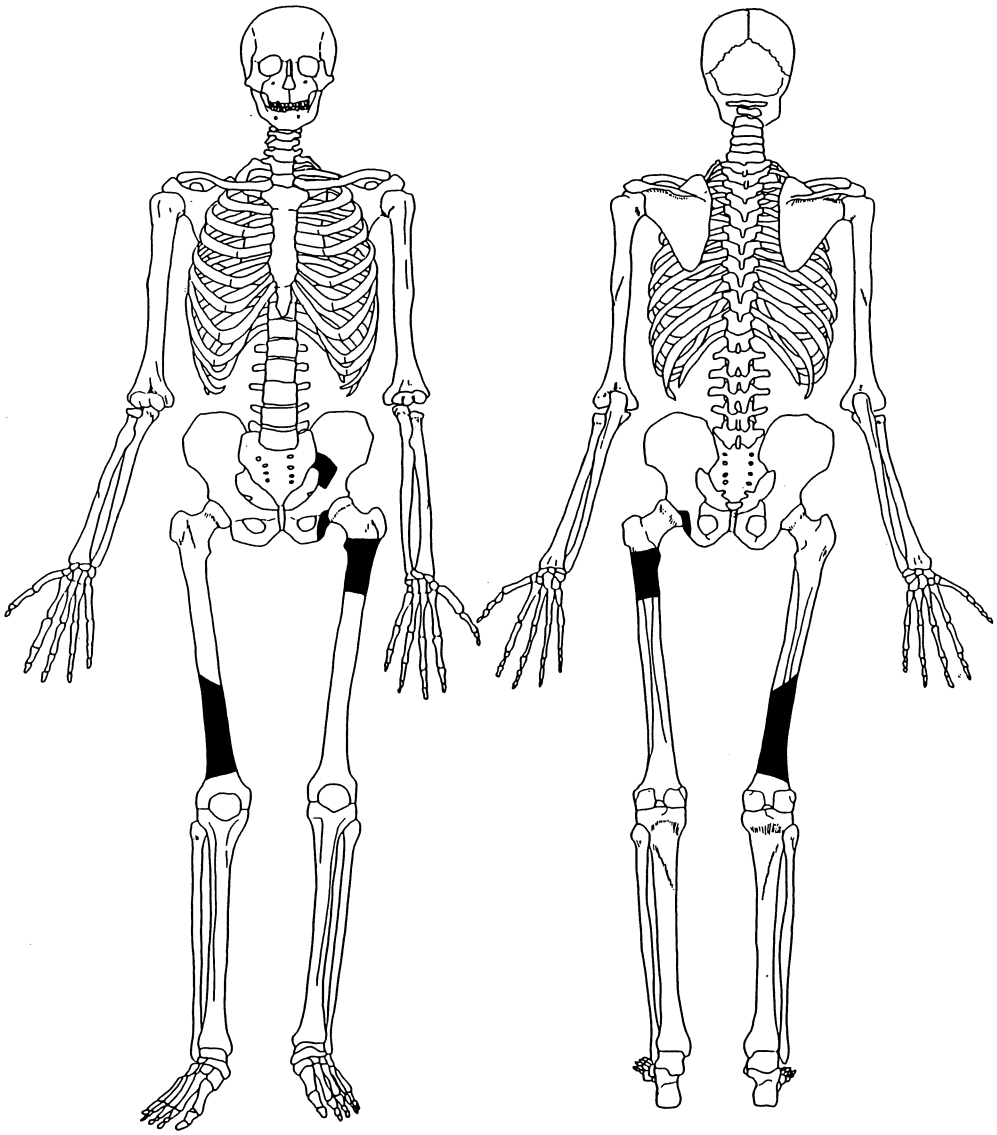
以上のように、上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線の発達からみて男性であると推定される。性別については、冠状縫合・乳突縫合とも開離することから熟年には達しておらず、骨質からみて成人かそれに近い若年より若くはない。したがって、若年後半以上で成年の域に収まる幅であろうと思われる。

以上、峯添遺跡出土近世火葬骨について記載してきた。ほとんどが火葬のため小片となっており、わずかに７・８・16号の３体の性別が推定されたにとどまった。全体的に人骨の分量が少ないという印象があり、少量が捨骨され、残りの多くの部分が遺棄された可能性があるかもしれないが、保存条件等ほかの要因も考えなければならず、いちがいにはいえないであろう。



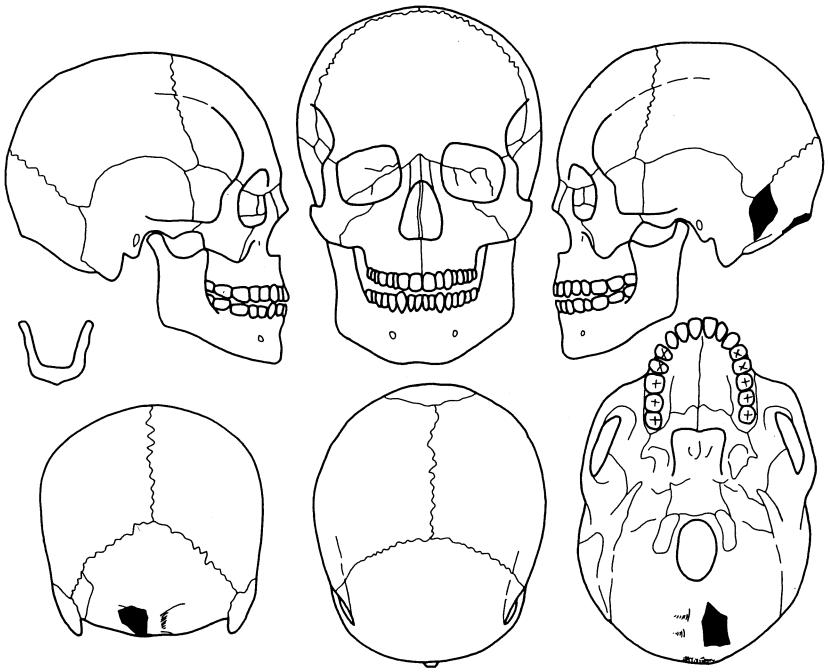
（黒塗り部分が遺存）

第62図　７号人骨頭蓋骨遺存部位



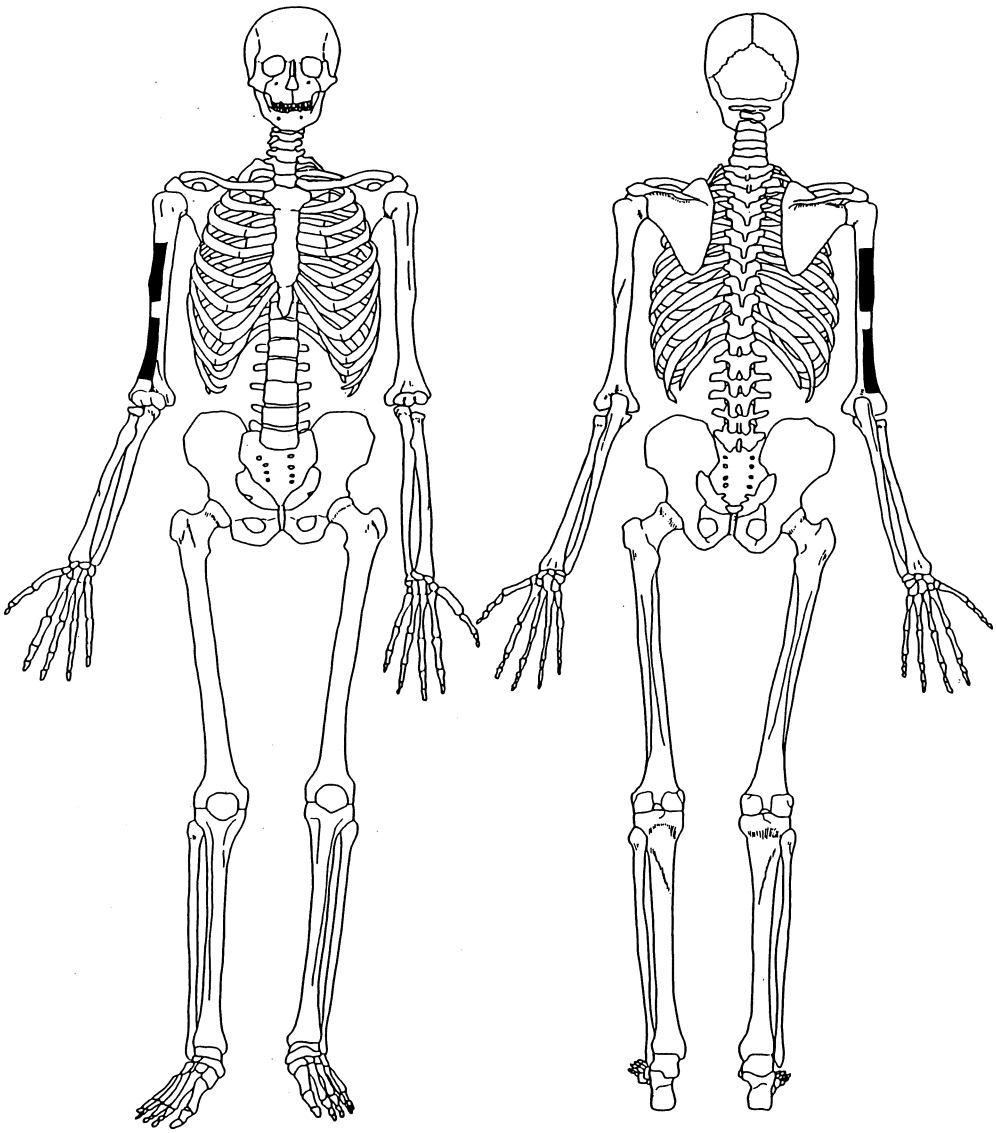
（黒塗り部分が遺存）

第63図　７号人骨遺存部位



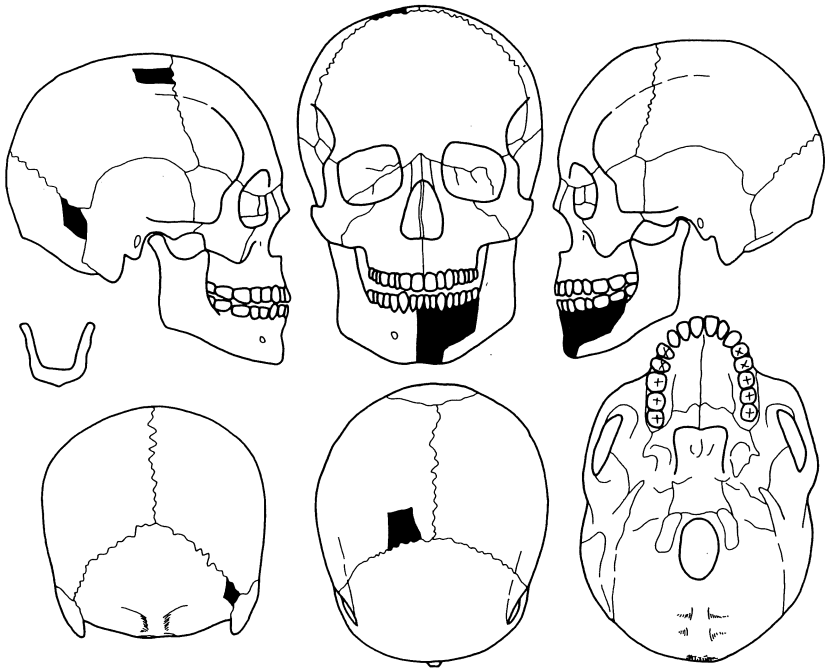
（黒塗り部分が遺存）

第64図　8号人骨頭蓋骨遺存部位



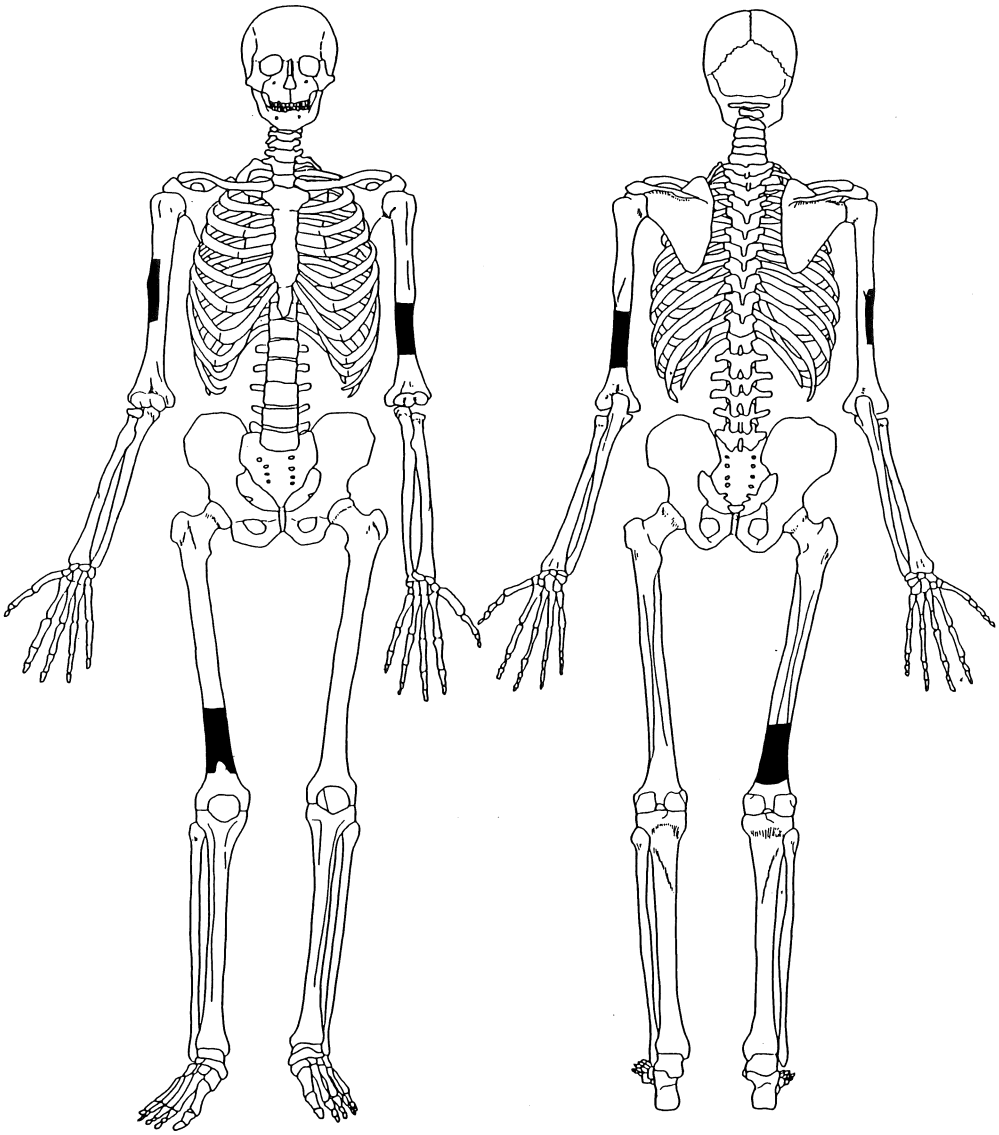
（黒塗り部分が遺存）

第65図　8号人骨遺存部位



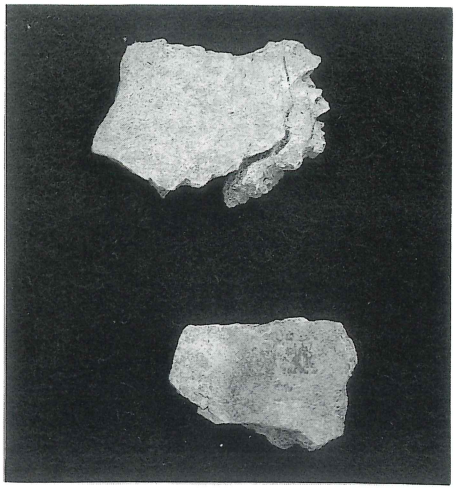
（黒塗り部分が遺存）

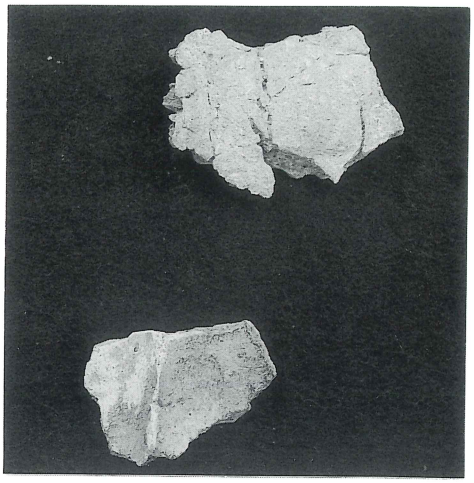
第66図　16号人骨頭蓋骨遺存部位

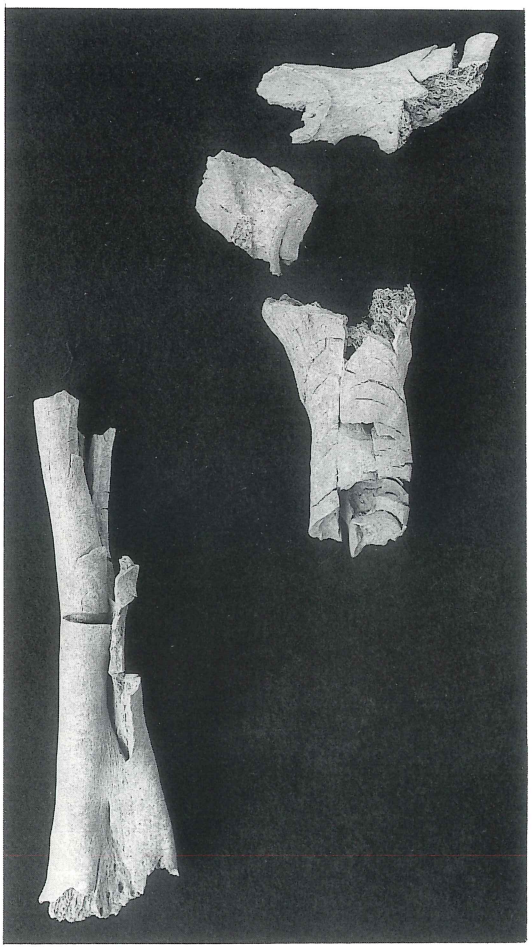


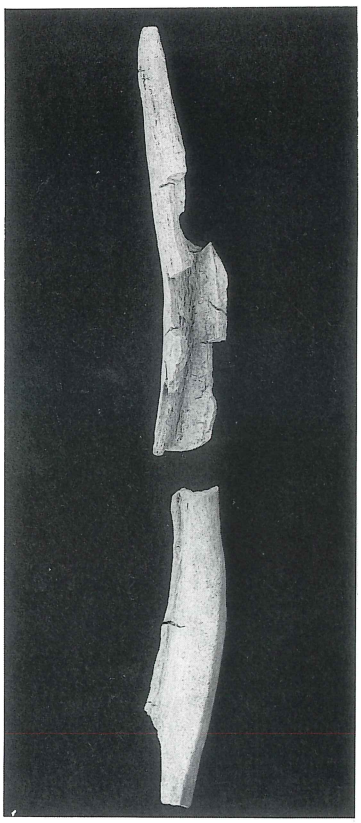
（黒塗り部分が遺存）

第67図　16号人骨遺存部位

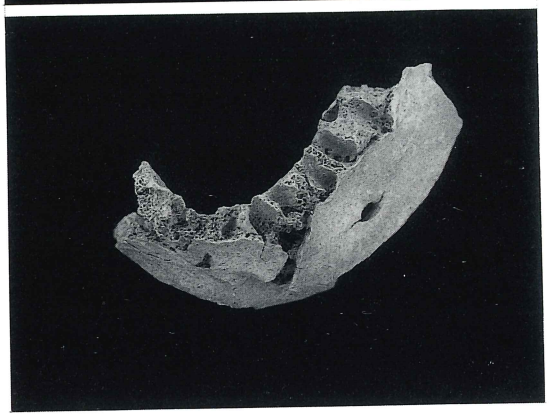








7・8号人骨



8・16号人骨

SUMMARY

This report is the result of investigation of the Kirigasako and the Minezoe sites that was required prior to the construction of the Usa Bypass.

The staff of the Oita Prefectural Board of Education carried out the excavation in 1987—1990.

Kirigasako site

The position of this site is Kirigasako, Usa City in Oita Prefecture (N. Lat. 33° 31′ 44″, Long. 131° 18′ 35″E).

We found a mound tomb in the latter half of the 6 th. Century, ash dump of Sue kilns in the latter half of the 6 th. Century, and modern graves dating the 18th. Century.

MOUND TOMB in the Kirigasako site (late Kofun period-mid the 6 th. Century to latter half of the 6 th. Century) : This mounded tomb was located on many rice fields situated around it. This mounded tomb belongs to the "Circular Burial Mound" type. The mound was 10m. across. The burial mound was surrounded by a ditch. An underground facility, a stone chamber, was built of large stones and pebbles. It is called CORRIDOR STONE CHAMBER. It has a horizontal passageway at the side of the burial mound. This structure shows it was planned for several burials. To make this mounded tomb, first the former was dug and scraped into the shape. Then the burial chamber and mound were newly made. The stone chamber was partially destroyed in a later time so we can not exactly determine the completed shape. We do know it was 2 m. long, 1.5m. wide, and was smaller than any other type of these stone chambers. The mounded tomb was a special facility for the burial of a person of importance. In Japan, mounded tombs were regularly built from the latter half of the 3 th. to 7 th. Century. The CORRIDOR STYLE STONE CHAMBER was popular in the 6 th. Centurry. Perhaps the mounded tomb Kirigasako held the remains of some person who was highly thought of by those who crafted the "Sue Pottery" Kilns distributed around this mounded tomb.

MODERN GRAVES found in the Kirigasako site (early 18th. Century to late 18th. Century). These features were located on a hill overlooking a plain. The hill was scraped to make a flat level area. In this burial area three features consist of two burial pits and one burial pit with mound that surrounded by a ditch.

Three head stones remained near this area. On these head stones the notes showed the rank in Buddhist at the time of his life, and the date of death were engraved. And we found relics that were Shakujyo i. e. metal decoration of stick for Buddhist, metal fittings of vestment and coins. We could allow that buried persons were Shugensha (one of buddist groups). These graves shed light on the phase of Buddist burial type.

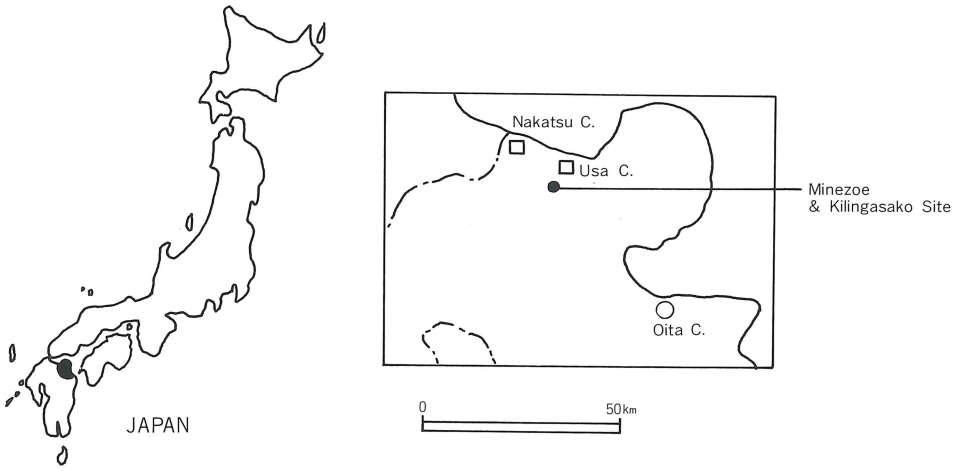
Minezoe site

The position of this site is Minezoe, Usa City in Oita Prefecture (N. Lat. 33°31′30″, Long. 131°19′E).

1 area We found a house pit and relics of late palaeolithic period (about B. P. 15000). This example is very rare, important.

2 area We found house pits and relics of late Kofun period (latter half of 6 th Century), one cremation grave and modern graves.

MODERN GRAVES found in the Minezoe site (latter half of the 17th. Century to late the 18th. Century). Modern graves consists of 6 urns and 21 burial pits. It is highly probable that those buried here were farmers.



報　告　書　抄　録

ふりがな	きりがさこいせき　　みねぞえいせき
書名	桐ケ迫遺跡　・　峯添遺跡
副書名	一般国道10号 宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（2）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林昭彦
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870　大分県大分市府内町三丁目十番一号　TEL 0975-36-1111
発行年月日	西暦　1994年3月

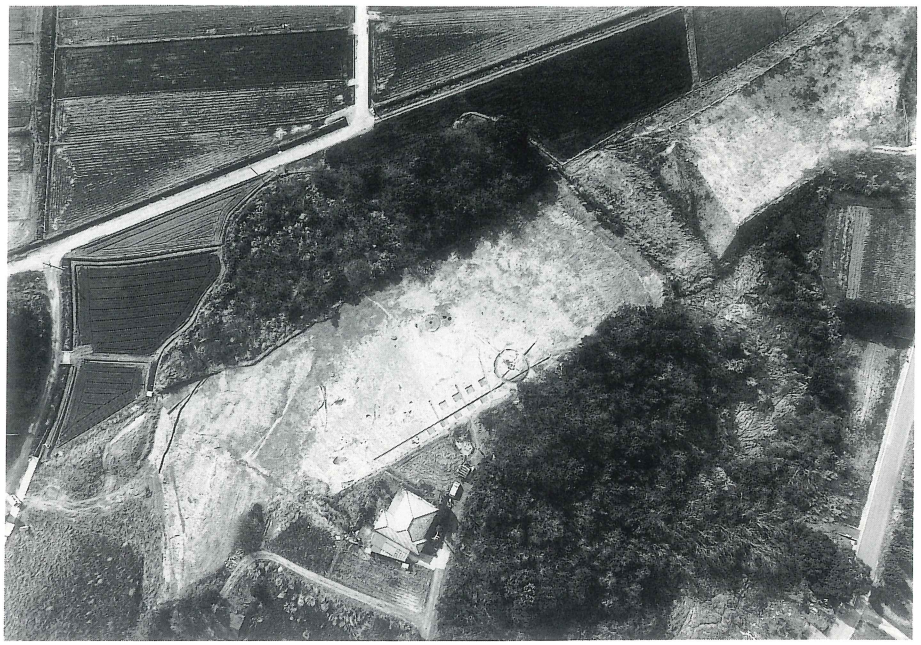
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 m²	調査原因
桐ケ迫（きりがさこ）	大分県宇佐市 大字山下	44211 9		33度 31分 44秒	131度 18分 35秒	19880808～ 19880901 19900528～ 19900204	7500m²	道路建設
峯添（みねぞえ）	大分県宇佐市 大字山下	44211 9		33度 31分 30秒	131度 19分	19871001～ 19871028 19880808～ 19880901 19900418～ 19910318	12000m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	主な遺物	特記事項
桐ケ迫	墳墓ほか	古墳 近世	古墳　1基 近世墓　3基 灰原（須恵器窯跡） 1ヶ所	須恵器 土師器 玉類 銅銭 錫杖・袈裟金具	近世墓は修験墓
峯添	墳墓ほか	旧石器 古墳 近世	竪穴住居　5基 近世墓　29基	旧石器 須恵器 土師器 近世陶磁器	旧石器時代の住居1基

写　真　図　版

出土遺物の写真番号は挿図番号と対応する

（第10図１　→　10－１）



桐ケ迫遺跡（西上方向から）

峯添遺跡Ⅱ区（南上方向から）

図版二　桐ケ迫遺跡(1)

2号墳遠景
（北西方向から）

2号墳全景
（北西方向から）

2号眉石付近
（北西方向から）

図版三　桐ケ迫遺跡(2)

2号墳
左側壁
（南西方向から）

2号墳
墳丘内須恵器出土状態
（北東方向から）

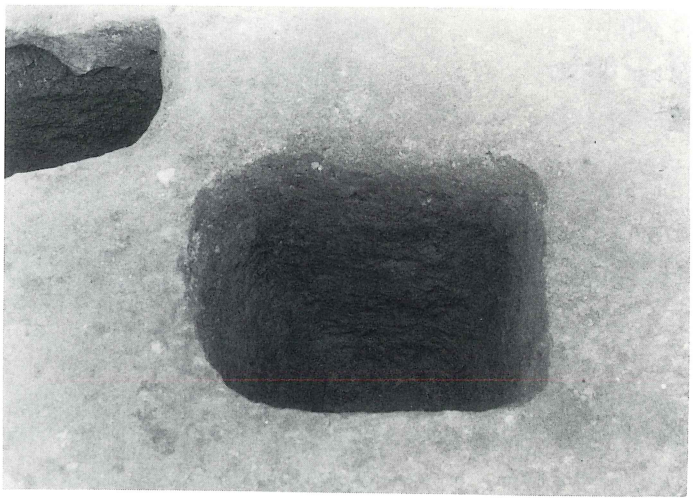
2号墳
墳丘北西範囲
遺物出土状態
（西方向から）

図版四　桐ケ迫遺跡(3)

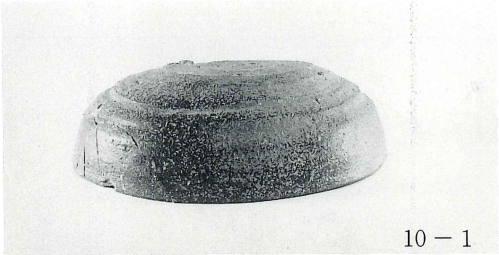
溝１、２全景
（西方向から）

近世墓地
１号墓遺物出土状態
（西方向から）

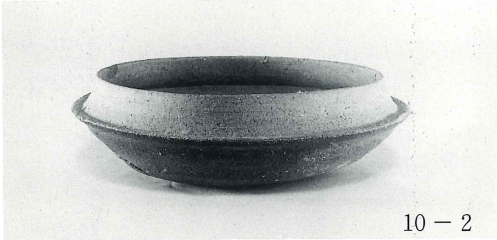
２号墓完掘状態
（西方向から）



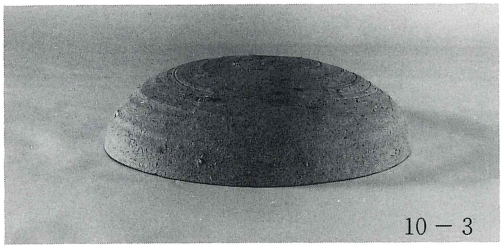
図版五　桐ケ迫遺跡出土遺物(1)

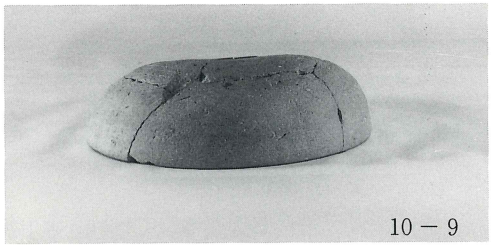

10－1

10－7

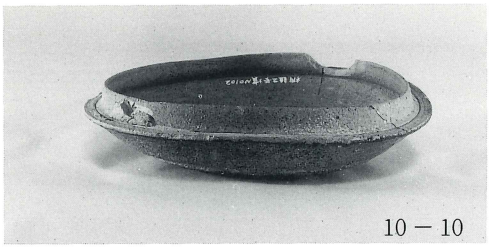

10－2

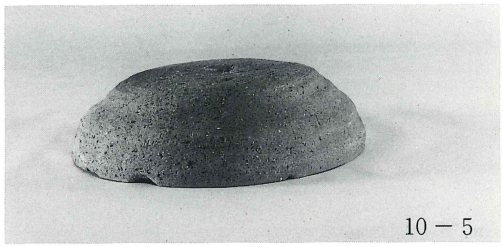
10－8

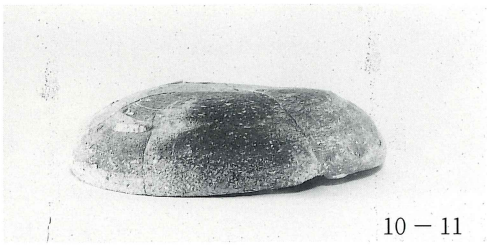

10－3


10－9

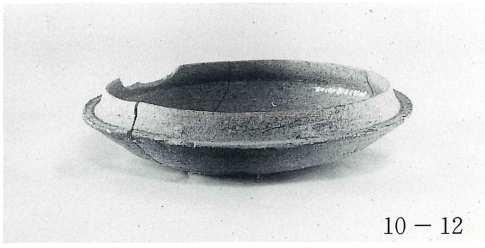
10－4


10－10


10－5


10－11

10－6

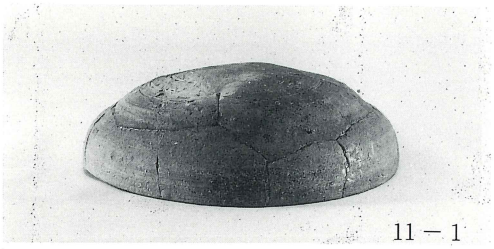

10－12

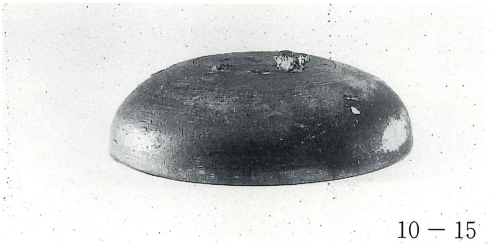
図版六　桐ケ迫遺跡出土遺物(2)

10－13

10－20

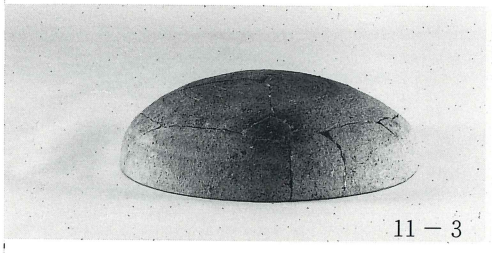
10－14

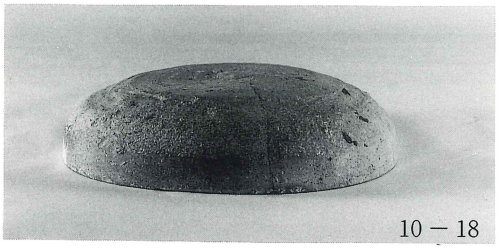

11－1

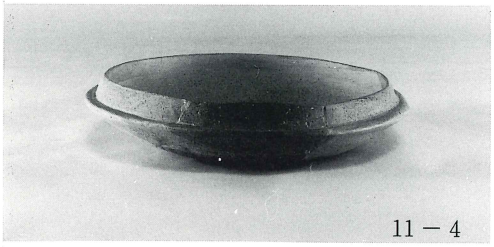

10－15

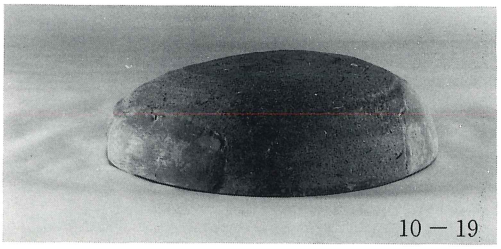
11－2

10－16


11－3


10－18

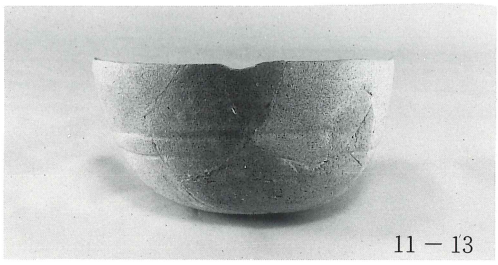

11－4


10－19

11－5

図版七　桐ケ迫遺跡出土遺物(3)

11－6


11－13

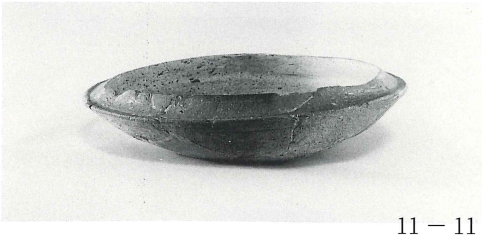
11－8

11－14

11－9

11－15

11－10

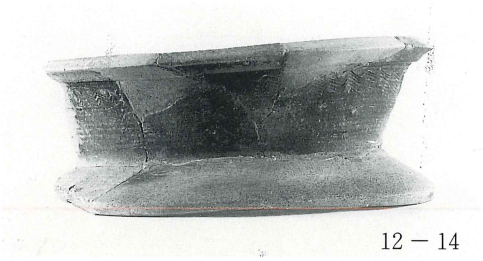

11－11

11－16

11－12

図版八　桐ケ迫遺跡出土遺物(4)

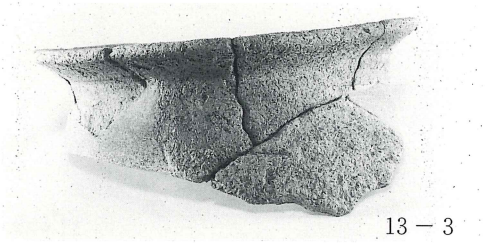
12－1

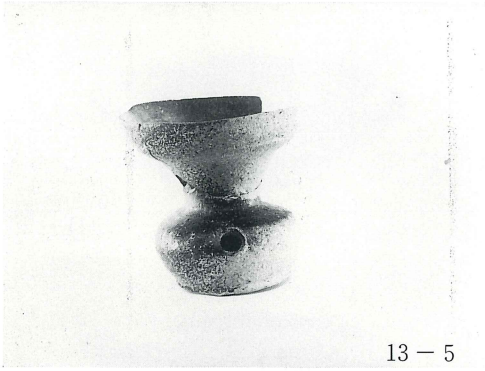

12－14

12－3

13－1

12－6


13－3

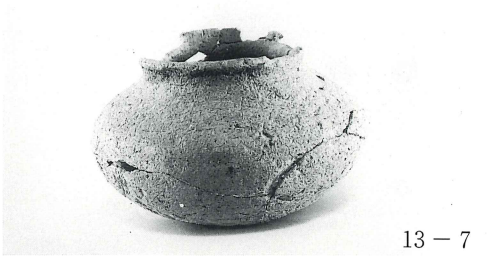

13－5

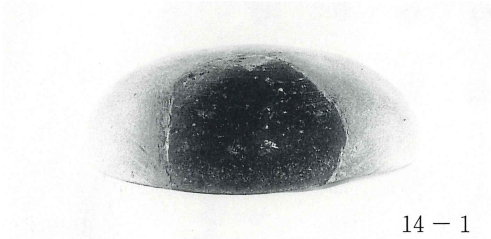
12－7

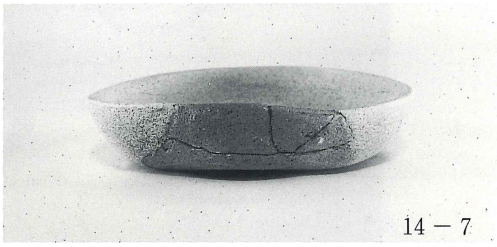
12－8

13－6

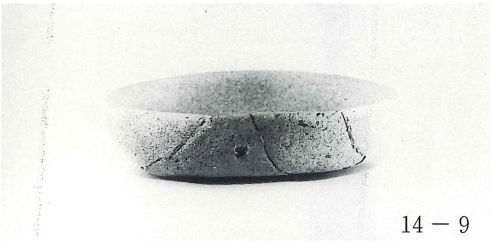
図版九　桐ケ迫遺跡出土遺物(5)

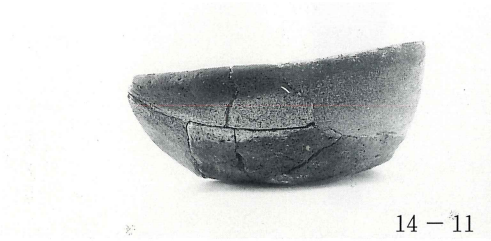

13－7

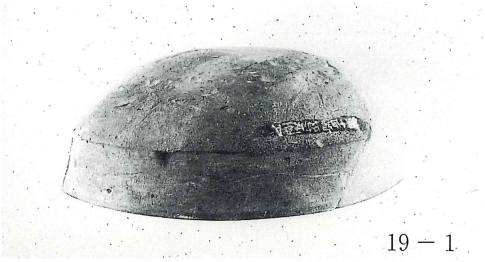

14－1


14－7

14－8

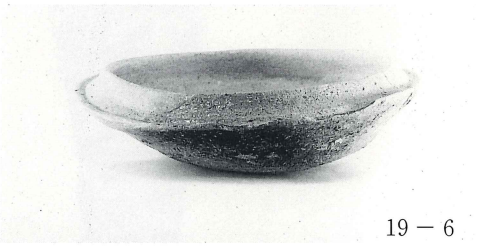

14－9

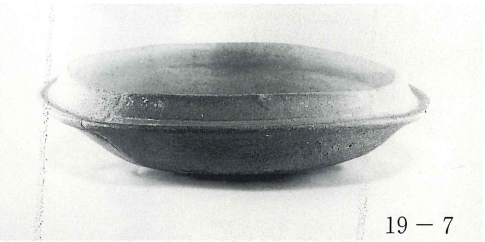

14－11

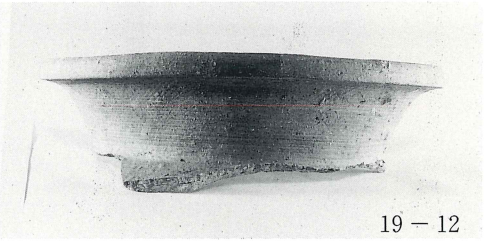

19－1

19－3

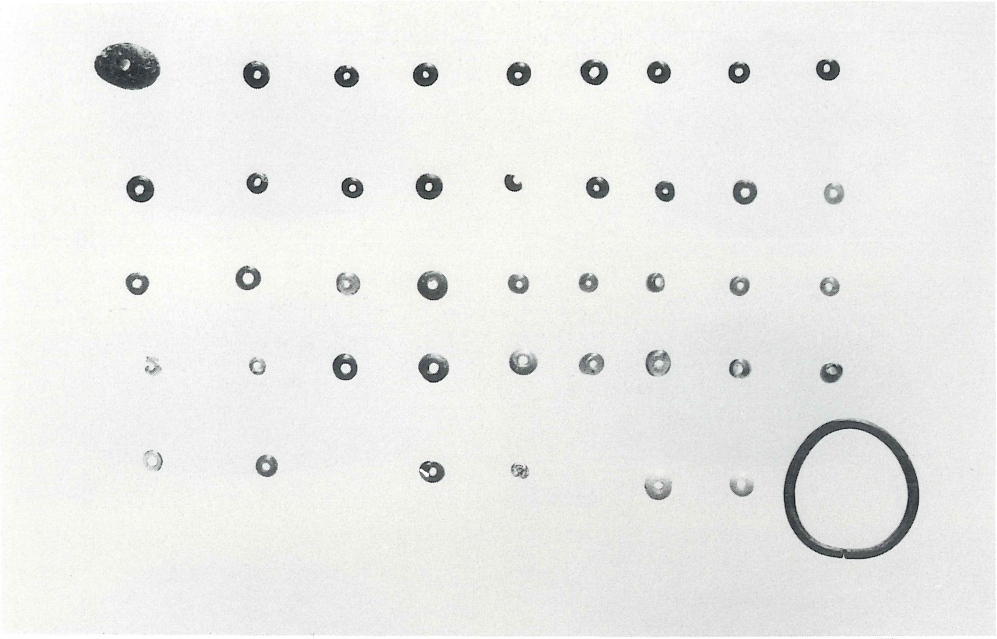
19－5

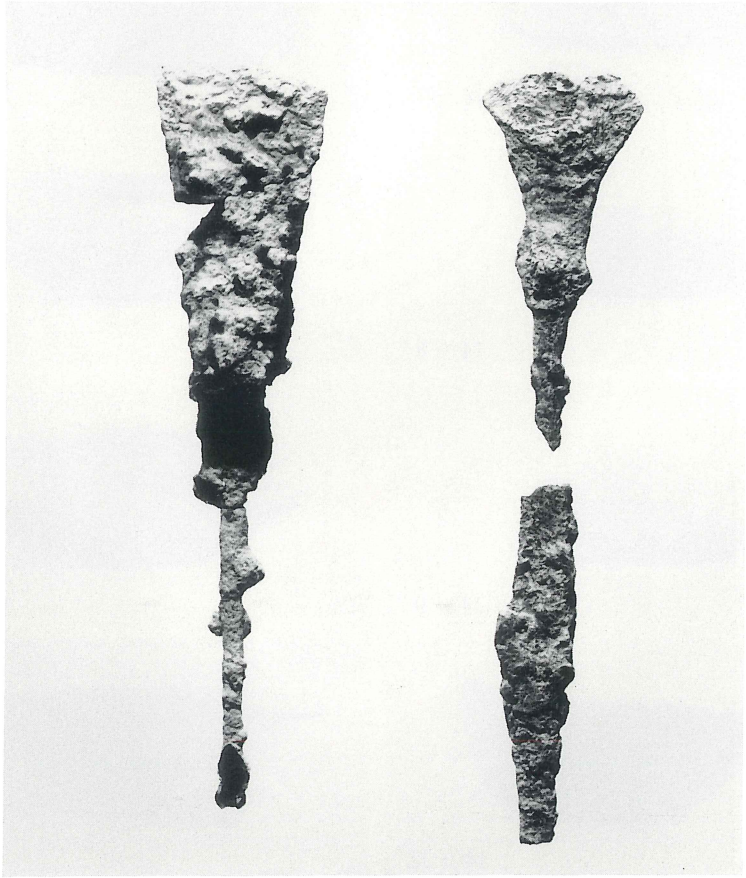

19－6

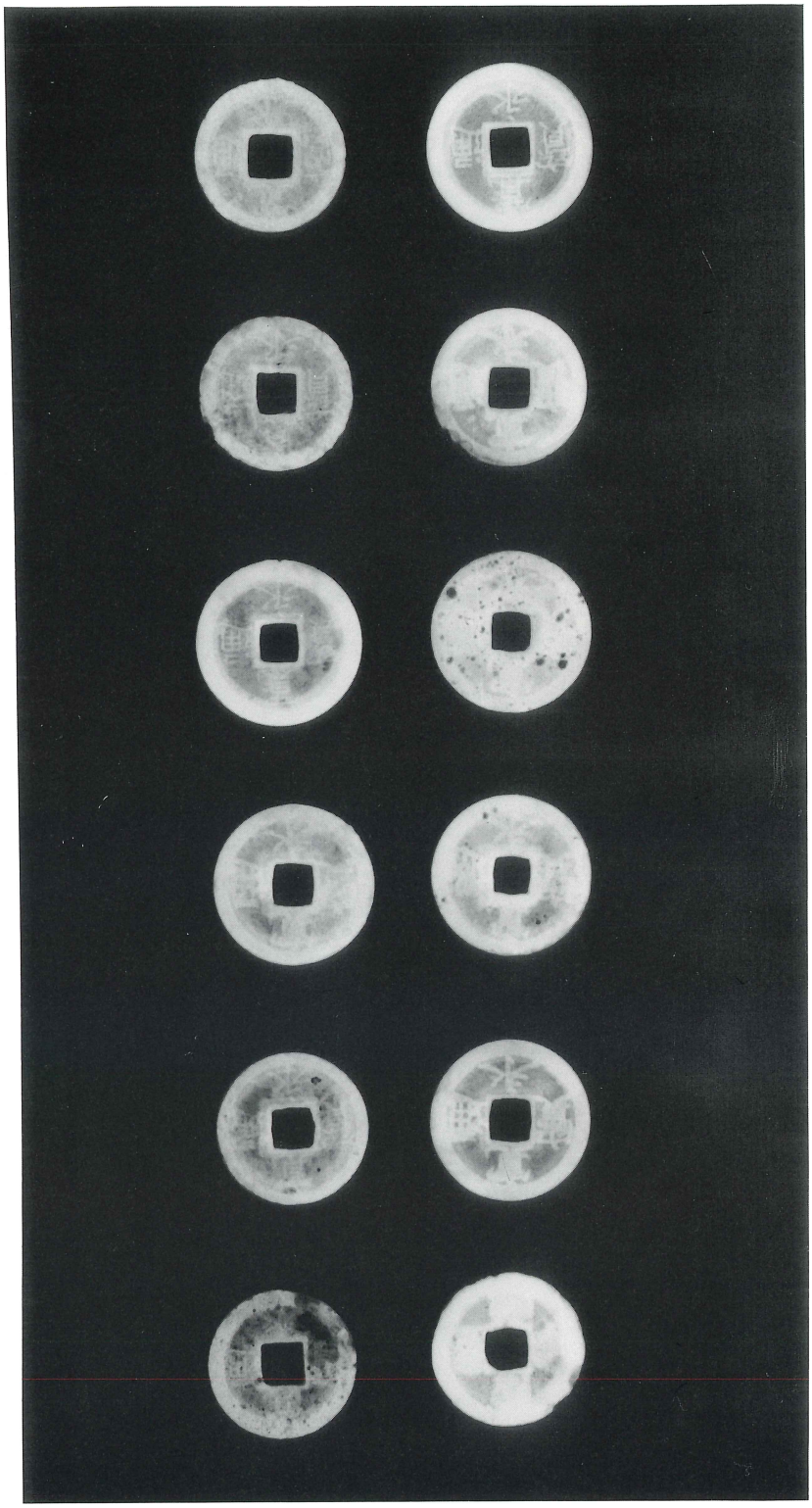

19－7


19－12

図版一〇　桐ケ迫遺跡出土遺物(6)



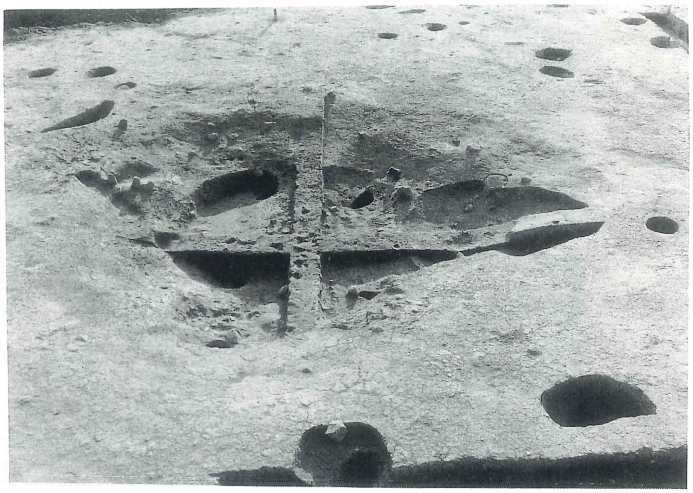




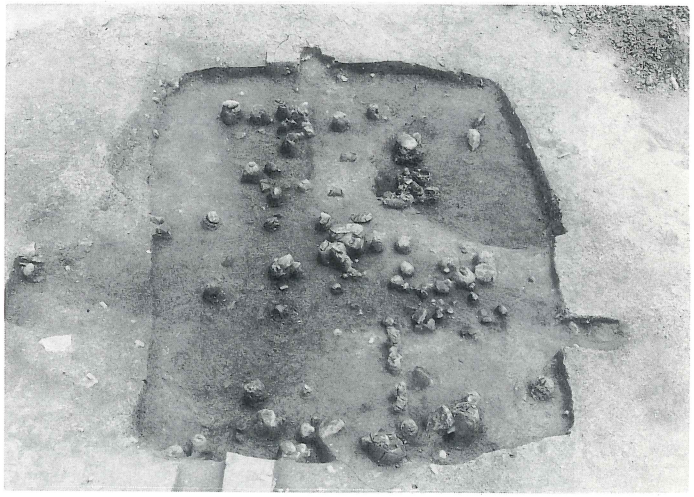
図版一一　桐ケ迫遺跡近世墓地出土銅銭（X線写真）

図版一二　峯添遺跡Ⅰ・Ⅱ区

Ⅰ区
竪穴状遺構
（東方向から）



Ⅱ区
1号竪穴
（北方向から）

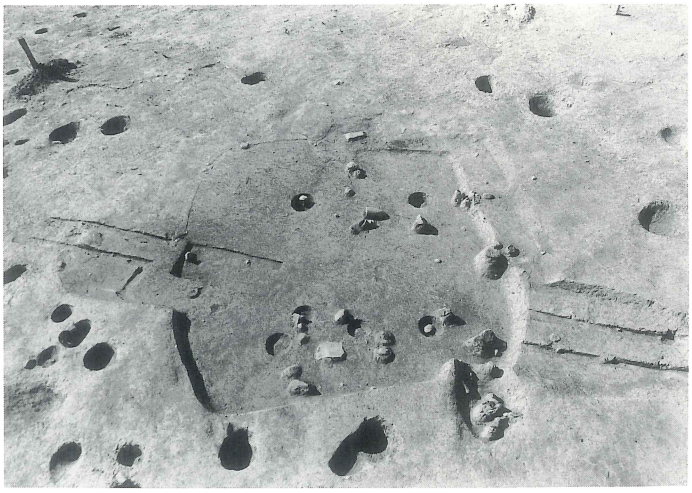


1号竪穴
竈、遺物出土状態
（南方向から）

図版一三　峯添遺跡Ⅱ区竪穴、近世墓地(1)

2号竪穴
（西方向から）

3号竪穴
（東方向から）

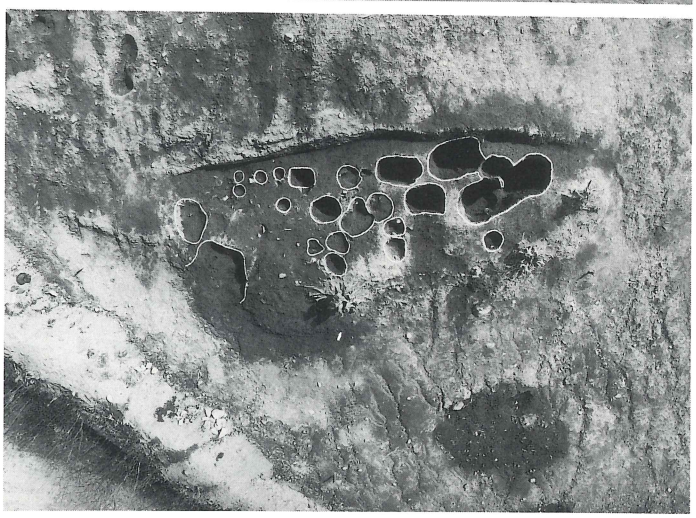


近世墓地
発掘前全景
（西方向から）

図版一四　峯添遺跡Ⅱ区近世墓地(2)

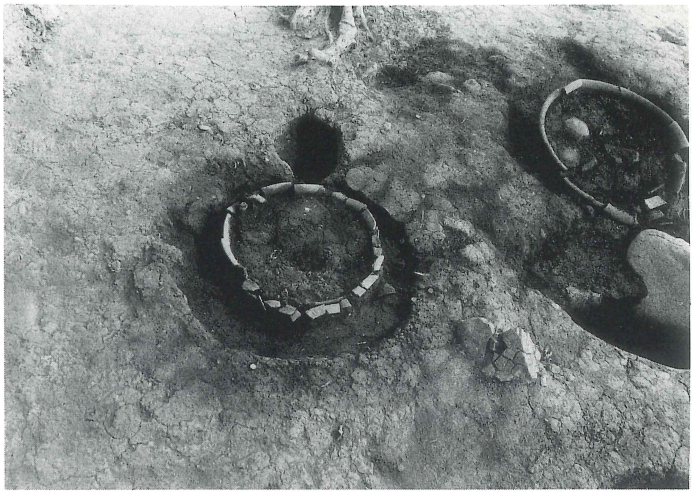
近世墓地全景
（北東向から）

近世墓地
完掘時空撮
（西上方向から）



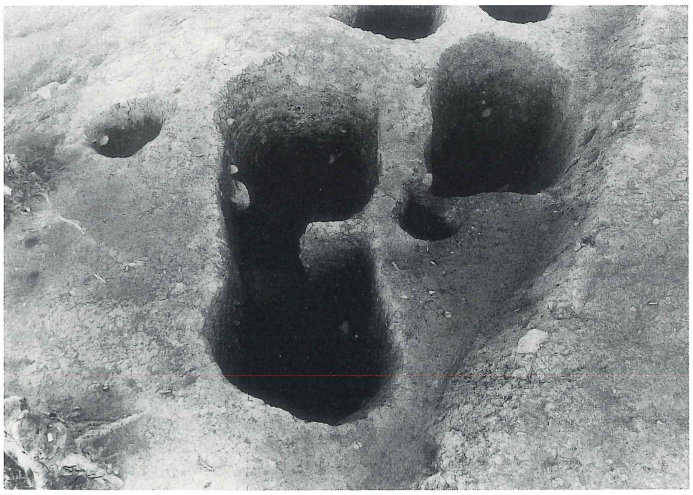
8・7・11号墓
（東方向から）

5・9号墓
（北方向から）

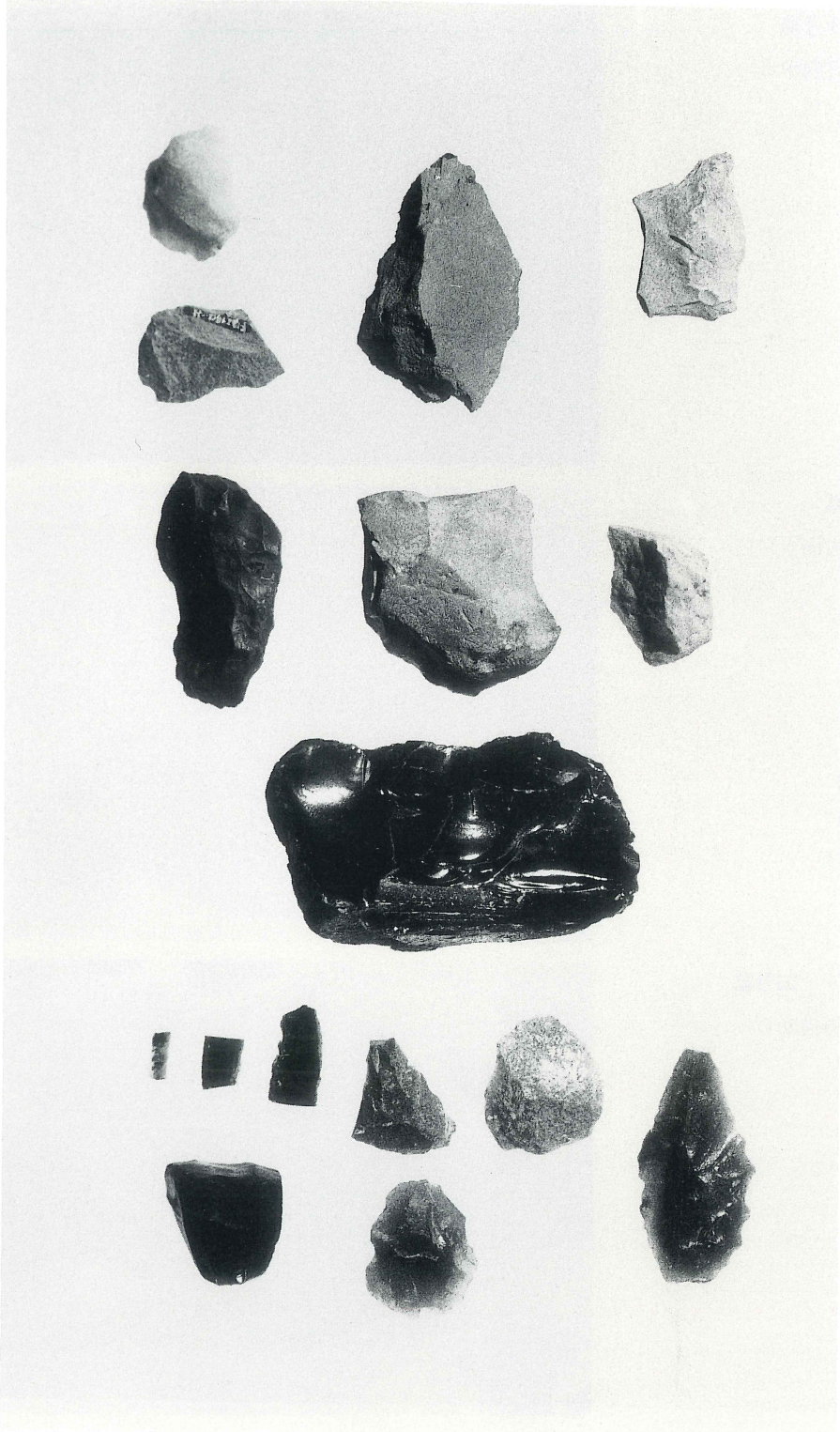


16号墓
（南方向から）

3・6・23号墓
（南方向から）

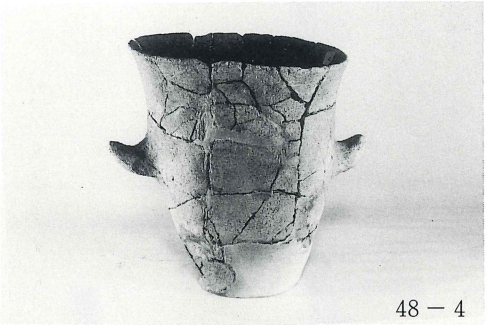


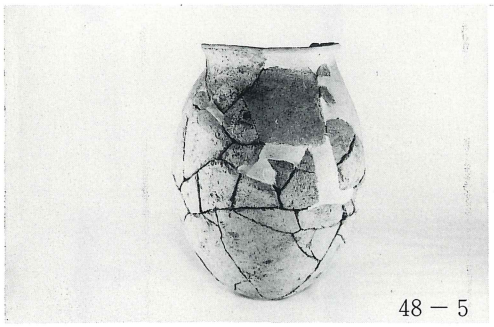
図版一六　峯添遺跡Ⅰ区竪穴状遺構出土石器及び関連資料



図版一七　峯添遺跡Ⅱ区出土遺物

48－3


48－4

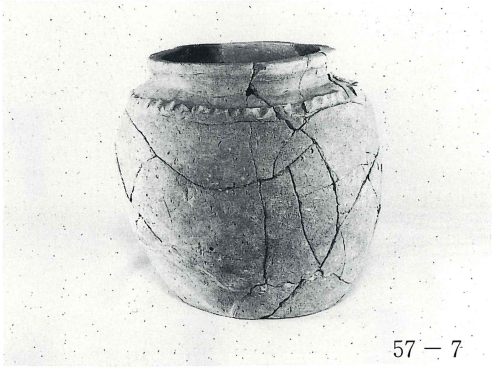

48－5

57－1

57－2

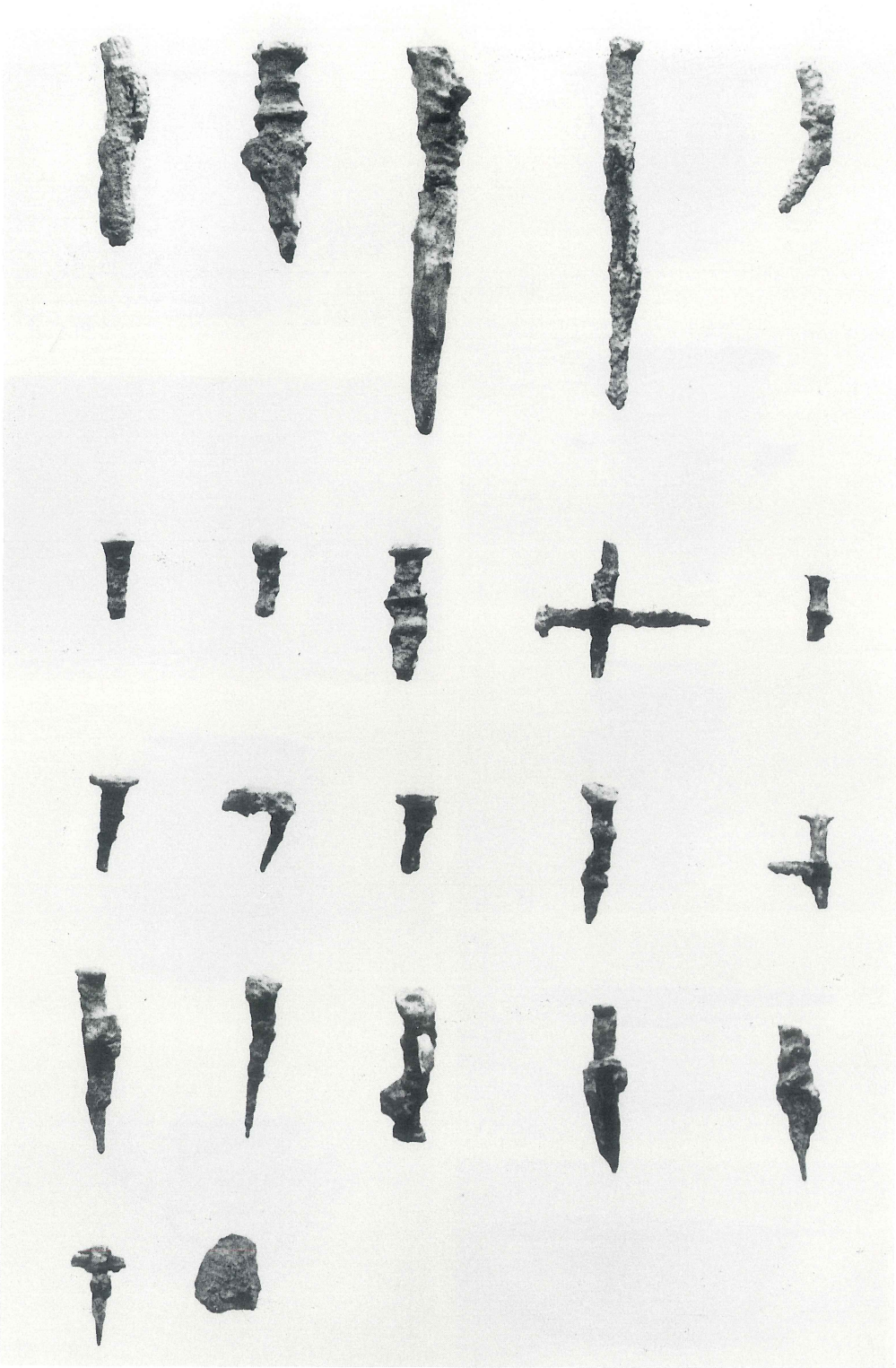
57－3

57－6


57－7

58－23

図版一八　峯添遺跡Ⅱ区近世墓出土釘



一般国道10号
宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

平成6年3月30日

編　集　大分県教育庁管理部文化課
発　行　大分県教育委員会
印　刷　佐伯印刷株式会社